羽咋市柳田シャコデ遺跡

能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書 III

1984

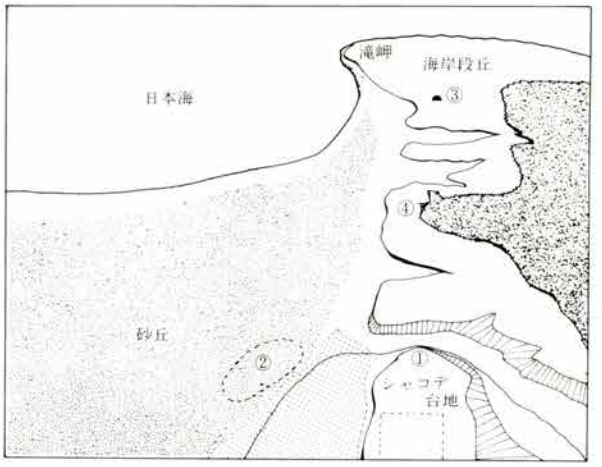
石川県立埋蔵文化財センター

羽咋市柳田シャコデ遺跡

能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書 III

石川県立埋蔵文化財センター

① シャコデ遺跡
② 寺家遺跡
③ 滝大塚古墳
④ 気多神社（現）



例　　言

1　本書は、能登海浜道建設工事に関する埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書第3集である。

2　本書に収録したのは、石川県羽咋市柳田町に所在する柳田シャコデ遺跡である。

3　調査は、石川県土木部有料道路課の委託を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　調査を河村好光が担当した。調査にあたって杉野洋一郎・中村英洋・中山純一氏の協力を得た。

5　遺物の整理は、石川県埋蔵文化財協会に委託した（担当―河村裕子・尾田裕子・小屋玲子・河村真紀・黒田和子）。

6　本書の作成は、河村好光（現県立金沢向陽高校教諭）がおこなった。

7　本書の作成にあたって、図版・写真の一部を小嶋芳孝氏より提供いただいた。

8　調査実施にあたっては、地元柳田町有志の協力を受けた。また、羽咋市教育委員会の助力を受けた。

9　調査から執筆に至るまで多くの方々の御指導・助言をいただいた。御芳名を記して感謝の意を表したい。

浜岡賢太郎・橋本澄夫・浅香年木・吉岡康暢・小笠原好彦・高野太一郎・平田天秋・田嶋明人・谷内尾晋司・小嶋芳孝・福島正実（敬称略）

目　　次

第Ⅰ章　位置と歴史的環境……2
第Ⅱ章　遺構と遺物……7
　第1節　縄文時代の遺構と遺物……7
　第2節　弥生時代の遺構と遺物……14
　　1．1号住居址……14
　第3節　六・七世紀の遺構と遺物……15
　　1．遺構群の概要……15
　　2．竪穴住居址（その1）……16
　　3．大形竪穴状土坑……30
　　4．竪穴住居址（その2）……40
　　5．掘立柱建物……44
　　6．その他の遺物……54
第Ⅲ章　考察――六・七世紀集落の検討……56
第Ⅳ章　結　　び……63
　　1）居住集団の性格……63
　　2）集落の位置……64
　　3）集落の形成・画期・廃絶……65

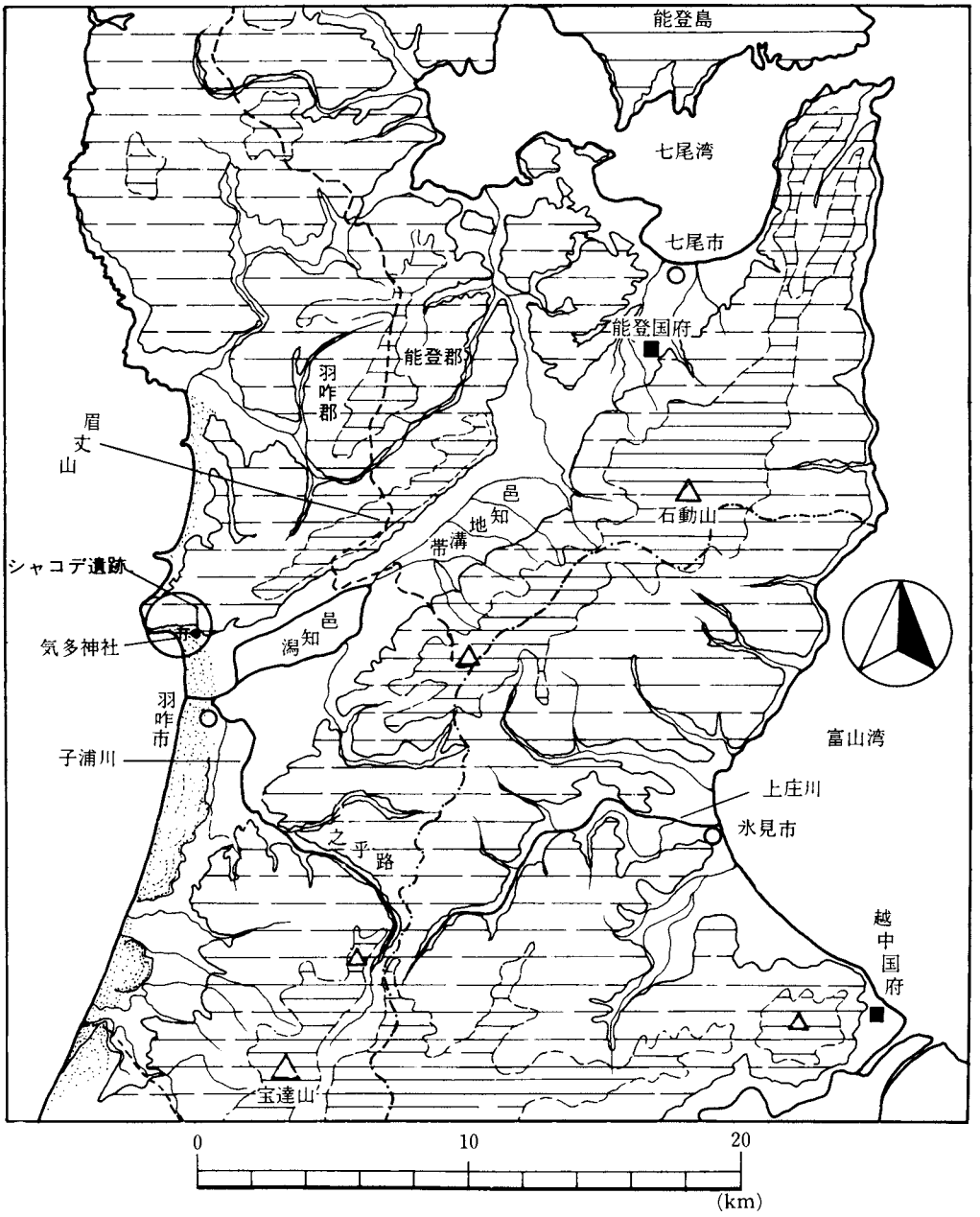


図1　柳田シャコデ遺跡の位置

第Ⅰ章　位置と歴史的環境

日本海にこぶのように突出する眉丈山南端を繞囲する山裾に形成された海岸段丘とその南にとりつく砂丘は、能登半島の付根にあって、遺跡の集中する地帯をなしている。「能登半島縦貫道」は、南から砂丘上を走り、海岸段丘を横断して北上する。ここに報告する遺跡は、海岸段丘の一角、柳田台地の西端に所在し、上記道路により消滅した遺構群である。名称はたんに〝柳田シャコデ遺跡〟と呼ぶこととしたい（図３―ⓓ）

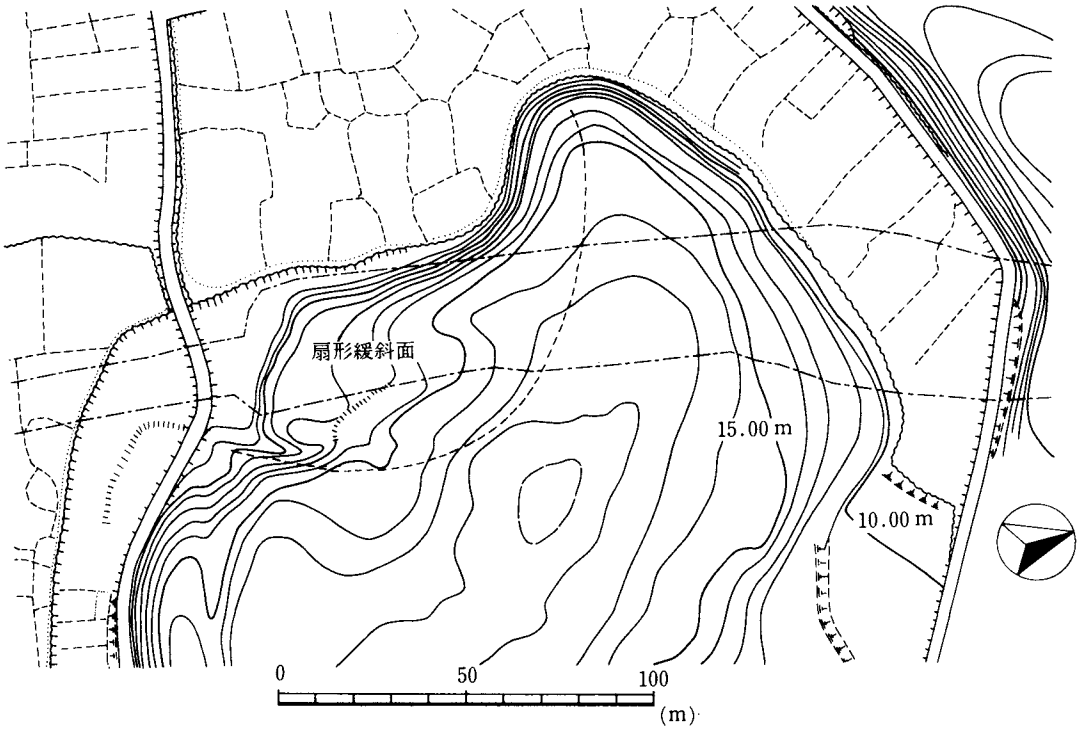


図 2　柳田シャコデ遺跡の調査範囲

柳田台地　現在の羽咋市柳田町の集落の背後に柳田台地と呼ばれる海岸段丘が開けている。台地上には、縄文時代、弥生時代、古墳、律令時代の各遺構が重複していることが確かめられている。台地には中央に谷が走っており、これを境に西をシャコデ台地、東をうわの台地と呼んでおこう（図３）。

縄文時代の遺構は、シャコデ台地の東、現在は簡易グランドとなっている箇所に確認された（柳田台地遺跡）。円形、または長方形の土坑で、径が 0.8 m～1.5 m程度。いずれも壁が直立し、底面に小ピット（クイの痕）が検出された（1979 年羽咋市調査）。出土土器は少量であるが、いずれも縄文時代前期後葉に属するものであった。性格は、獣を捕獲する目的で掘りこまれた〝おとし穴〟と考えられる。なお、シャコデ台地のさらに東、谷をこえた台地（寺家台地）上にも縄文時

代前期から中期前葉を中心とした遺構があり(寺家オオバタケ遺跡)、ここでも同様の土坑が発見されている。

弥生時代については、うわの台地、シャコデ台地共に確認されている。うわの台地では、弥生時代後期後葉(うわの式)の住居址数棟が調査されている(柳田うわの遺跡)。シャコデ台地でも、柳田台地遺跡の一角に弥生時代末期(月影式)の遺構が検出されている。柳田台地の上に大規模な、弥生時代後期から末期にかかる集落が所在していたものとみられる。なお、寺家オオタ地区でも、弥生時代後期の水路跡が発掘されている。古墳・律令時代については項を改めて述べることとする。

シャコデ廃寺　シャコデ台地の西の部分、眼下に砂丘(寺家遺跡)を見降すように、羽咋地域唯一の古代寺院址=シャコデ廃寺がある。シャコデとは〝釈迦堂〟に由来するとされ、柳田町観音堂には平安後期を降らぬ木彫仏像数体が安置されている事実もある。また、気多大社神領の柳田側の境を「大寺」までとしているように、寺の存在は遺構以外からも推察される。

1971年、『羽咋市史』編さんにともなって、塔跡の調査が実施され基壇跡と心礎の抜き穴などが確認された。三重の塔と推定されているが、削平を受け、平安後期には別の建物が掘り建てられていることが判明した。心礎石は、現在、柳田町善正寺にある。塔の建立の時期は、瓦の出土がなく判然としないが、心礎が深く掘りこまれていた可能性が高く、奈良時代のおそくない時期と推定されている。

ところで、同台地上で瓦がしばしば出土し、高野太一郎氏がそれを保管している。また、シャコデ遺跡でも耕作土中に数片の瓦が出土している(後述)。これらは、いずれも9・10世紀ごろに降る可能性が強いものである。したがって、シャコデ廃寺の変遷をどうとらえるかが、次の問題となってくる。塔を9・10世紀に下げることが無理であることから、おそらく8世紀に建立された寺院が、有為変転をとげながら10世紀ごろまで存続する、と推定してよかろう。『文徳実録』には、「気多神宮寺」に常住僧三人を置く(855年)という記事があり、ある時期のシャコデ廃寺が「気多神宮寺」に相当する可能性が高い。

寺家遺跡　寺家遺跡は、シャコデ台地の南、砂丘上に営まれた大規模な遺跡である。シャコデ遺跡同様、能登半島縦貫道路建設にともなってその一部が発掘調査された。詳細は、同遺跡報告書にゆずらなければならないが、6・7世紀から古代・中世にいたる集落をベースに、特殊な祭祀遺構と祭祀遺物が出土している。盛期は、奈良時代から平安時代中葉とされる。

とくに注目されるのは、墨書土器に「宮厨」なるものが出土し、気多大社ときわめて密接な関係にあるとみられることである。気多大社は、『延喜式』に記された、能登唯一の大社である。すでに越中国守大伴家持が「気多神宮」に参拝したことが天平20年(748)に知られ、平安初期以降、社格が急上昇する。寺家遺跡と気多大社との関係は今後明らかにされてゆく見通しである。

窯跡　柳田台地の背後丘陵には、柳田古窯跡群とよばれる窯跡群がある。6世紀の中葉以前よ

り操業が開始され、下限は8世紀前半代とみられる。現在のところ、テンジク窯、タンワリ窯、ウワノ窯、五郎兵山窯の四ケ所が確認されており、このうち、ウワノ窯には、採収品より6世紀の前葉から中葉にかかる時期の窯の存在が確実視されている。旧羽咋郡地域では唯一の古墳時代窯跡群であり、この周辺地域の生業を考える上で重要な意味をもっている。

古墳群　シャコデ遺跡の周辺には、三つの古墳群がある。

柳田台地の背後丘陵には、柳田古墳群がある。前方後円墳二基(山伏穴1号墳・うわの3号墳)、大型円墳（宮の山古墳）を中核とする、五世紀末前後から6世紀代の古墳群である。

シャコデ遺跡より西1.5kmには、大型円墳滝大塚古墳（径70m．五世紀前半）をはじめとする滝古墳群がある。また、滝崎の北、柴垣地区にも前方後円墳二基を含む柴垣古墳群が所在している。

これらの古墳群は、五世紀代のものを含むが、中心は六世紀代にあり、6世紀の前葉から中葉にかかるころには、すでに横穴式石室に移行していること、T字形横穴式石室を含むことなどに特色がある。海の道を通じて、先進的な葬法がもたらされていることとともに、これらの被葬者が、海に密接に結びつく首長層であることを想起する必要がある。このことは、シャコデ遺跡の性格ともかかわってくる。なお、滝岬には六世紀末以降の群小古墳群（オーショウジ古墳群）がある。

参　考　文　献

浜岡賢太郎・浅香年木・吉岡康暢・田嶋明人・谷内尾晋司・小嶋芳孝他『羽咋市史』原始・古代編　1973
小嶋芳孝　『寺家』1978年度調査概報　1979　石川県立埋蔵文化財センター
小嶋芳孝　『寺家』1980年度調査概報　1981　石川県立埋蔵文化財センター
河村好光　「滝古墳群」『石川考古学研究会々誌』24号　1981

註

i）1）圃場整備区域

Ⅰ－52年度実施区域

Ⅱ－53年度実施区域（一の宮遺跡A地区）

Ⅲ－54年度実施区域（一の宮遺跡B地区）

ii）能登縦貫道および圃場整備に伴なう調査区域

ⓐ-1－寺家ブタイ地区（不動院関連遺構）〔53年度調査〕

ⓐ-2－寺家ブタイ地区（　〃　）〔52年度調査〕

ⓑ －寺家チョウエイジ地区（中・近世）〔52年度調査〕

ⓒ －寺家オオバタケ地区（縄文）〔52年度調査〕

ⓓ －柳田シャコデ地区〔54年度調査〕

ⓔ －寺家オオタ地区（縄文・弥生・律令）〔53年度調査〕

ⓕ －寺家オオタ地区〈排水路部分〉〔52年度調査〕

ⓖ －寺家スナダ地区第1調査区（律令）〔53年度調査〕

ⓗ －寺家祭祀地区〔53年度調査〕

ⓘ －寺家スナダ地区第2調査区〔55年度調査〕

iii）「石川県遺跡地図」（1974，3）に記入された関連遺跡の範囲（平面的拡がりを有するもののみ、古墳・窯跡・墳墓等を除く）

㋑－若宮屋敷（社跡）

㋺－寺家遺跡（包含地）

㋩－柳田シャコデ廃寺跡（寺院跡）

㋥－柳田台地遺跡（弥生末期、奈良時代、縄文時代）

㋭－柳田うわの遺跡（弥生末期）

㋬－釜屋・新保・猫ノ目遺跡（弥生時代）

iv）古　　墳

〔柳田古墳群〕

1　うわの1号墳（横穴式石室）

2　うわの2号墳

3　うわの3号墳（前方後円墳、全長39 m）

4　うわの4号墳

5　うわの5号墳

6　うわの6号墳

7　山伏穴1号墳（前方後円墳、横穴式石室、全長49 m）

8　山伏穴2号墳

9　宮の山古墳（径約40 m）

10　テンジク古墳

11　セックデン1号墳（消滅）

12　テンジク横穴墳（2基）

〔滝古墳群〕

1　滝1号墳

2　滝2号墳

3　滝3号墳（半壊）

4　滝4号墳推定地（消滅）

5　滝5号墳（消滅、径約50 m）

6　滝6号墳

7　滝7号墳推定地（消滅）

8～11　古墳狀隆起

12　滝大塚古墳（頂部削平、径約70 m）

13　滝白山神社古墳（半壊）

14・15　気多1・2号墳（古墳？）

v）窯　　跡

イ　柳田五郎兵衛山1号窯（7世紀中葉～後葉）

ロ　柳田テンジク窯（7世紀初頭）

ハ　柳田タンワリ窯（6世紀後葉、7世紀中葉～後葉）

ニ　柳田ウワノ窯（6世紀前葉、7世紀末）

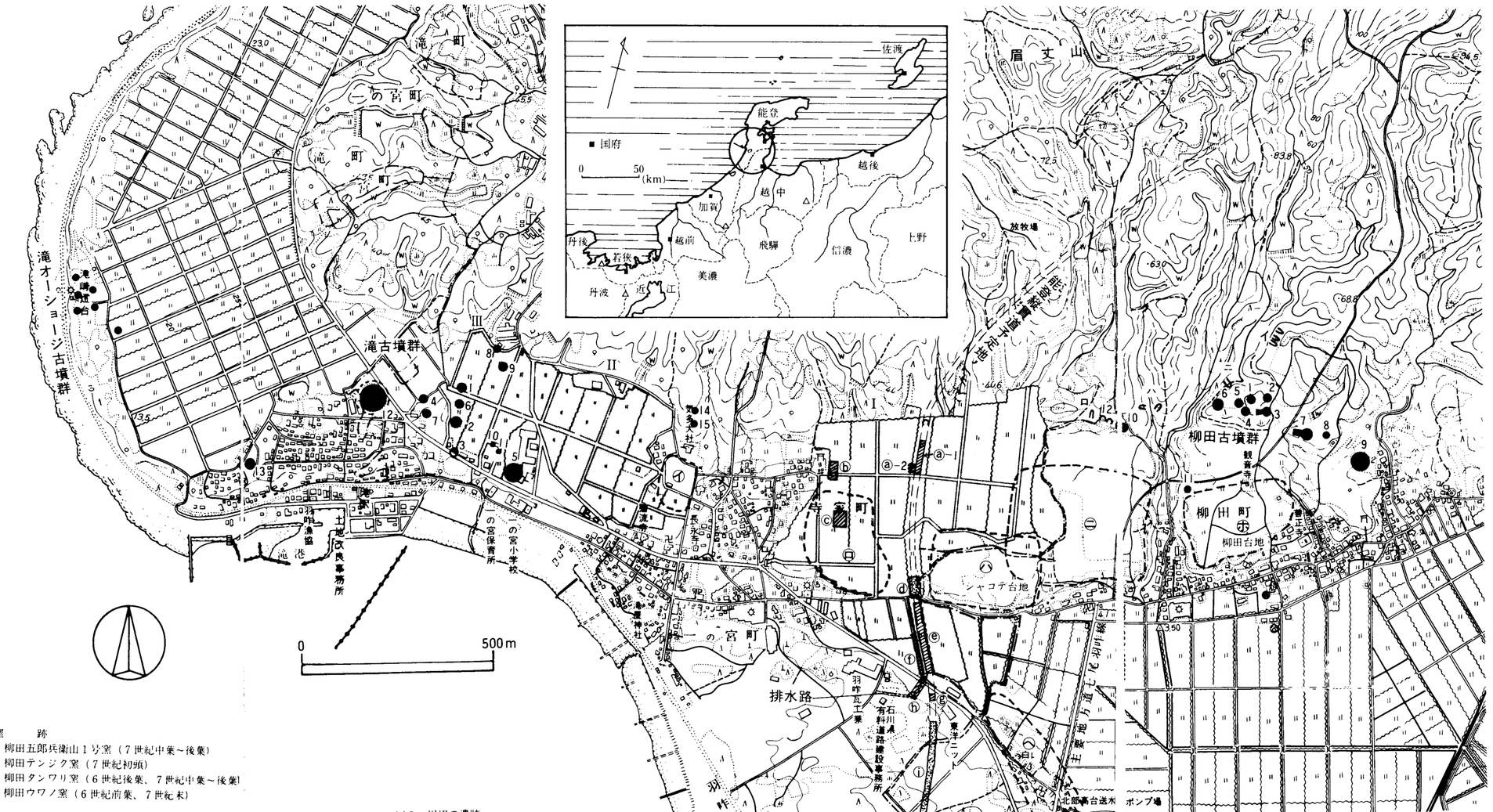


図3　周辺の遺跡

第II章　遺構と遺物

第1節　縄文時代の遺構と遺物

(1) 土　　坑（図4）

縄文時代とみられる土坑は、49基を数える（図5～8、表1）。

形態　土坑のプランは、長方形、円形、惰円形などさまざまである。内訳は、長方形(隅丸含)19基、円形17基、惰円形9基、その他4基を数える。

この内、34基の土坑には、底面に径10cm前後から20cm程のクイ痕と思われる円筒状のピットを確認した。クイ痕は一本のものがもっとも多いが、2本以上も若干見られる。これらクイ痕を検出した土坑は、獣を捕獲する目的で設けられた〝おとし穴〟と考えられるものである。では、他の11基についてはどうであろうか。まず、土坑13は、土坑12に切られていたが、削平を考慮しても両者の深さに隔りがありすぎるので除外して考えたい。あとの10基は、土坑4・27・32・36等にみる通り小型のものが多い。おとし穴と考えるものについての共通した特徴は、壁がほぼ垂直にたちあがり、底面が水平になるよう留意されていることであるが、この二点は、ほぼこれらについてもいえることである。土坑21のように小型でもクイ痕の検出したものがあるので、やはりおとし穴の一種と推定しておきたい。

土坑17・20・30・31等は、ほとんど深さがない。遺跡が相当に削平されており、したがって、正確には、もとの規模を復元し得ないのであるが、もっとも大型のもので長径1.8m・短径0.9m、深さ1.8mを計る（土坑24）。プラン・現存規模については表1の通りである。円形プランの中には、底面が段状をなすものがある（土坑26・28）。

状態　次に覆土についてのべてみたい。色調・質は、黒色粘質土から茶カッ色粘質土までにおよぶ。長方形または隅丸長方形プランに黒色あるいは黒カッ色粘質土が多く、円形プランに暗茶カッ色・灰茶カッ色粘質土が多い傾向がつかめる。なお、黒色・黒カッ色粘質土の場合、底までそれが充満していたのに対し、暗茶・灰茶カッ色粘質土の場合は、下方へゆくと若干淡い色に次第に変化しているように観察された。さきに、クイ痕が検出されなかった土坑をもおとし穴と考えたのであるが、覆土の状態は、基本において変るところがない。

ところで、土坑24は、壁面がえぐれるように内に崩落している箇所が確認できた。他に、地山の軟質な所で部分的に壁が崩落している土坑がかなりあった。覆土の状態をみても、人為的に埋められたものではなく、自然に埋没していったものと理解される。

分布　おとし穴とみられる土坑は48基である。分布そのものは、ほとんど均等に配置されているが、南斜面の土坑48・49以下に検出されないところをみると裾部には作られていないことがわかる。しいていえば、尾根筋に分布密度が高い。おとし穴同士の切り合い関係はみられない。

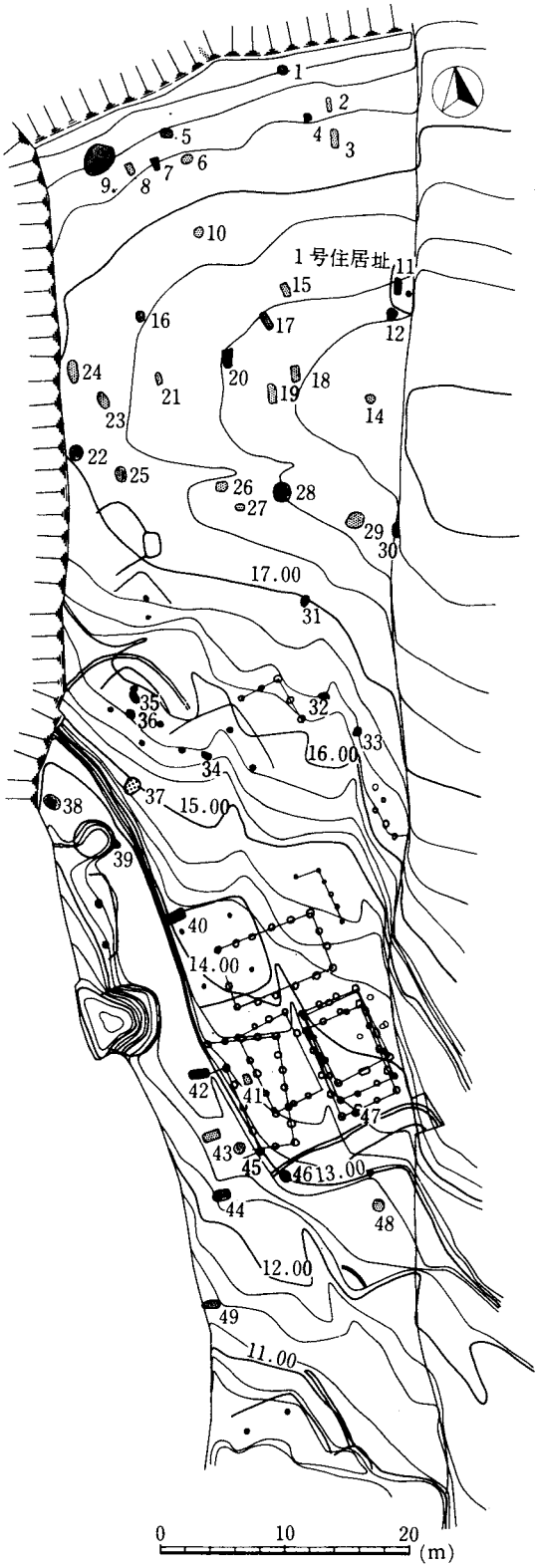


図4　縄文土坑位置図

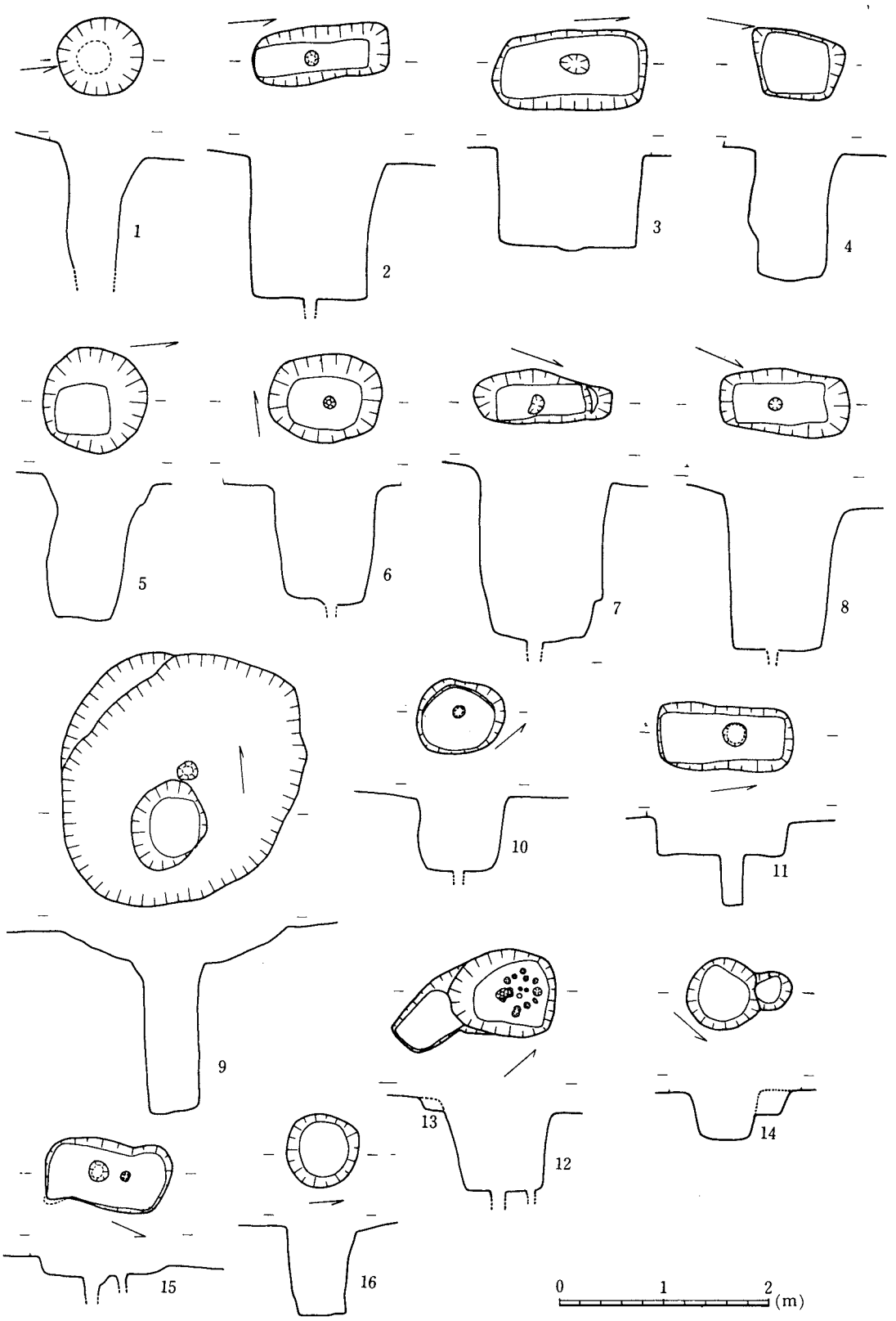


図5　縄文土坑実測図(1)

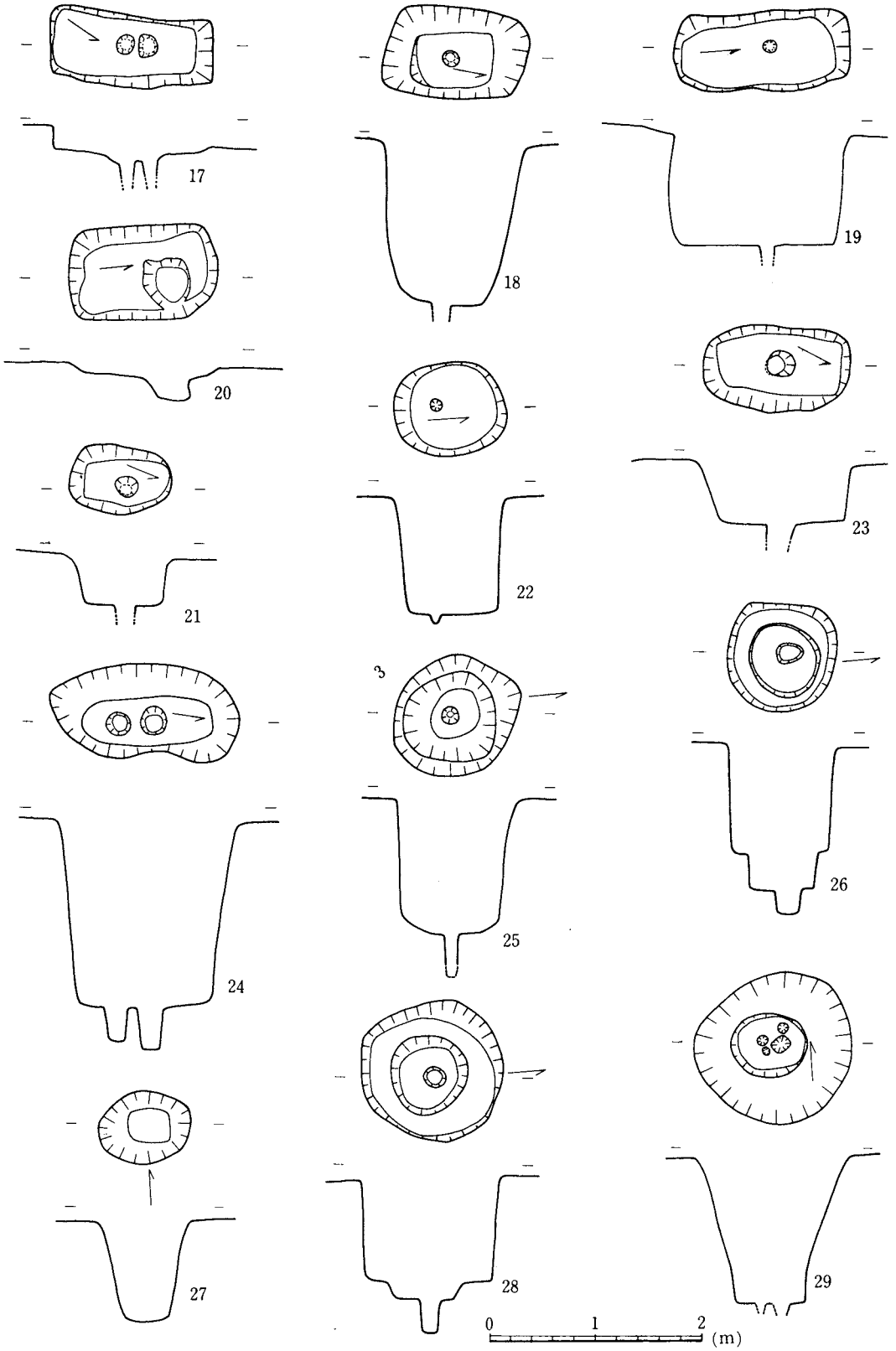


図 6　縄文土坑実測図(2)

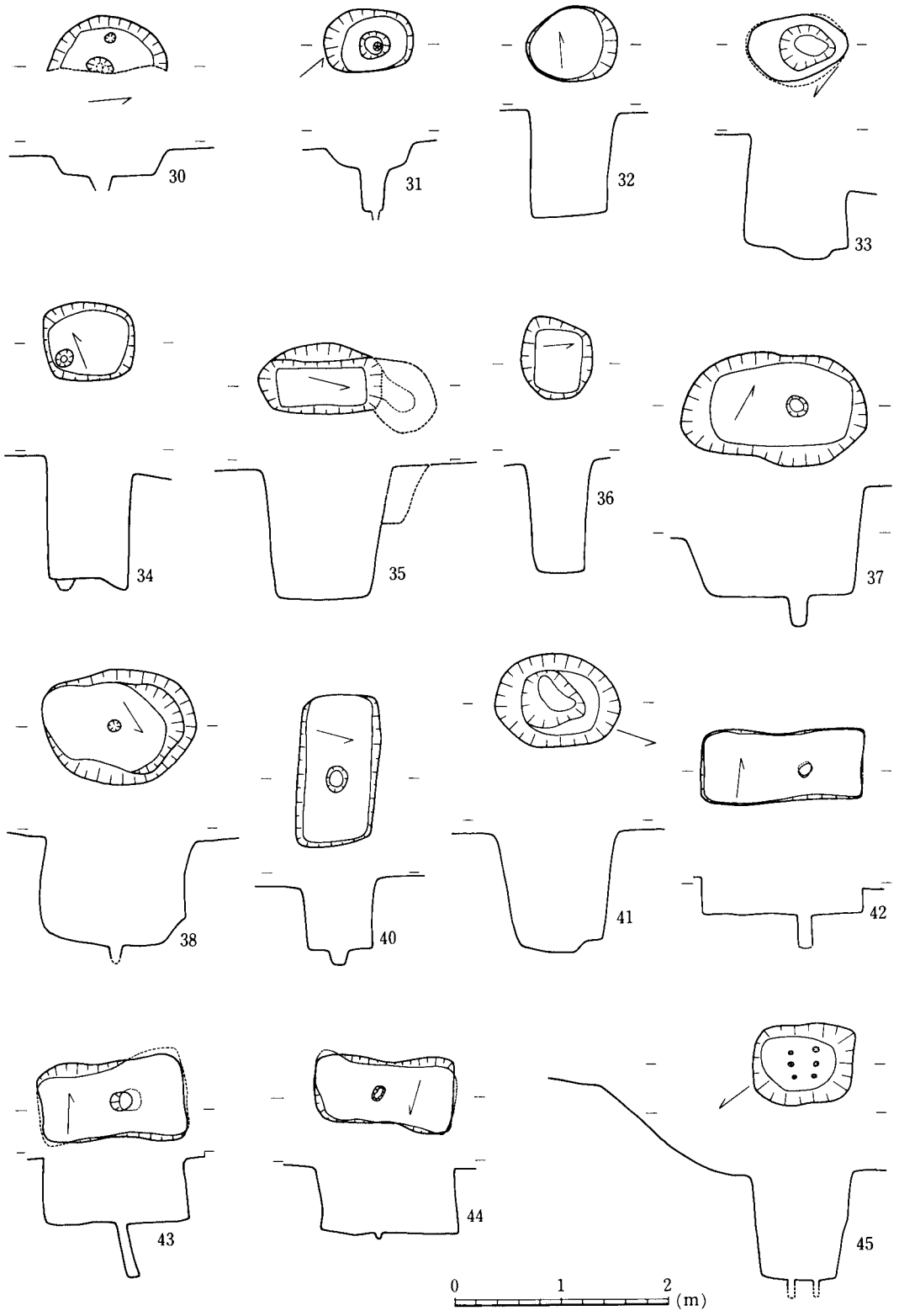


図 7　縄文土坑実測図(3)

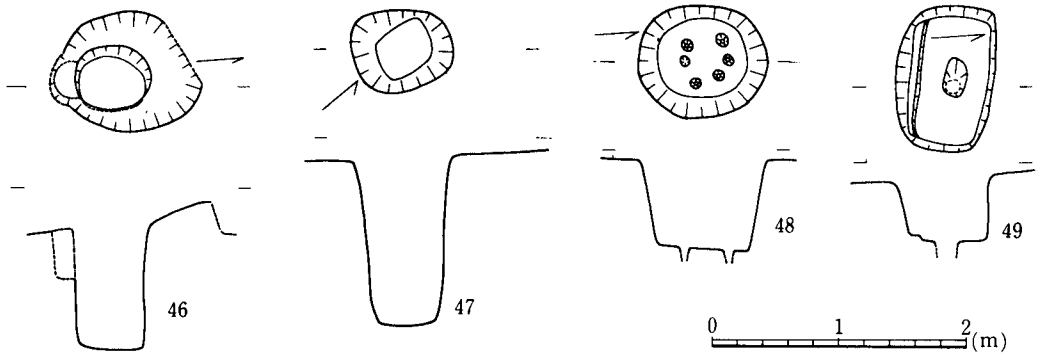


図 8　縄文土坑実測図(4)

長方形・楕円形プランのものは、尾根筋におおむね直交して配置されている。ただし、土坑42～44・49など斜面のものは、必ずしもそうではない（図4）。

遺物（図9）　遺物は小片が若干出土したにとどまる。図示し得るのは、土坑46より出土した二点である。1は、曲線をなす凹線と縄文より成る破片、縄文後期のようにも思えるが前・中期にさかのぼる可能性がない訳ではない。2は、外側に荒い条痕が施されたもので、前期に属するものかと思われる。

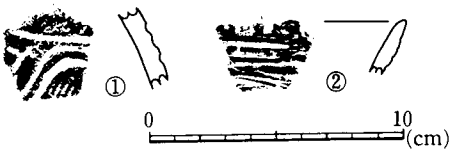


図 9　縄文土器拓影

(2)　小　　括

分回調査した範囲では48基のおとし穴とみられる土坑が確認された。すでに、シャコデ台地の東地区でも同様の土坑が確認[1]され、西のオオバタケ地区でもおそらく同じ目的の土坑が検出されている[2]。これらを点でむすぶと約1kmとなる。厳密に同期かどうかは遺物の出土量が少ないために判定はできないが、少なくともシャコデ台地を中心とした海岸段丘上が、縄文時代前期を中心として、大規模な狩猟場とされていたことは確実である。

表1　縄文土坑一覧表

番号	プラン	平面規模(m)	深さ(m)	クイ痕	特　　徴	覆　　土
1	円形	径0.8m	(1.2+α)m	不明		黒カッ色粘質土
2	長方形	長辺1.3，短辺0.5	1.35	1		暗灰茶カッ色粘質土
3	隅丸長方形	長辺1.5，短辺0.8	0.9	1		〃
4	台形	長辺0.9，短辺0.6	1.2	不明	底のクイ痕は不明	黒カッ色粘質土，縄文土器細片出土
5	円形	径1.0	1.4	0	底の平面プランは隅丸方形	
6	楕円形	長径1.1，短径0.9	1.2	1		灰茶カッ色粘質土
7	隅丸長方形	長径1.3，短径0.5	1.65	1		暗灰茶カッ色粘質土
8	隅丸長方形	長径1.25，短径0.65	1.45	1		〃　〃
9	楕円形	長径2.75，短径2.35 （〃 0.9，〃 0.7）	1.8	0	2段掘り	黒カッ色粘質土

番号	プラン	平面規模(m)	深さ(m)	クイ痕	特徴	覆土
10	不正円形	長径0.85, 短径0.7	0.7	1		茶カッ色粘質土
11	長方形	長辺1.3, 短辺0.6	0.4+α	1	クイ痕は深い (0.5m)	黒色粘質土
12	不正円形	長径1.05, 短径0.8	0.85	約15	12, 13は切り合っている	茶カッ色粘質土
13	隅丸長方形(?)	〃0.6+α, 〃0.5	0.1	0	深さが浅い(おとし穴ではない)	黒色粘質土
14	円形	径0.7	0.5	0		〃
15	不正隅丸長方形	長径1.2, 短径0.7	0.2(+α)	2	クイ痕は径0.2と径0.1の大小2	
16	円形	径0.7	0.9	0		暗灰茶カッ色粘質土
17	長方形	長辺1.5, 短辺0.7	0.3(+α)	2	クイ痕は径0.2程度	〃 〃
18	隅丸長方形	長径1.4, 短辺0.9	1.5	1		黒色粘質土
19	〃	〃 1.65, 〃 0.8	1.1	1		〃 〃
20	〃	〃 1.4, 〃 0.9	0.15(+α?)	1(?)	底に径0.4m, 深さ0.2mの穴(→クイ痕?)	暗茶カッ色粘質土
21	楕円形	長径1.0, 短径0.7	0.5	1		黒色粘質土
22	不正円形	〃 1.1, 〃0.9	1.1	1	クイ痕は底の中心よりややずれる	暗茶カッ色粘質土
23	隅丸長方形	長径1.4, 短径0.8	0.6	1		黒色粘質土
24	楕円形	長径1.8, 短径0.9	1.8	2		黒色粘質土, 内壁が崩落
25	円形	径1.2	1.3	1	丸底	暗茶カッ色粘質土
26	〃	径1.0	1.4	1	2段掘り	〃 〃
27	楕円形	長径0.9, 短径0.7	0.95	0		黒色粘質土
28	円形	径1.35	1.2	1	2段掘り	暗茶カッ色粘質土
29	〃	径1.5	1.4	4		〃 〃
30	〃	径1.1	0.25	3(+α)	部分的に検出(東側は調査区域外)	暗灰茶カッ色粘質土
31	隅丸長方形	長径0.85, 短径0.6	0.65	1		黒色粘質土
32	不正円形	長径0.9, 短径0.7	1.0	0	底は平ら	暗灰茶カッ色粘質土
33	〃	〃 0.9, 〃 0.6	1.1	1		黒色粘質土
34	隅丸方形	長径0.9, 短径0.7	1.2	1	クイ痕は底の端に位置する	暗灰茶カッ色粘質土
35	長方形	〃 1.2, 〃0.65	1.25	0		黒色粘質土
36	不正円形	長径0.8, 短径0.7	1.05	0	底の平面プランは隅丸方形	暗灰茶カッ色粘質土
37	楕円形	〃 1.75, 〃 1.1	1.0	1		茶カッ色粘質土
38	〃	〃 1.4, 〃 1.1	1.0	1		黒色粘質土
39	隅丸長方形	長径1.0, 短径0.5	約0.6	0	深さはやや不明確	茶カッ色粘質土
40	長方形	長辺1.4, 短辺0.7	0.65	1		黒色粘質土
41	楕円形	長径1.2, 短径0.9	1.05	0	底上浅い凹み	茶カッ色粘質土
42	長方形	長辺1.5, 短辺0.7	0.3	1		黒色粘質土
43	隅丸長方形	長径1.35, 短径0.7	0.6	1		〃
44	〃	〃 1.3, 〃 0.8	0.6	1		〃
45	不正方形	〃 0.9, 〃 0.8	1.0	6	クイ痕は並列	茶カッ色粘質土, 縄文土器細片出土
46	円形	長径1.2, 短径1.0 (〃0.6, 〃0.5)	1.0	0	2段掘り	茶カッ色粘質土, 縄文土器片出土
47	楕円形	長径0.8, 短径0.65	1.3	0		暗茶カッ色粘質土
48	円形	〃 1.0, 〃 0.9	0.7	6	クイ痕は円をなす	〃
49	隅丸長方形	長径1.2, 短径0.7	0.5	1		黒色粘質土

注

(1) 1978年に羽咋市教育委員会が調査。

(2) 湯尻修平氏の教示による。

第2節　弥生時代の遺構と遺物

(1)　1号住居址

弥生時代に属する遺構は、1号住居址のみであった。

位置　尾根筋のやや北側に位置し、南緩斜面に占地する6・7世紀の遺構群と立地を異にしている（図4）。柳田台地の別の地点では、弥生時代の住居址・溝等が確認[1]されており、本住居址は、弥生集落西端をなすものとみられる。

構造　後世の削平を受け、また、東半分が調査区外であるため規模を確認することは難しい。プランは、隅丸方形をなすようである。覆土は、茶カッ色粘質土の薄い層を検出するにとどまった。北側の部分では、床面下まで削平されている。

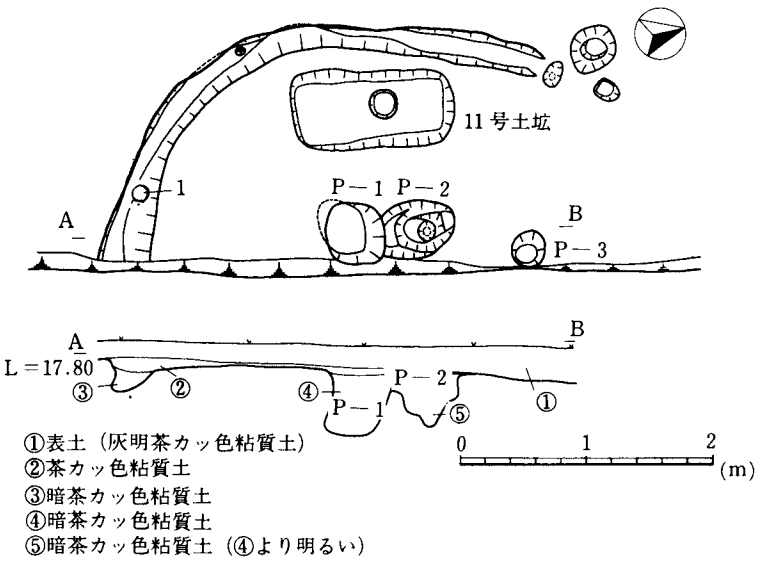


図10　1号住居址実測図

溝は、広い所で幅20 cm、床面からの深さ約15 cmを計る。断面を見ると、床に向ってなだらかに上昇し、南側の壁については、えぐるように内側に入りこんでいる。覆土は暗茶カッ色粘質土。

床面には、ピット3ケ所を検出した。この内、p－1が主柱穴とみなされる。p－1は、径40数cm、深さ50 cmを計る。不整形なピットp－2は、これに切られている（11号土坑は縄文

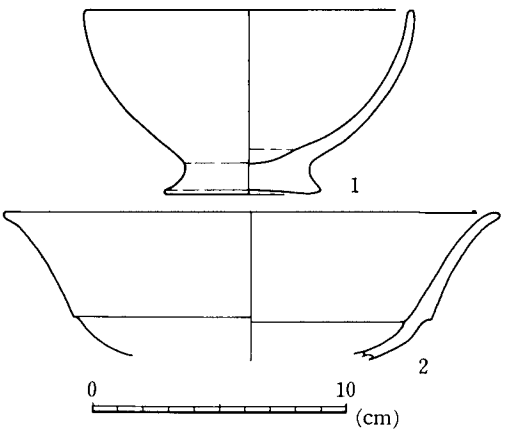


図11　1号住居址実測図

土坑)。炉跡は調査した範囲では確認されなかった(図10)。

遺物(図11)　1は、溝中より出土した台付椀。径13cm、高さ7.5cmを計る。球形に近い椀部をなし、台部は底く、しっかりしている。台部径6cm。外面は、入念にヘラミガキされ、赤色顔料が塗付されている。2は、高杯々部。口径20cm。杯部はなだらかに外反し、体部との境に明瞭な稜を持つ。内外面とも赤色顔料が塗られていた。覆土中より出土。

1号住居址より出土した土器は少ないが、いずれも弥生時代末期＝月影式に属するものと考えられる。

注

(1)　谷内尾晋司「柳田うわの遺跡」『羽咋市史』原始・古代編 1973

第3節　六・七世紀の遺構と遺物

(1)　遺構群の概要(図4・12)

位置と占地　調査区域は、東西にのびる低台地＝シャコデ台地の先端部にあたる。台地の先端部は、水田に接するところの南側裾が北に向って折れ、台地尾根筋がいく分北に寄りつつ、尖頭状をなして終息する。したがって、先端部の南から西には扇形状の緩斜面が形成されることになる。6・7世紀の遺構群は、弥生時代の遺構とは異なり、この扇形緩斜面上に占地している。

遺構　確認された遺構は、竪穴住居址・掘立柱建物・大形土坑に分類される。調査前の状態は、すでに段々畑状に削平されており、完存する遺構は少なく、部分的にしかとらえられない遺構がほとんどである。

竪穴住居址は、9棟を数える。このうち9号住居址としたものは、住居址の周溝または外周溝の一部とみられる遺構を指したものである。住居プランは方形が多いが、8号住居址にみるように長方形プランもある。もっとも大型の住居址は、5号住居址、一辺8m弱を計る。ついで6号住居址も大型の部類に入る。住居規模は、他の同時期の集落にくらべて大きいように見うけられる。

8号・4号・7号住居址の外側には、住居を囲むような溝が検出された。これは、排水施設とみられる。斜面に占地することから必要に応じてこのような施設が付設されたのであるが、雨水の浸入の防止が各住居竪穴の囲りに築かれたであろう土盛によって果される(都出比呂志説)と考えると、これは、その周囲をめぐる外周溝ということになる。

掘立柱建物は、11棟＋αを数える。これらは、三つの小群に区別することができる。a群は、もっとも南、裾に位置する。重複関係にあると2棟のみ検出されたにすぎない。

b群は、斜面のほぼ中央、14mコンタを中心として形成された群。西側斜面がカットされているので全体は明らかにできないが、調査区のなかでは、もっとも保存度の良い群である。

c群は、b群の一段上、16mコンタを中心とする群である。c－1棟のほかにその東側の柱穴

群に２～３棟を想定する。

大型土坑は、２基を数える。西側斜面の二つの竪穴がそれである。

集落景観　調査範囲が扇形緩斜面のすべてにおよんでいる訳ではないので、時期の変化にともなう集落のうごきのすべてを明らかにすることはできないが、緩斜面による制約のあり方およびその利用の仕方において竪穴住居と掘立柱建物群とでは明らかな違いがあるのであらかじめ指摘しておきたい。

竪穴住居の場合、いずれも北西隅と南東隅をむすぶ対角線がコンタの流れにそうように築かれている。これは、地形に制約された立地であるとともに、北東隅をもっともコンタの高い所に位置させることが、掘削の容易さ、移動させる土量、排水等の関係からみちびきだされた本集落としての斜面利用の方法であったとみたい。したがって、竪穴住居集落の段階では、斜面は、斜面として存在しているのであり、斜面の部分部分に占地して住居が築かれているのである。例えば、３号住居址の一段下に８号住居址が占地しているが、この場合、３号住居址のおそらく一部を掘削して８号住居址の外周溝が築かれた訳である。こうして、各住居址は、扇形緩斜面という広い居住区域の中に点在し、区画を共有する小群は確認できない。

対して、掘立柱建物についていうと、確かに方位的には、竪穴住居のそれをおおむね踏襲するが、まず、ａ群がコンタ 11 m弱、ｂ群がコンタ 14 m、ｃ群がコンタ 16 mにほぼまとまっていることが注目される。

ｂ群に着目しよう。ｂ－４建物の北東に柵状の柱穴列があるが、それを囲むようにＬ字状のカットが確認され、それは、ｂ－１・２・３建物と平行するように調査区外、南東にのびる。一方、４号住の外周溝が、カットに直交方向で南西にのびている。Ｌ字カットと４号住居址外周溝に囲まれた区域は、ほぼ平坦に整地されているのである。これがすべて後世の削平の結果とすれば、あまりに偶然にすぎるであろう。

以上のように、ｂ群は、ほぼ方形の小区画に営まれていると言ってよい。これが、ａ群、ｃ群についても同様の区画のもとで築造されているかどうかは調査範囲の関係より確認できないが、斜面のほぼ中央に位置するｂ群に整地による小区画が存在することによって、居住域が、段状に区分されていることは明らかである。竪穴住居址に切り合い関係が少なく、掘立柱建物址にそれが多いことも同時に注目したい。

後述するように、本遺構群は、竪穴住居より掘立柱建物への移行が確認されるのであるが、占地・区画のあり方の相違をも指摘することが可能であり、ここでは景観の問題としてひとまずこれをおさえておきたい。

(2)　竪穴住居址（その１）

１）２号住居址（図 13・14）

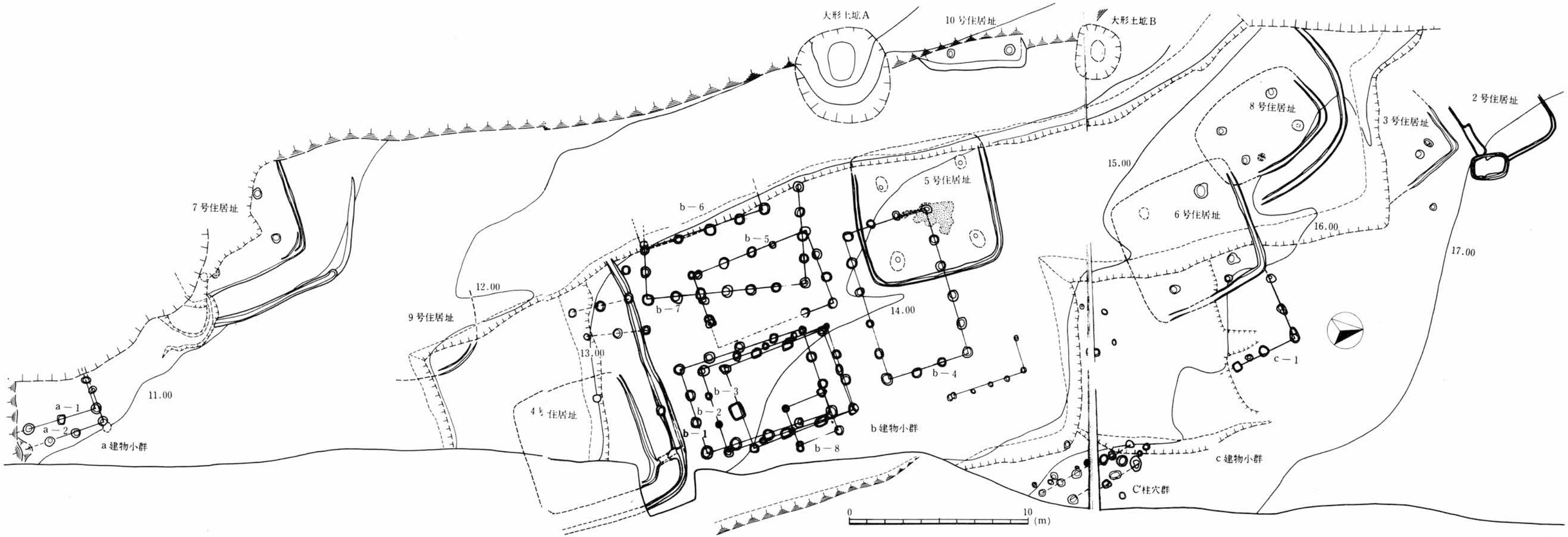
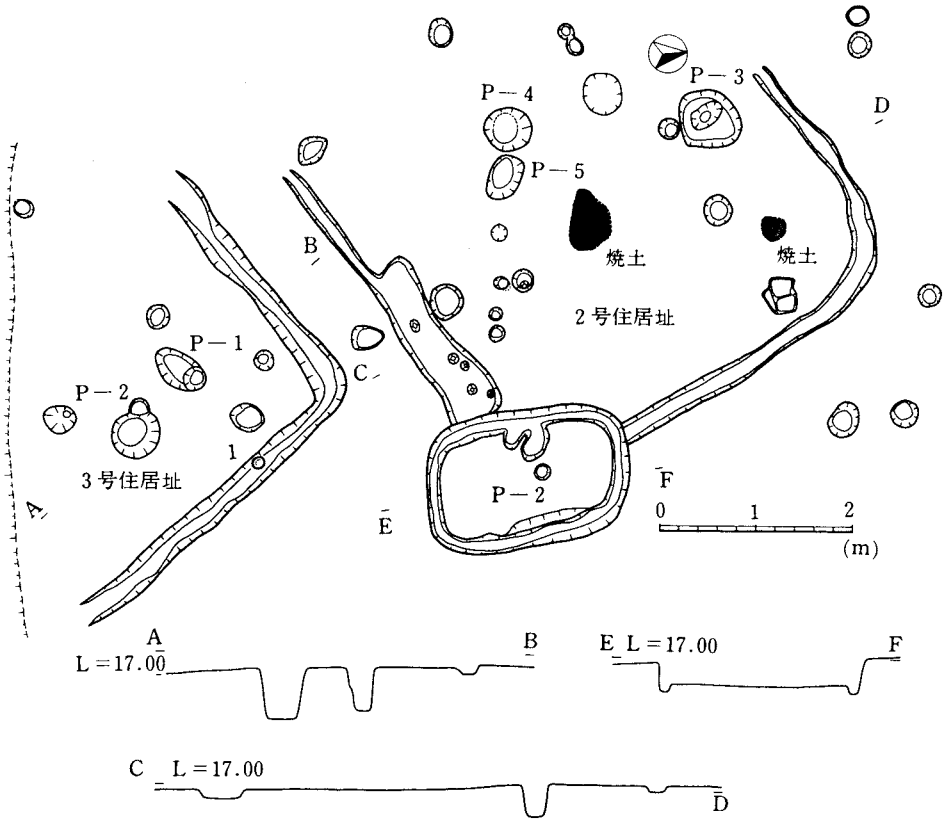

大形土坑A
10号住居址
大形土坑B
8号住居址
3号住居址
2号住居址
15.00
5号住居址
7号住居址
b－6
b－5
6号住居址
16.00
17.00
12.00
9号住居址
b－7
14.00
13.00
b－4
c－1
11.00
a－1
b－3
b－2
a－2
4号住居址
b－1
b建物小群
b－8
c建物小群
a建物小群
C'柱穴群
0
10
(m)

図12　六・七世紀の遺構

6・7世紀遺構群のもっとも北西、コンタ17m付近に、3号住居址と接して位置する。住居址の周溝の東半分がかすかに検出される程度に削平を受けている。一辺5m弱の隅丸方形プランとみられる。溝の覆土は暗茶カッ色粘質土である。

本址の床面には、他の住居址にみられるような主柱穴―4ケ所―はうまく発見できなかった。ただし、焼土の痕跡が確認されるから住居址とみてよいと思われる。なお、北東隅の焼土は性格不明である。



第13図　2・3号住居址実測図

遺物としては、周溝内より小形の壺の土師器底部片（図14―1）が出土したにとどまる。時期はよく判らないが、古墳時代後期ごろに比定できそうである。

ところで、南東隅に2.15×1.45mの隅丸方形ピットが確認された。底面には周溝を有し、覆土は、灰茶カッ色粘質土であった。2号住居址と切り合っているのは確実であるが、前年度の試掘調査の段階でほぼ掘り上げているので、前後関係はつかめない。しかし、周溝を有している点からみると、一種の貯蔵穴と考えられ、円形・方形の周溝をもつ貯蔵穴は、弥生時代末期前後の集落にしばしばみられることから1号住居址の段階の遺構かもしれない。

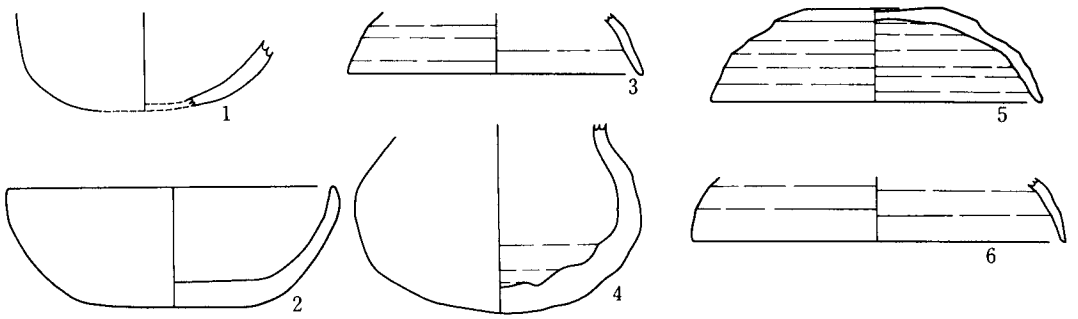


図14　2・3・6号住居址出土遺物　（S＝1/3）

2）3号住居址（図13・14）

2号住居址と0.75 m幅で接しているから、同時並存は考えがたい。削平・カットされており、方形プランの北東隅のみ遺存する。ピットp－2が主柱穴のひとつと考えられる。周溝・柱穴がしっかりしていることからみて、比較的大形の住居址とみられるが、もちろん規模は不明である。本住居址の南過半は、近代（または近世）のカットにより直接には消滅しているのであるが、直下の8号住居址との約1 mの落差に注目。8号住居址は、外周溝をそなえており、したがって、その外が排水を要するような斜面をなしていたと考えられる。一方、3号住居址の規模にもよるが、これが一辺5 mを越えるものだ（本遺跡の住居址の規模からいってその可能性が強い）とすると、確実に、3号住居址の一部をカットして8号住居址が築かれたことになる。周溝の幅30 cm弱、主柱穴p－2は、径50 cm、深さ50 cm強を計る。

遺物は、周溝内（図14－2）の土師器椀が唯一のものである。口径13 cm、器高5 cmを計る。口縁がやや内側にすぼむ。赤カッ色を呈し、焼成良好。6世紀後葉に位置づけられるものである。

3）8号住居址（図15）

3号住居址の下に位置する。確認した遺構は、4本の主柱穴、北半分の周溝、焼土、北側をめぐる外周溝である（35・36号土坑は縄文土坑）。

主柱穴はいずれも径50～60 cm、深さ50 cm強を計る。主柱穴をむすぶと、長辺3.6 m、短辺2.4・2.2 mの明らかな長方形をなす。長方形住居は、あまり類例を見ないものである。また、焼土が、p－1とp－2を結ぶライン上をやや周溝寄りに存することも特筆されることである。主柱穴と周溝との関係等より推定して、長辺約7 m、短辺約5 m前後に復元できる。

周溝の外を外周溝がめぐっている。北東辺の部分では、内幅約1 mの間隔を保ちつつ、北西辺側では、ややわん曲しつつ内幅をひろげている。溝の現存幅は約40 cmと住居壁周溝よりひとまわり大きく、深さもそれより深く作られている。住居壁周溝は、どこでもほぼ水平につくられているのに対して、外周溝は、北隅が高く、北西・南東に向って低くなる傾向にある。したがって

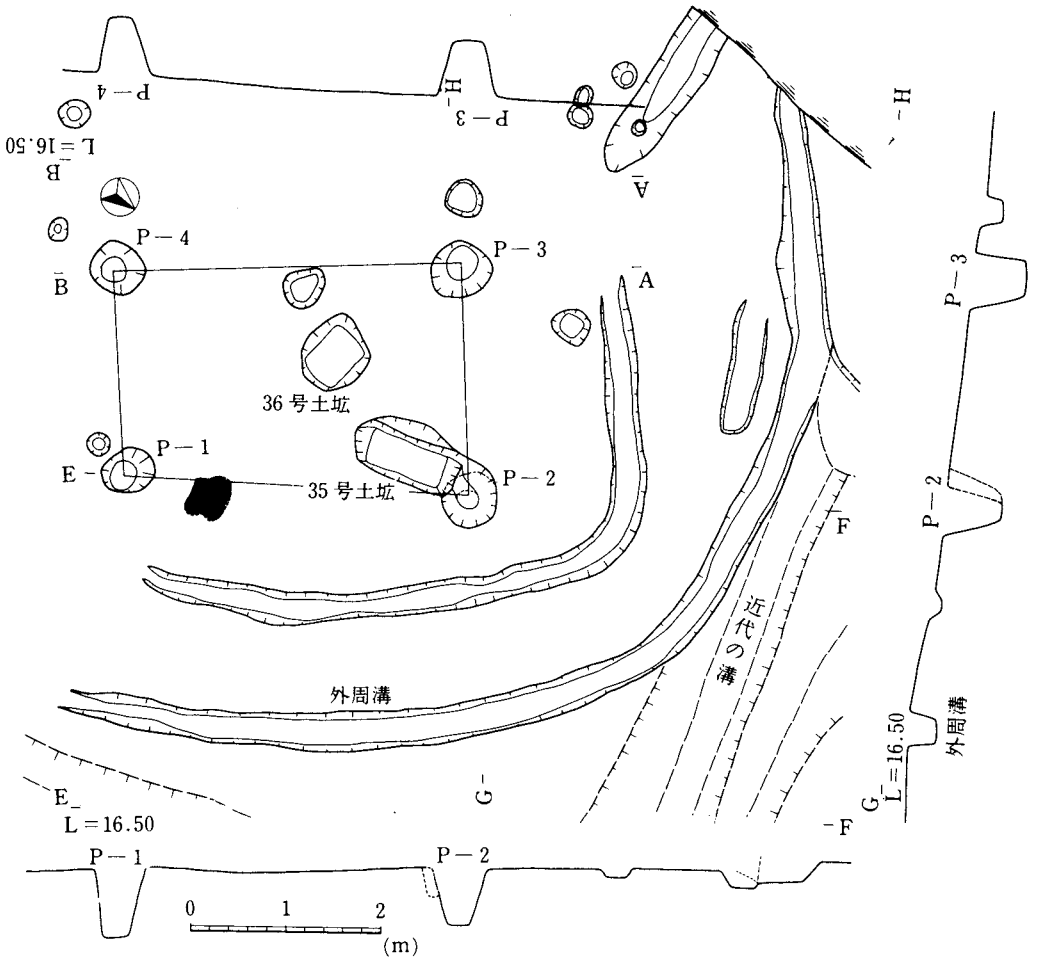


図15　8号住居址実測図

排水を主たる目的にしていると判断できるのである。住居壁周溝と外周溝の間には、土堤状の土盛がなされていたと推定される。外周溝の覆土は茶カッ色粘質土、住居壁周溝は暗茶カッ色粘質土、ともに固くしまってはいなかった。

遺物は、本址にともなうと断定できるものを確認できなかった。

本住居址と構造上酷似するものは7号住居址である（後述）。

4）6号住居址（図16）

8号住居址の東側、隅を切り合って6号住居址が位置する。後世の削平と近代の溝による寸断により、主柱穴が3ケ所、周溝は北半分が遺存するのみであった。

柱穴はいずれも深くしっかりしており、周溝も広い所で幅50 cmを計る。推定復元すると一辺7.5 m前後の比較的大型の方形住居址となる見込みである。外周溝は検出されていない。主柱穴P

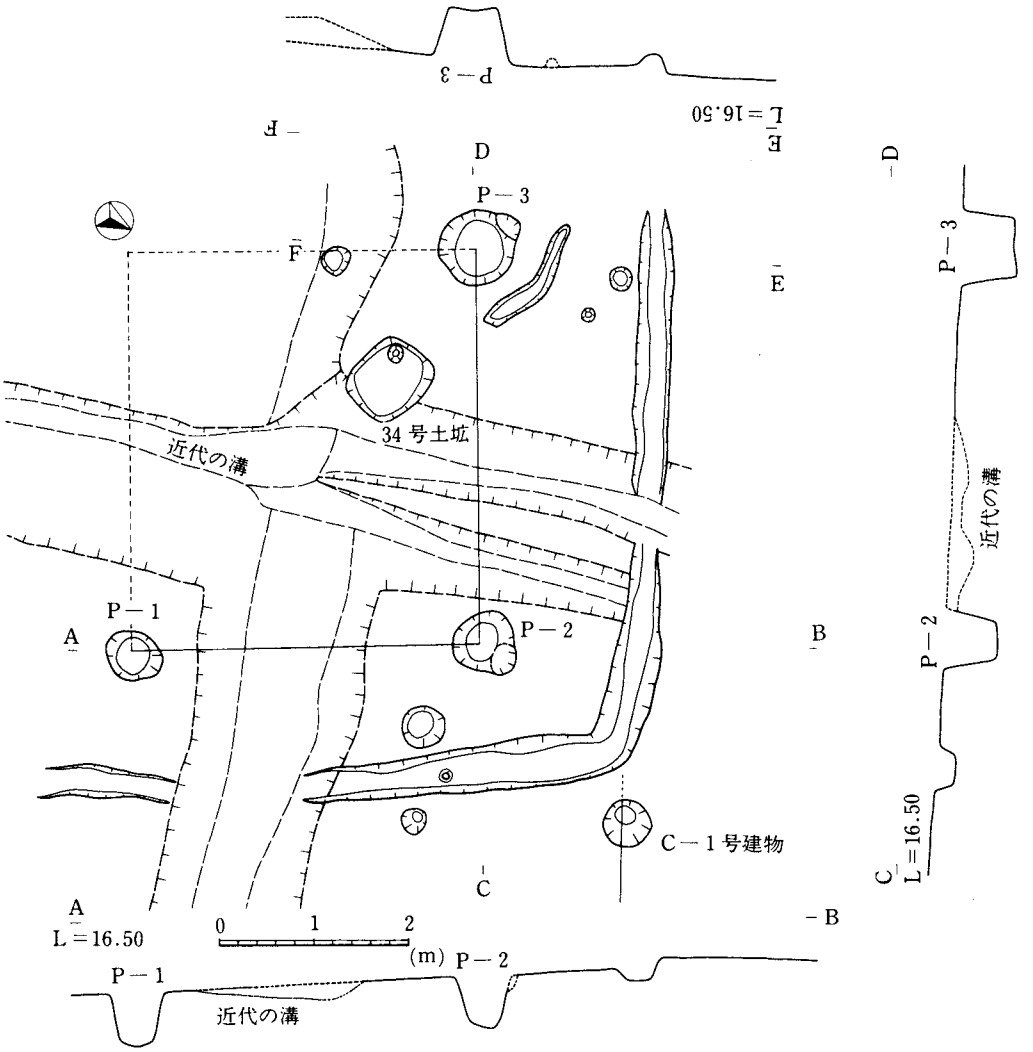


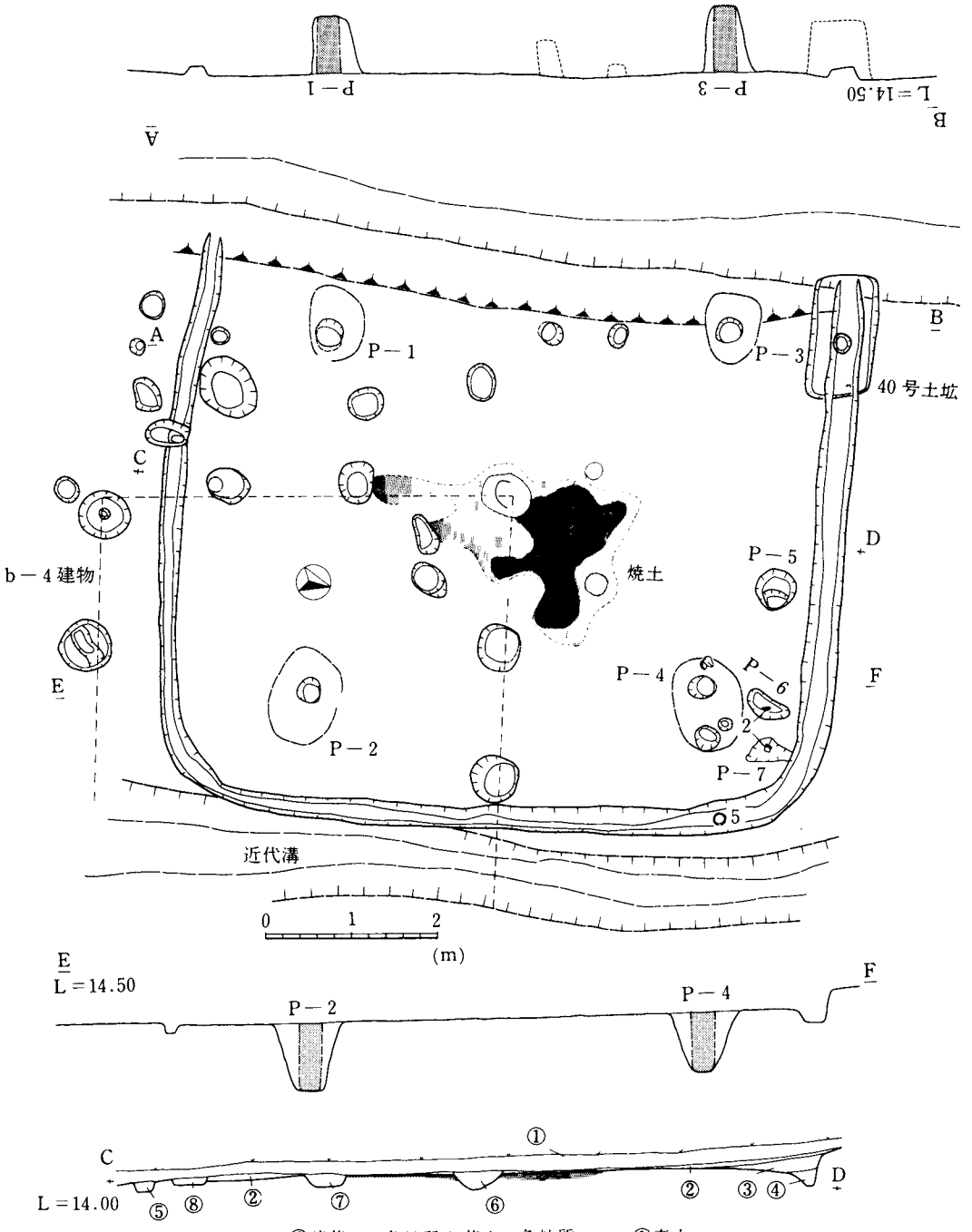
図16　6号住居址実測図

P－1と同P－2の間は3.7m、P－2とP－3間が4.2mを計る。P－3が柱穴としては最も大きく、径80cm、深さ55cmであった。なお、34号土坑は縄文時代のおとし穴である。

東側周溝内より土師器壺（図14－4）が出土した。口径部が後世の耕作等で破損させられているが胴下半がそっくり遺存していた。おそらく、同住居が放棄される時に裾え置かれていたものと思われる。重心が低く、ぶ厚くつくられている。赤カッ色を呈し焼成良好。胴径11.5cm。

図14－5・6は、本住居址上で出土した須恵器。本住居址はほとんど覆土が確認できず、したがって、これらが伴うかどうかは明らかではない。5は、図上復元すると口径13cm、高さ3.7cmを計る蓋の破片。粗雑な調整、形状等より判断して7世紀前葉に属するとみられる。

5） 5号住居址（図17）



⑥暗茶カッ色粘質土黄カッ色粘質ブロック含。焼土ブロック混入。
⑦ ⑥と同じ
⑧ ⑥と同じだが焼土ブロック混入なし。

①表土
②灰茶カッ色粘質土
③暗茶カッ色粘質土
④茶カッ色粘質土（しまっている）
⑤ ④と同じ

図17 5号住居址実測図

状態　6号住居址の南、14 mコンタ前後に位置し、6号住居址より約1.5 m程低い所に築かれている。西側の一辺が後世の掘削により消滅しているほか、土層図にみるように、北側をのぞいていて、ほとんど床面近まで削平されている。b－4掘立柱建物は本住居址廃絶後に建てられたものであり、また、40号土坑は縄文時代に属する。

構造　南北の径は7.9 mを計り、本遺跡最大規模の大形方形住居址である。周溝はしっかりした逆台形をなし、広い所で幅40 cm弱を計った。

主柱穴はp－1～p－4の4ケ所を確認した。これら4ケ所の柱穴の内、径30 cm程のピットで図示している部分が柱痕である。床面を追求した際、茶カッ色粘質土をなして遺存していたものである。その後、その周囲に径70～90 cmの掘り方が検出された。掘り方は、貼り床と混合して十分明瞭なかたちでは検出できなかった。柱穴の深さは70～80 cmにおよぶ。p－3では底に青灰色の粘土がすえられていた。p－1・p－3とp－2・p－4の間がいずれも4.6 m前後を計るに対して、p－1・p－2間、p－3・p－4間が4.1 m程度と南北幅がやや長くつくられている。これが住居プランとどう関係するか厳密には言えないが南北方向にやや長いプランを想定することが可能である。

ところで、本址のほぼ中央に広範囲にわたる焼土帯が検出された。南北3 m弱、東西2 m弱の範囲に拡がり、厚い所では深さ8 cm程まで焼け入んでいる。焼失住居かと考えたが、わずかにのこる北側部の覆土中に焼土ブロック若干が検出されたものの、炭化物の量は少なく、また、炭化材の出土をみていないため、その可能性は少ない。北側周溝近くのp－5は浅いピットであるが、中に焼土ブロックがかなり含まれていたことからみて、中央の焼土帯が住居存続中に形成された疑いが強い。性格については不明。

遺物（図18）　本址に関連して出土した遺物は少ない（遺物番号は共通）。これらの内2は、北東コーナー付近の2つの浅いピット中に出土したものが接合されたもの。底部を欠き、口縁部の約1/3の破片である。やや小ぶりの杯身で、たちあがりが短かく直立し受け部が水平にのび、調整は雑である。7世紀初頭に位置づけられるものであり、本住居址の年代をおよそ知ることができ

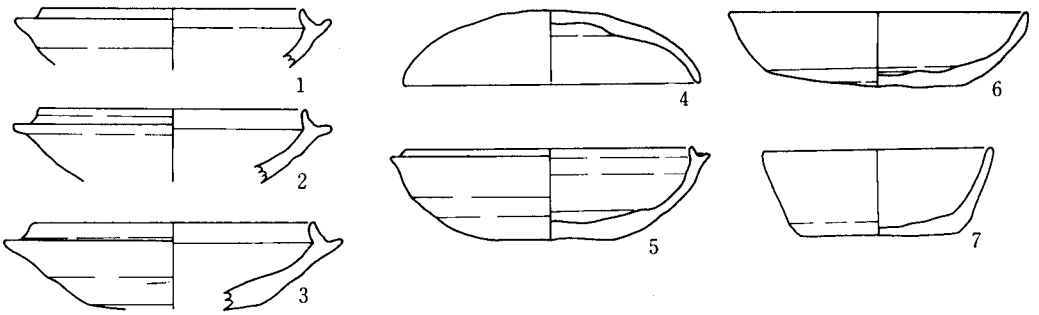


図18　5号住居址出土遺物（S＝1/3）

る。5は、同じく北東コーナー近くの溝中より出土した完形の杯身・床面に接しておらず浮いて出土している。わい小化したたちあがりと受け部を有し、2より年代の降るものとみられる。住居廃絶直後に没入したものであろうか。1・3・4・6・7はいずれも住居内より出土したものであるが、いずれも浮いた状態にあった。7の杯身のように時代の降るものもあり、すべてを住居址に伴なうものとは言いきれない。

6）9号住居址（図19）

4号住居址と7号住居址の間に、わん曲してのびる溝を確認した。幅30 cm弱を計り、断面は逆台形をなす。住居址内の周溝の一部と推定し、9号住居址と名づけた。遺構のほとんどが削平・消滅しているため規模・構造は不明である。ただし、周溝内の覆土暗茶カッ色粘質土が、1号住居址以外の住居址周溝の覆土と酷似しているため、6・7世紀の遺構に含めて理解して大過ない。

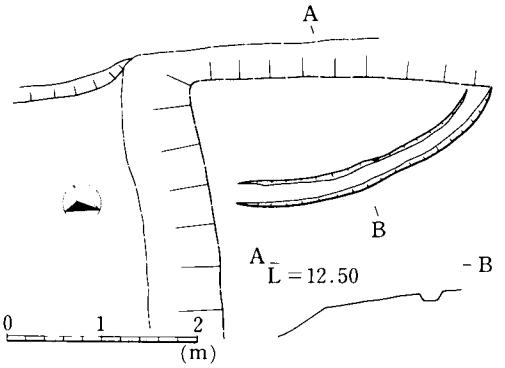


図19　9号住居址実測図

7）7号住居址（図20）

南の端に位置する。西側がすでに削平され、南半分も破壊され全体像がつかみがたい。主柱穴は、東西の二穴（p－1・p－2）を確認した。その間2.7 mを計る。一方、それに対して直角方向を東壁にそってたどってみると主柱穴が遺存する床の範囲には確認できない。加えて、東壁の近に寄って焼土が検出されたことは、直方形プランをなす8号住居址と同じである。以上の点を考慮すると東西に短かく南北に長い長方形住居址とならざるを得ない。規模については正確なことはいえないが、6 m弱×7 m前後と推定しておきたい。

住居内の周溝は北壁について確認されたが東壁については確認できなかった。しかし、浅い周溝はあったかもしれない。

本址は、C－D間断面図にみるように、緩斜面上に築造されている。そして、東壁に並行して幅40～60 cmの溝＝外周溝が走っている。外周溝は、北東コーナー付近から始まるが、途中で一段低くなる箇所がある。レベルは、南に向って低くなっており排水を目的としていることは明らかである。なお、南方向に外周溝と東壁を横断するように環状溝が走っている。外周溝がこれによって切られているとするとそのまま南へ直下する溝が現れなければならないがそれがみられない。一方、同時に機能しているとすると環状溝が住居址内に通ずることとなる。覆土については、いずれも暗茶カッ色粘質土で区別はつきにくい。本調査と前年におこなわれた予備調査の境界が

この環状溝付近であったため十分な検討ができなかったことは残念である。

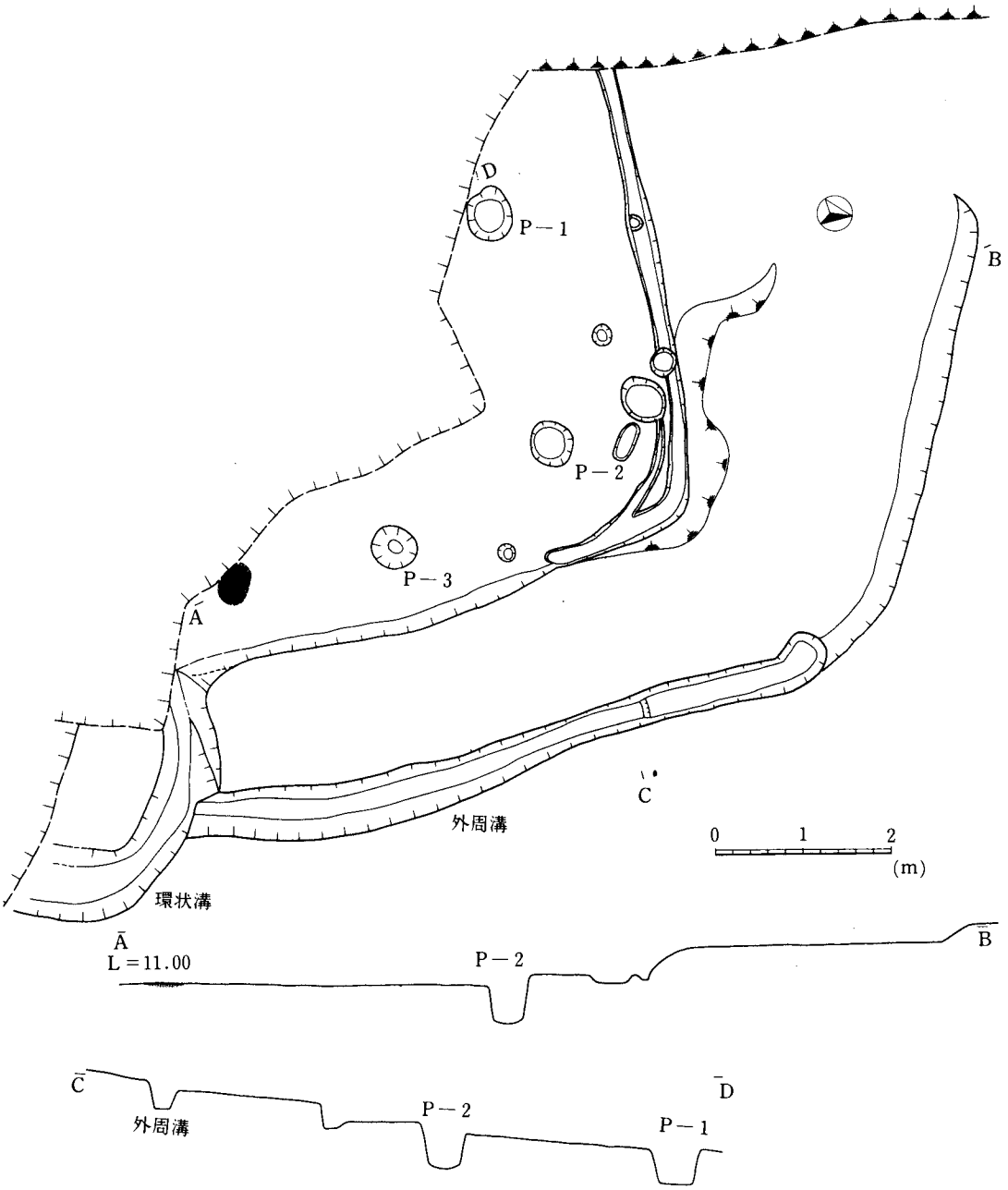


図20　7号住居址実測図

遺物（図21）　本址に直接伴うことが確実な遺物は出土していない。図21にあげてある遺物は、外周溝から内側で出土した須恵器であり、したがって、遺構より遊離したものも含まれている。これらの内、3の杯口縁部片と8の甕片が住居址覆土中より出土したもの。3は短かく内傾するたちあがりを有する杯、8は口径33 cmを計る。いずれも7世紀初頭に属する。他の遺物もほぼ

同時期にと考えられるものばかりである。

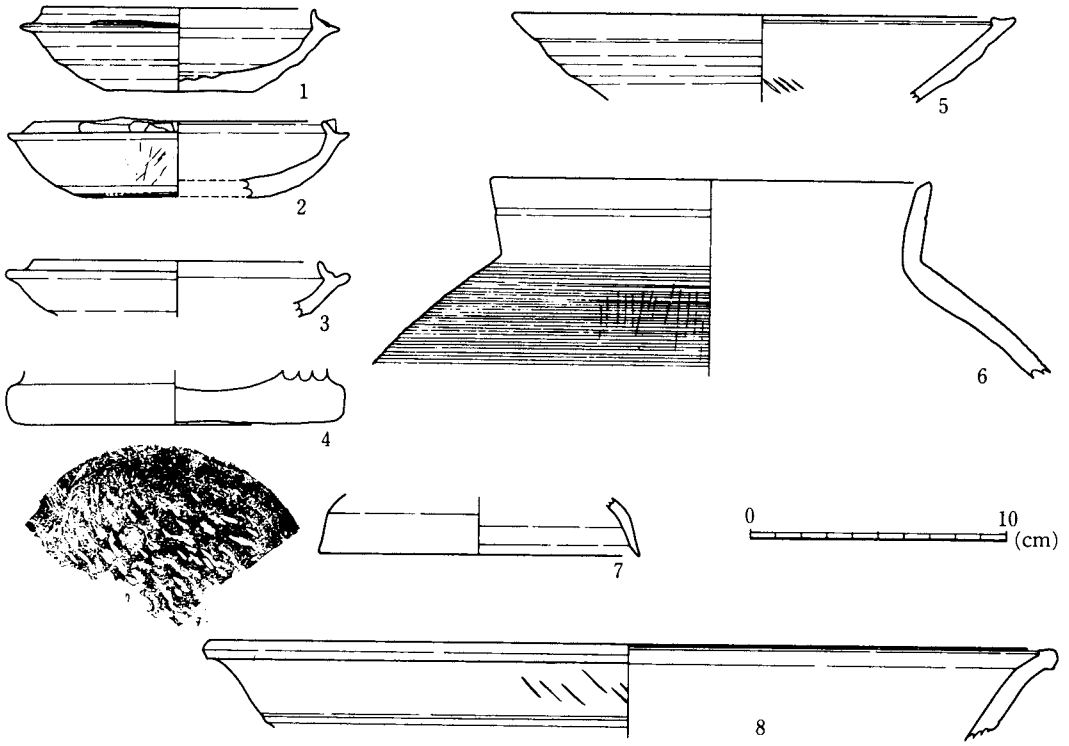


図21　7号住居址出土遺物

8）10号住居址（図22）

10号住居址は、西側の急斜面（現状では）にあり、大型土坑A・Bの間に位置する。

構造　西側過半が消滅し、東側一辺と主柱穴P－1・2が遺存するのみである。主柱穴がい

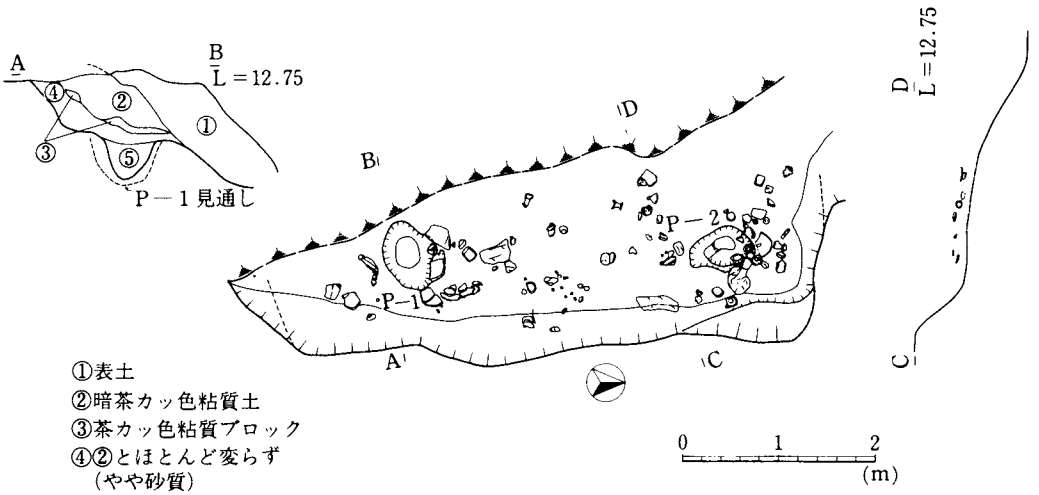


図22　10号住居址実測図

ずれも壁に接近していること、周溝が確認できないことが特色である。P－1とP－2の間は、3.4mを計る。一辺5.5m前後の比較的小型の竪穴住居となろう。

ところで、本址は、他の住居址とことなり、壁のたちあがりをかなり遺存しているが、堀り方が明瞭につかみ難い程くずれがひどい。一方、住居址覆土中より多量の遺物・岩石が出土した。遺物は床面に接しておらず、土層断面図の土層の流れにそった状態で検出された。したがって、住居址が廃絶されたあと、土器・岩石等をまじえてさまざまなものが投棄される過程を経て埋没していったものとみなされる。

遺物（図23）遺存していたのは土器と岩石（凝灰岩質のもの多い）であるが、土器について説明を加える前に、出土状況の特色をあらかじめあげておきたい。

1．完形品はきわめて少なく、破損品・破片が圧倒的に多い。

2．土師品は少なく、須恵器がほとんどを占める。

3．須恵器については、器種にバラエティーがあり、特定一部にかたよらない。

〈杯〉（1～3）　1は蓋、2・3が身。いずれも、身に受け部が付く形態の末期のもので、粗雑さがめだつ。

〈高杯〉（4～7）　4は有蓋高杯。たちあがりは直立だが短かく先が細い。5は、短脚無蓋高杯。脚はラッパ状にひらく。杯部に波状文をのこす。6の無蓋高杯は、破損品であるが図上復元が可能であった。口径16.0cm、高さ17.5cm、脚径13.5cm。杯部、脚胴部、脚裾部にそれぞれ浅い凹線が施されている。いずれの高杯も脚部に透し穴がみられない。

〈皿・鉢〉（8・9）　8はきわめて粗雑なつくりの皿状品。この皿状品の口縁を上方にもち上げると9のような鉢となる。いずれも、ヘラケズリ調整がみられず、マキアゲ、ミズヒキのみの製品で、あまりみられない形態であるが、本遺跡ではしばしば見られるものである。口縁端部が横または斜上にうすくのびるのが特色である。8は完形品であった。

〈瓿〉（10）　大形の瓿で、胴部径11.5cmを計る。胴部には櫛状工具による刺突文・口頸部には細い波状文が施されている。

〈その他の器種〉（11～13・16）　11は長頸壺の頸部、櫛状工具による刺突がめぐる。12は、甑の把手の部分と推定される。胴部はカキメ調整。13・16は甕口縁部。13は肉厚の口縁端部をなし無文の小型品。16は口径37cmの大型の甕、波状文がみられる。図示しなかったが、甕胴部破片も少なからず出土した。

〈土師器〉（14・15）　14は、半球形の椀。口径12.4cm、高さ7cmを計る。15は、高杯脚部か。いずれも磨滅がひどい。

時期　まず、土器の時期についてのべる。最も時期が古いものは、10の瓿であろう。胴部と頸部のしまりがないが、装飾がみられ大形であることから6世紀にさかのぼるものとみられる。しかし、杯は小形となり粗雑さが目立ち、杯身の受け部も末期的な形態に近くなっている。さらに、

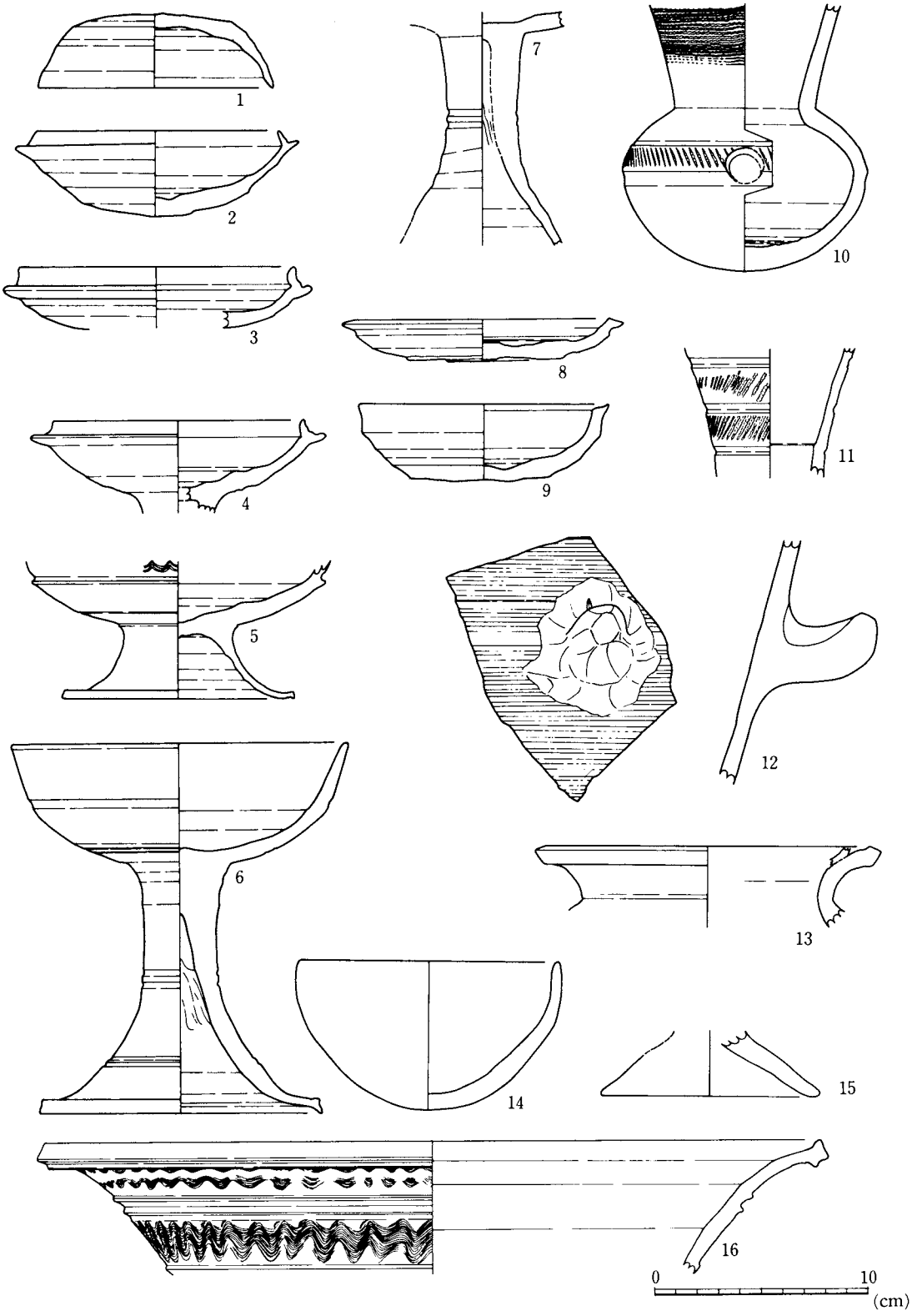


図 23　10 号住居址出土遺物

高杯はいずれも透し穴が消滅していることから、出土須恵器の多くは7世紀に入る。一方、7世紀も中葉に下るものはみられない。したがって、遺物の投棄の時期は、7世紀の初頭か前葉に比定して大過ない。

次に住居址の時期であるが、床面と遺物の遊離が少ないところで10cm程であるから、廃絶の時期はそれほどさかのぼらないものとみたい。

(3) 大形竪穴状土坑

遺構群の西側斜面は、後世に階段状に削平され、変容が進んでいる。この斜面に10号住居址をはさんで、二基の大形で略円形の竪穴状土坑が確認された。

1）大形土坑A（図24）

10号住居址の南に位置する。西側の1/3は斜めに削られ、上部もかなり削平されているものとみられる。

形状　現存最大径は、南北5.5mを計る大形の土坑である。断面は、途中が段状をなしつつ移行する半球形をなす。底はほぼ平らでわずかにレンズ状を呈し、平らな部分は南北1.4m、東西1.8mを計る。斜面または底にピット等は検出できなかった。深さは、2.4m以上。

土層　土層は9層に区分できた。全般的傾向としては、レンズ状の推積を示し、上が黒色、下が黄カッ色（地山土に近い）で、その間はほぼ漸移的な色調をなしている。したがって、上層ほど汚れが激しいということができる。

ところで、土層⑤は、黄カッ色粘質土の薄い層であり、前後の黒カッ色粘質土＝土層④、暗茶カッ色粘質土＝土層⑥と著しく不連続をなしている。これは、汚れのない地山土であり、外から持ち込まれたものとみられる。ただし、土層④と⑥の色調・質の上での連続性からみて、土層⑥または⑤の段階で長い安定期があったとは考えがたい。いいかえれば、この土坑は、漸時的埋積を基調とし、その終末には、土層②・③にみるごとく、径を次第に減少しつつ埋没したものと考えられる。

遺物　遺物として遺存しているのは、須恵器・土師器、大小の岩石である。須恵器と土師器の比率は、須恵器が圧倒的に多い。土層としては、⑦層以下にはほとんどみられず、⑥層以上、とくに②・③層に集中的に出土した。完形品はきわめて少なく、破損品・破片が大部分をなすことは10号住居址出土土器と同じであった。土坑が埋積する過程で、他の有機物の棄物とともに投棄されたものとみられる。

須恵器（図25・26）

〈杯蓋〉（1～4）

a・bの二類に分類できる。a類（1）は、大形で天井が高く、痕跡的ではあるが、天井部

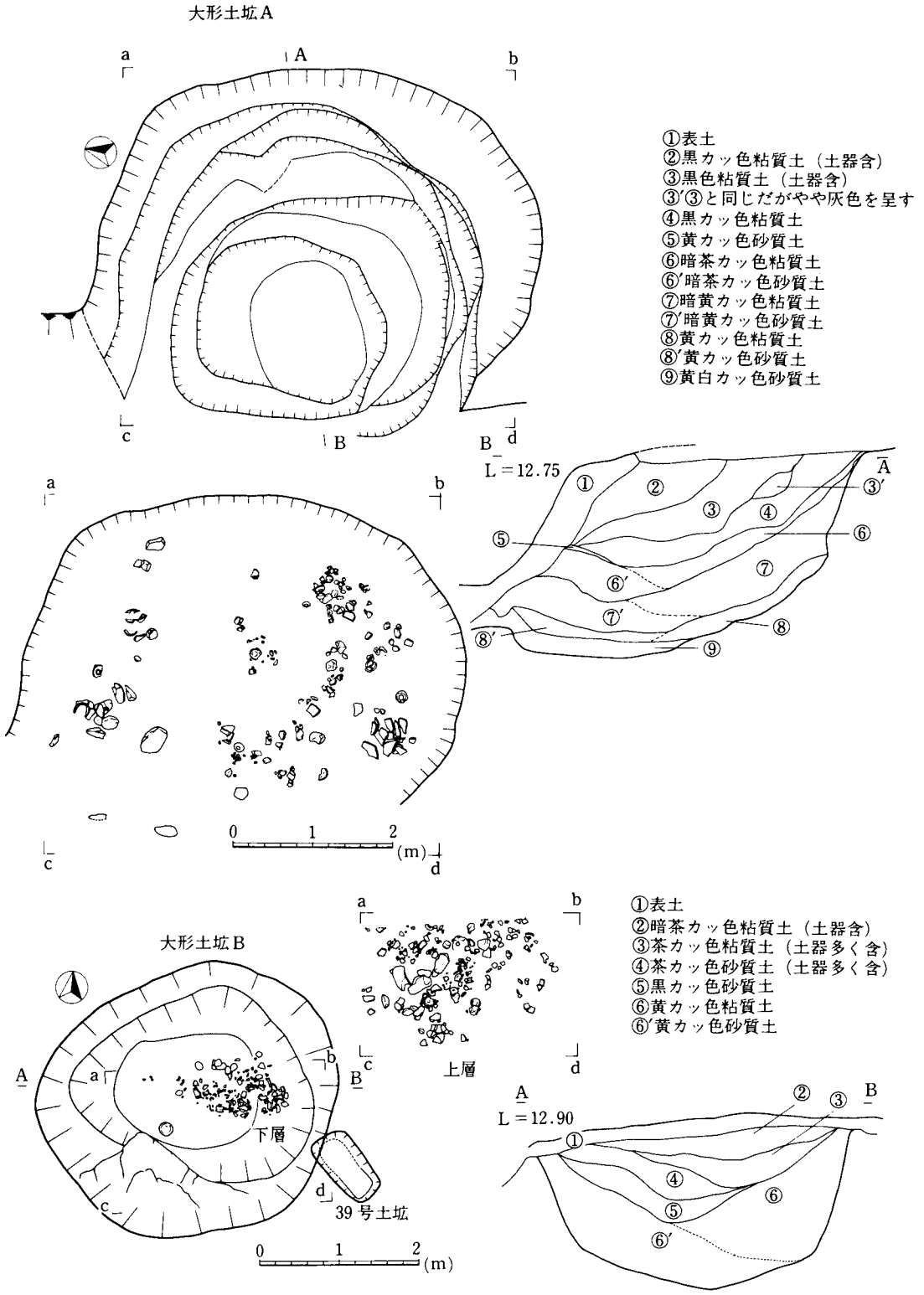


図 24　大形土坑A・B実測図

と口縁部の境に稜を有するものである。b類（2～4）は、天井が低くなり小形化し、稜がみられないもの。

〈杯身〉（5～12）

a～cの三類に分類した。a類（5・6）は、身のふところが深く、たちあがりが内傾しつつも伸びているもの。ただし、端部は丸みをもち段は有さない。b類（7～11）は、小形・粗雑化し、短いたちあがりが内傾するもの、このタイプの杯身の末期のものを含む。c類（12）は、蓋とも考えてみたが形状的に身とする方が妥当と思われる。受け部が、たちあがりというよりは、受け溝状に退化している。

〈皿〉（13）

10号住居址にも出土した独得の皿状品。口縁が横に尖ってのびる特徴がある。内外面に粘土紐まき上げ痕をのこした粗悪な製品でヘラケズリはみられない。あるいは、杯身製作のある段階のものを若干加工して焼成したものか。

〈杯蓋 14〉

杯蓋14を独立してとり上げる。土坑の上面で出土したもので、他の遺物と同列には扱えない。径25 cmを計る大形の杯蓋。口縁は断面が上下に角ばり、内側のかえりが消滅している。8世紀前葉ごろに下るものである。

〈高杯・器台〉（15～22）

有蓋高杯・無蓋高杯双方がみられる。16は、15と同様の中央が凹んだつまみを有し、半球状をなす。痕跡的に稜相当部に凹線がめぐる。口径14.5 cm。17は無蓋高杯の杯部。18～21は胴・脚部であるが、18・19が2段透しであるのに対し、20はそれがみられない。22は器台の脚部。

〈椀・深鉢〉（23～25）

23は、やや先細の口縁を有し、体部に凹線を有する椀。おそらく短かく安定感のある脚をもつものと推定。25は、口径20.5 cm、高さ8.6 cmの深鉢。口縁は内に向って段状となる。体部に二条の凹線を有し、体部の下1/3はヘラケズリによって調整している。

〈壺・甕〉（26～33）

26は、ぶ厚くしっかりした口縁部、直立している。外側に太い凹線が一条めぐっている。27は、ラッパ状にひらく口縁部。28は、頸部が狭い壺。29・30は提瓶・平瓶類の口縁か。31は、屈曲した口縁部を持ち、端部にきざみが加えられている。32・33は、丸みをおびた口縁を有する甕。

土師器（図27）

〈椀類〉（1～5）

1～4は、口縁が丸みを持つ浅い椀。細片が多く、また、磨滅しているものも多いが、4は体部に粘土紐巻き上げの痕を遺存している。5は、口縁が外にくの字状に短かく開き、深い椀

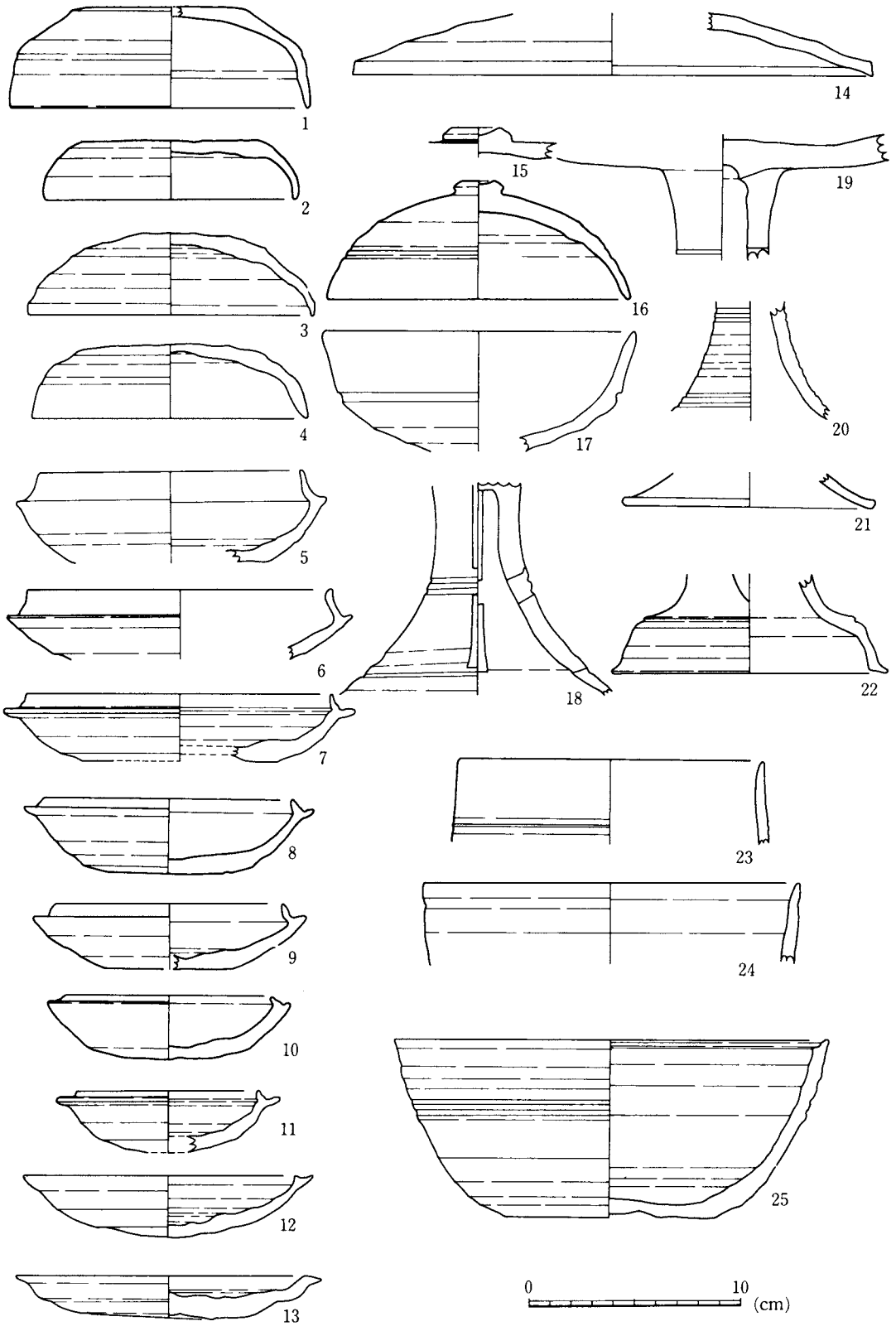


図 25　大形土坑A出土須恵器(1)

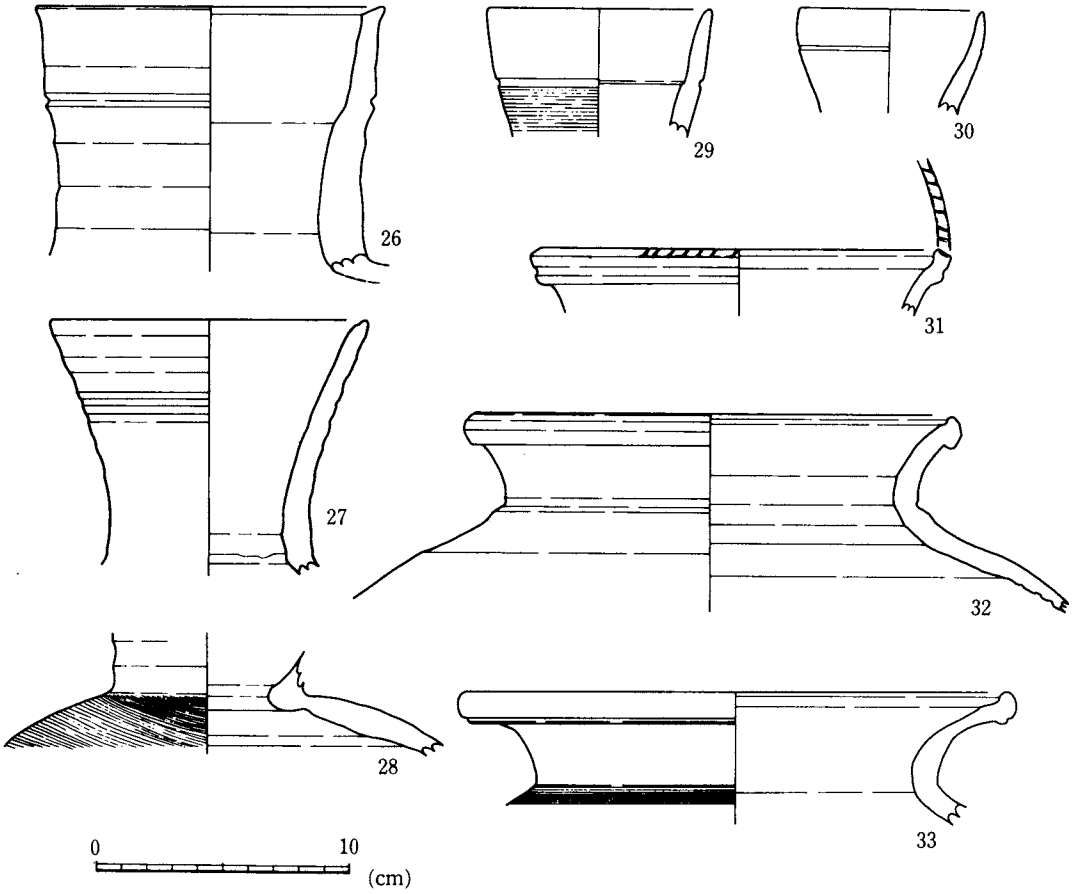


図26　大形土坑A出土須恵器(2)

部となるもの。

〈高杯〉（8～10）

8は、太い脚胴部。裾部で屈曲して開脚するものとみられる。9は、断面台形状の杯部が付くもの、脚部はそのまま開く。入念にヘラケズリにより調整されている。10は、短い脚部、裾部で開く。台付椀の台脚に近い。

〈壺類〉（6・7・14）

6は、外反する口縁の外側に粘土紐をはり加えて二段口縁状にしたもの。上端・下端ともにぶく丸みを持ち、シャープさに欠ける。7は、長頸壺。ほぼ完形で出土した。つぶれた玉ねぎ状の胴部にやや袋状を呈する口縁部がとりつく。口縁端部は丸みを持つ。形態的には古い時期からみられるものであるが、頸部のしまりがなくくずれた印象を受ける。14は、やや外反する口縁。

〈甕〉（15～21）

15～19は、くの字状の口縁を有する甕。17以外は、口縁端部が丸みをおびる。

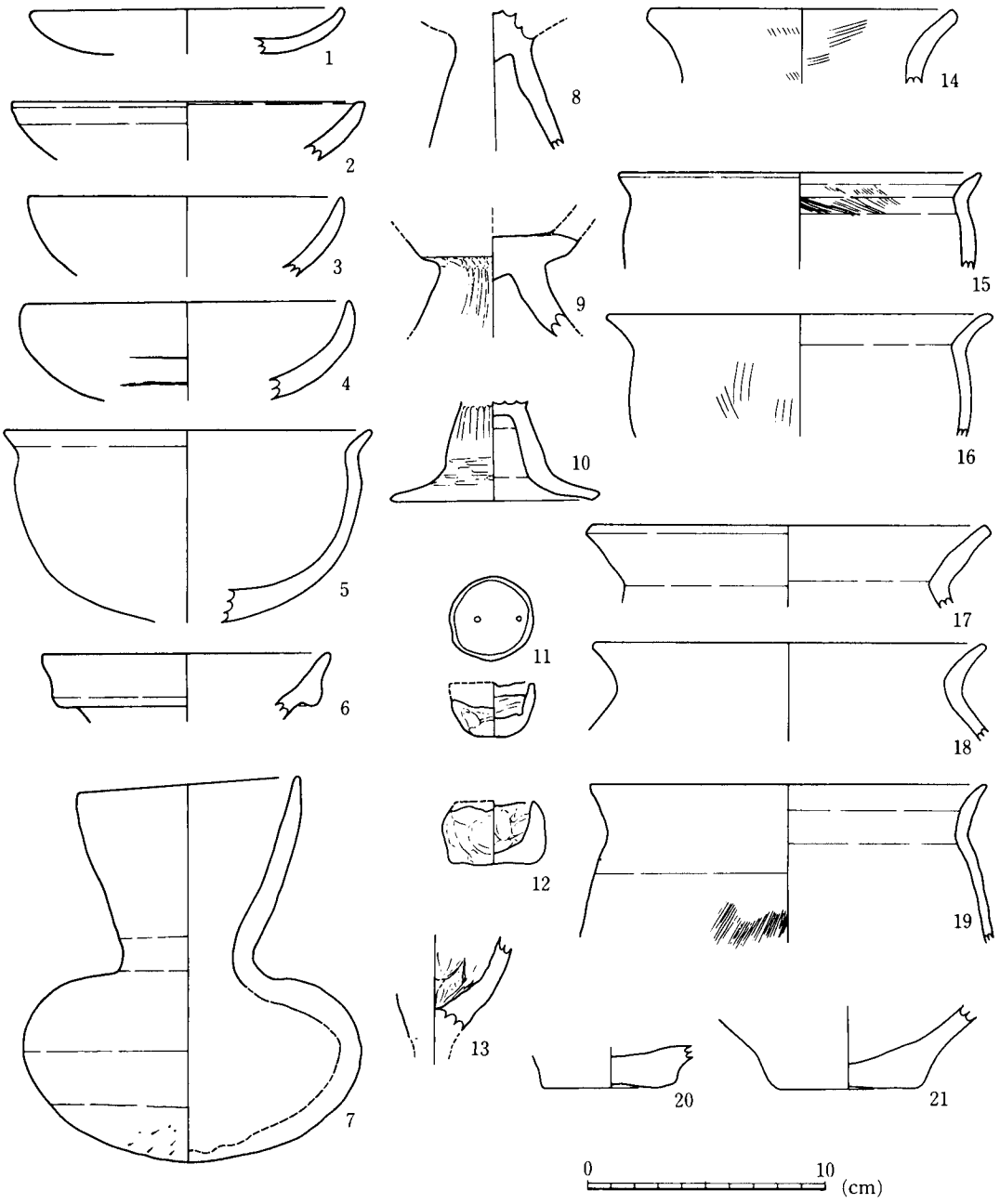


図27　大形土坑A出土土師器

〈手捏土器〉(11・12)

11は、底が丸く作られている。内側に2ケ所刺突状の小穴がある。12は、底が平面をなしぶ厚く作られている。いずれも粗雑に仕上げられている。

〈製塩土器〉(13)

いわゆる尖底式の製塩土器で、底が棒状にのびる。体部は平滑で二次的加熱の痕は認められ

ない。本遺跡唯一の製塩土器である。

小括

本遺構は、径5.5ｍ、深さ2.4ｍ以上の大形土坑である。しかし、性格については、井戸、水留施設などと考えてみたが明確な結論は出ないので保留しておきたい。ただ、最初から、土器等の廃棄場として位置づけられていたのではなく、地山質の汚れの少ない土によって埋まったか埋められたかの後にそれらが投棄された訳である。

ところで、出土した土器には若干の時期幅がある。層位としては明瞭にとらえきれなかったが須恵器については２～３型式が含まれている。杯身はａ～ｃの３類に分けられ、たちあがりのしっかりしたものから痕跡的なものまでの時期差がみられる。また、高杯についても、透し穴の有するものとないものがある。大雑把にいって、６世紀後葉から７世紀前葉にまたがるものと考えられる。ただし、図示できなかったものを含め絶対量は、杯身ｂ類、７世紀初頭または前葉の遺物が圧倒的に多い。なお土師器長頸壺７はもっとも下層に出土したものであり時期が若干さかのぼるかもしれない。

２）大形土坑Ｂ（図24）

10号住居址の北に位置する。上部が削平されているため正確な規模はわからないが、現存値で、東西径3.8ｍ、南北径3.4ｍ、深さ２ｍ弱を計る。東側の底からのたちあがりは急である。南側の内斜面に岩盤が露出しており奇異な印象を受ける。底にはかなりの厚土で黄カッ色砂質土（⑥′層）・同粘質土（⑥層）が堆積している。その上の⑤～②層はレンズ状の堆積となる。土層の堆積状態は、基本的には大形土坑Ａと変らない。

遺物は、②層の上面＝上層と③・④層中＝下層に明確に区別されて出土した。上層は、須恵器とともにやや多めの土師器および岩石よりなり、完形品がほとんどなく破損品・破片が多いという特徴は、10号住居址・大形土坑Ａと同様である。対して、下層は、すべて土師器であった。

上層遺物　遺物は、②層の上面に、やや中央がレンズ状にくぼむように埋積していた。

須恵器（図28）

〈杯蓋〉（１～４）

１は鋭くはないが、天井部と口縁部の境に稜をもち、口縁端部は段状にくぼんでおり、古相を示している。６世紀中葉ごろの形態をなしている。対して、２～４は小形・粗雑化し、２ににぶい稜がみられるものの、６世紀末か７世紀前葉に降るものである。

〈杯身〉（５～８）

蓋同様年代的に幅がある。５・６は、器形的に大形で、内傾しつつも長いたちあがりを有しているが、７・８は、小形でたちあがりも短かい。

〈その他〉（９～14）

９は、無蓋高杯の杯部と推定。器壁は薄く、体部の稜の下にきざみがめぐる。10は長頸壺の

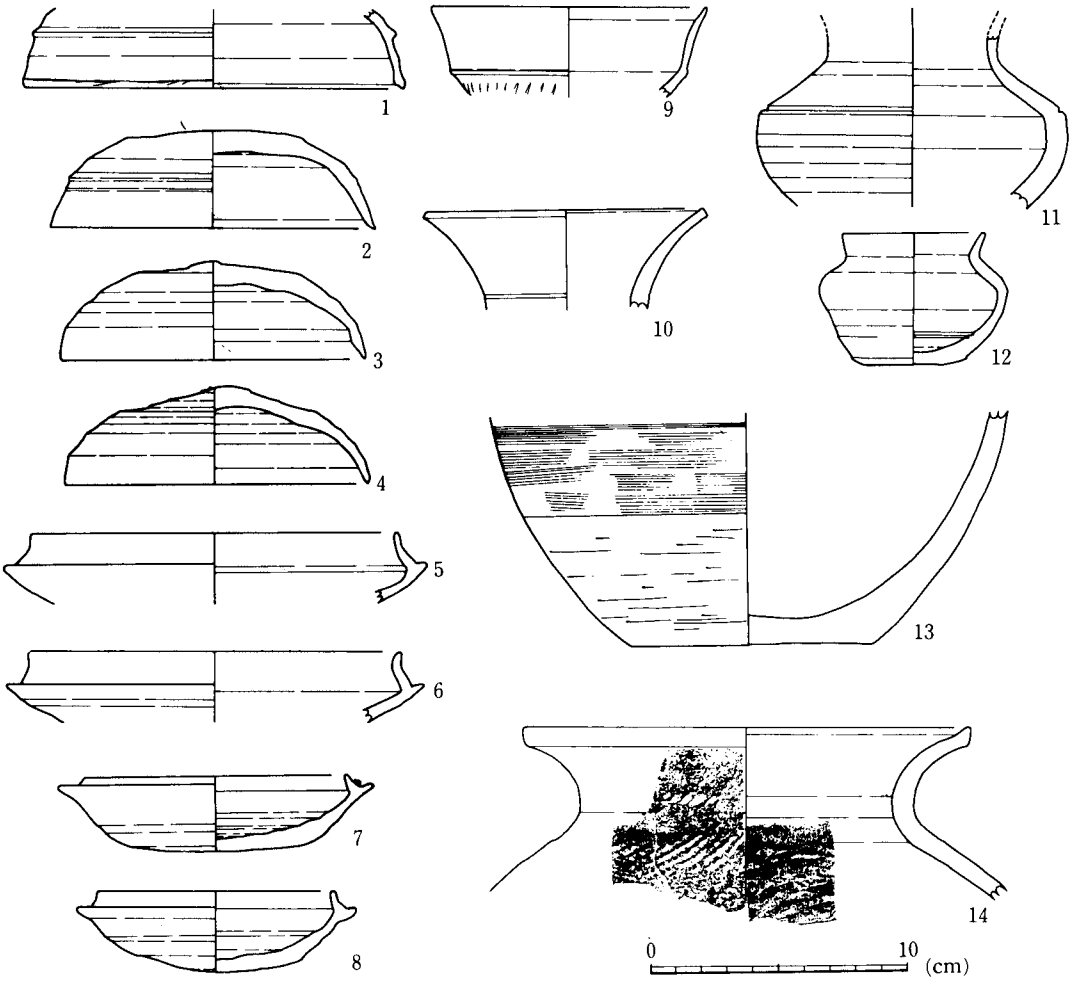


図28　大形土坑B出土須恵器（上層）

口縁、口径11 cm。11は長頸壺、頸部から肩部はすんなり移行し、肩部に凹線がめぐる。12は小形の坩。器高5.2 cm、口径5.6 cmの完形品。13は胴以下しか復元できないが、平底であるところからみて深鉢のようなもの。胴部はカキメ状の調整がめぐり、底部にかけてはヘラケズリにより調整されている。14は甕。口径17.5 cm。口縁端部が上にのびる。

土師器（図29・1～4、図30・16・19）

須恵器と混り合って土師器片多数が出土した。出土量は、10号住居址・大形土坑Aより多いが完形品がなく破片ばかりであることは共通している。図示したものは例示的なものである。

1は、器高が低い椀。2は台付の椀。3・4は高杯脚部であるがタイプはことなる。16の甕の口縁端部は丸味をもちつつ折り入まれ、内側に稜がある。19はくの字口縁をなす甕。

下層遺物　下層より出土した遺物はすべて土師器であった。さらに注目すべきことは、いずれも壺・甕にかぎられ、しかも完形品として出土したもの（図29—13）やつぶれているが復元すれ

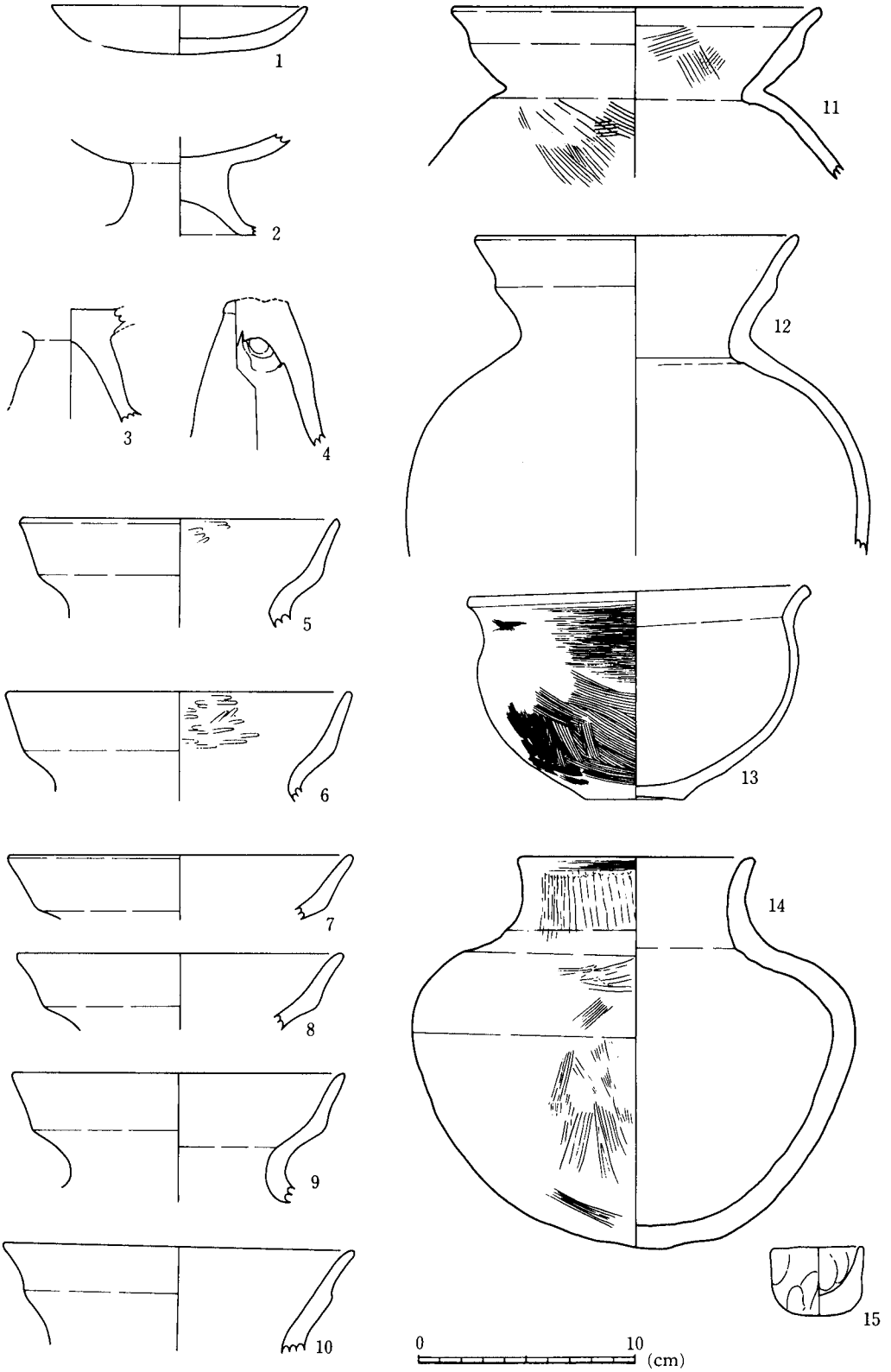


図 29　大形土坑B出土土師器(1)

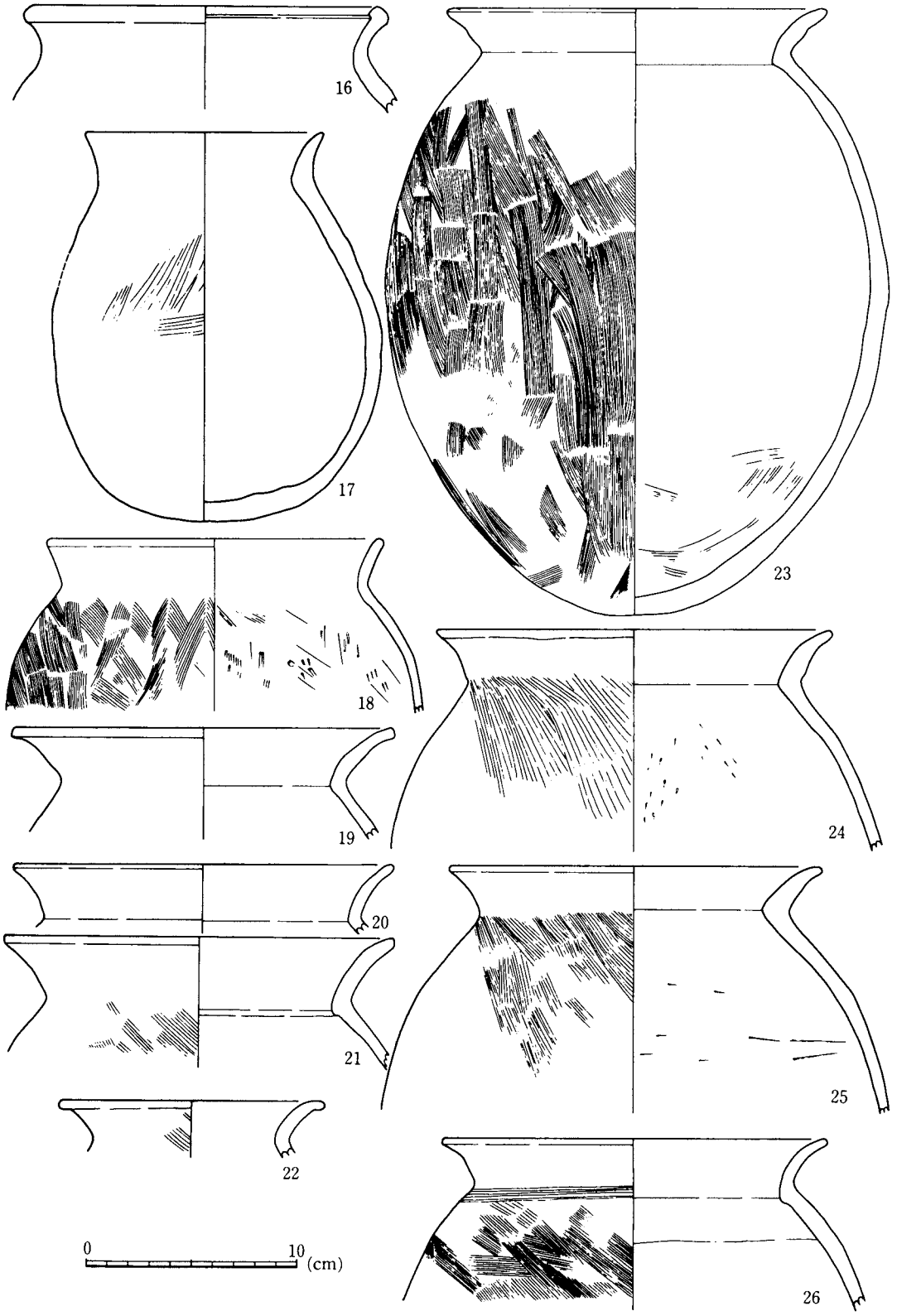


図 30　大形土坑B出土土師器(2)

ば完形となるもの（図29―14・17・23）が多いという点である。このことは、たんに不用品・破損品を投棄したということにとどまらず、ある目的に使用した特定の土器をこの場に埋納あるいは納置したものと考えられる。

〈壺〉（図29）

5～12は、いわゆる二重口縁をなす。これらはa・b類にさらに区別できる。a類は、内側・外側ともに段をなすもの（5～9）。b類は、内側が比較的直線的で外側がにぶく段状になるもの（10～12）である。二重口縁形態は弥生時代末期以来継続するが、端部は円く、稜がにぶいこと等よりみて時期的には降るものである。

14の壺は注目される。短い直立する口頸部に肩のはった胴部が付くもの。口頸部から肩部にかけてはヘラミガキにより調整されている。本来的には土師器の器形にないものであり、おそらく須恵器の広口直口壺をモデルにしていると考えられる。器高18 cm、口径11 cm、肩部径20.5 cm。

〈甕〉（図29・30）

甕の破片は大変多い。図　17・23はいずれも完形に復元できるものであるが、17は、胴下半に重心があり、23は、胴中央に重心があり均整がとれている。タイプとしては、23に近いものが多い。

下層出土甕はすべてくの字口縁であるが、口縁形に多少のバラエティーがある。23・24は、頸部にいたる所が外側にふくらみをもつ。また、17・25のように頸部に厚みのあるもの、21・26のように、厚みがあまり変らず頸部内側に段をもつものとの区別がある。

図29の13は、平底の甕。くの字口縁をなす口頸部が外に大きく開く。口頸部外側はナデ調整、胴下半はハケメ調整である。全体にススの付着がひどい。器高9.6 cm、口径11.5 cm。

下層より出土した甕は、13にかぎらずいずれも顕著なススの付着を認める。

〈その他〉（図15）

下層からは、椀・皿・高杯といった供膳形態は一切出土していない。ただ一点、手捏土器が出土した（15）。器高3.1 cm、口径4.2 cm。底部が厚い。

小括　本土坑も土坑B同様いついかなる目的で掘られたかは判らない。ただし、本土坑は、土器層が明瞭に二分される。上層は、土坑B、10号住居址出土土器と、時期・出土状況とほぼ同様であるが、下層は、壺・甕のみ、しかも完形品となるものが多いという特異な出土状態をなしている。下層土器の時期は、伴出須恵器がないため決めがたいが、14が須恵器の模倣土器とすると6世紀前半ごろに比定できるのではないかと思われる。

(4)　竪穴住居址（その2）　―4号住居址―

扇形緩斜面の中腹に4号住居址がある。本住居址は居住部分（竪穴）と外周溝および両者を連

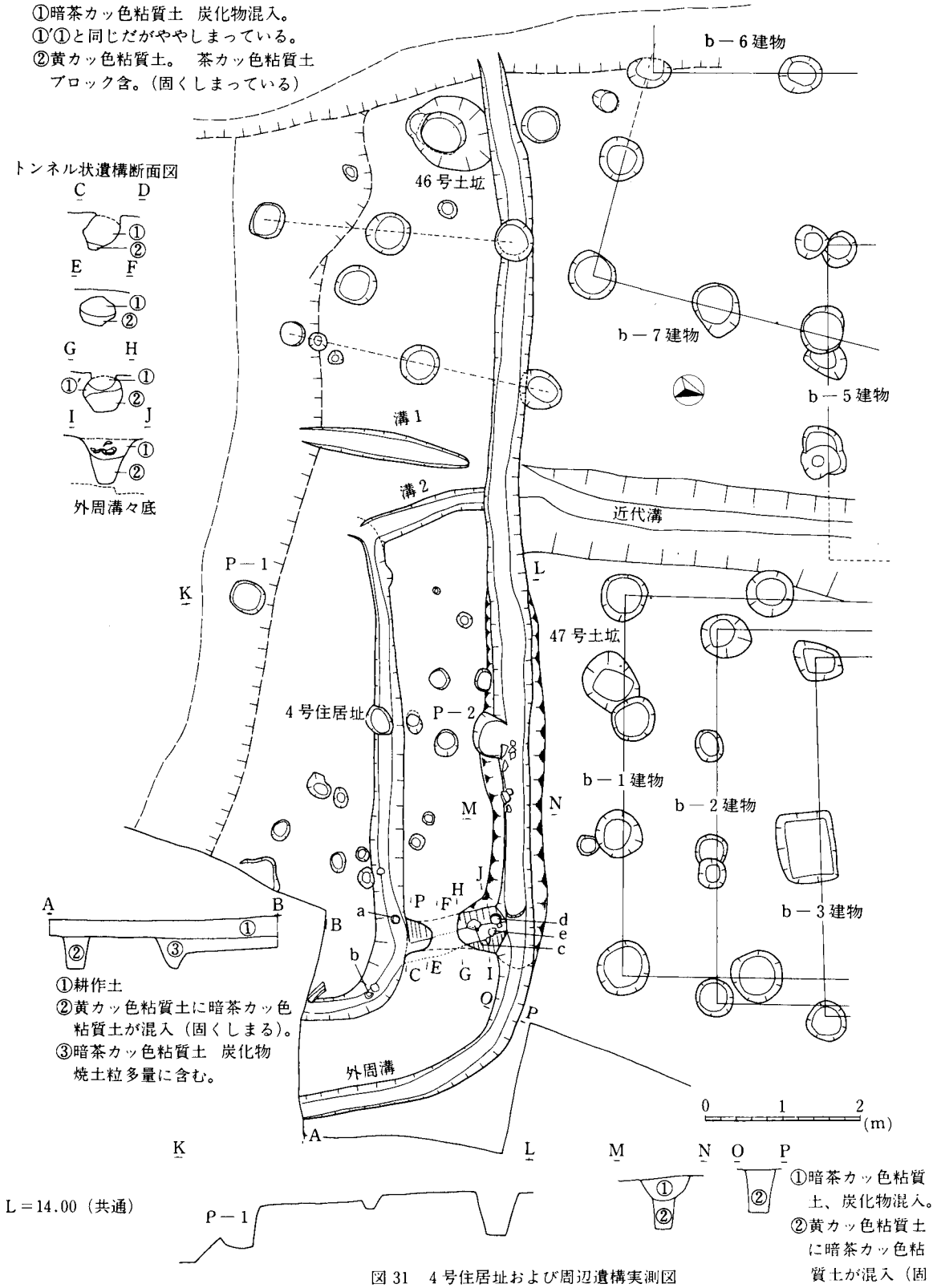


図31　4号住居址および周辺遺構実測図

絡するトンネル状遺構よりなる。4号住居址を前述の竪穴住居址群と別個にとり上げるのは、時期が降るとともに後述の掘立柱建物群との関連性を認めるからである（図31）。

竪穴　南側の過半が消滅しており、遺存するのは北と東の周溝、および主柱穴一ケ所（P－1）のみである。上部もかなり削平されており、もっともよくのこる所（断面A－B）で床面までの深さ20cm弱であった。周溝は幅40cm程度で比較的しっかりしている。P－1は現存径45cm、深さ55cmを計る。プランは、隅円方形を呈し、北側の一辺は約6.6mを計る。遺存する床面に焼土は確認されなかった。覆土は、暗茶カッ色粘質土で満たされており、炭化物・焼土粒が多量に含まれている。レンズ状の堆積状態をなしておらず自然に埋没したものとは考えにくく、人為的に埋められたものと観察された。周溝中には、土器が数点没入していた。なお、溝1・2は、時期不明で本址と直接関係しない。

外周溝　北東隅コーナーと同じカーブを描いて外周溝がめぐり、それは、北側壁と平行しつつそのまま西にのびる。北西隅コーナーをすぎるあたりから掘り方が若干雑となり微妙にだ行する。溝底のレベルは、東ほど高く、断面A－Bでとらえた外周溝々底と現存する西端の溝底では約50cmの落差がある。したがって、排水の役割を果していることは疑いない。

ところで、竪穴の北辺に平行する部分が拡幅されている。外溝溝の断面は凵字形であるがその中途以上を断面丸底状の溝に再利用しているのである。一方、外周溝の東側、丸底溝が始まる所までは黄カッ色粘質土に暗茶カッ色粘質土が混入した土が充満しており、しかも、固くしまっている。したがって、明らかに埋めたものと判断できる。その土は、丸底溝の下に掘り方とともに遺存し（断面M－N）、西へゆくにつれて薄くなる。他方、丸底溝は暗茶カッ色粘質土を覆土としておりこれは、そのまま西の端までつづく。

以上を総合すると、まず、外周溝のうち東辺、北東コーナーおよび北辺のある程度までが埋められ、東西の比較的急な直線の溝となる。その後、竪穴北辺に平行する部分を丸底状に拡幅し、整形した、ということになろう。

なお、P－2については、溝がつくられる前に掘りこまれたピットであるが性格は不明である。

トンネル状遺構　竪穴壁と外周溝の間隔はほぼ一定し、おそらくその間に土盛りがあったものとみなされるが、北辺の北東コーナー近くに竪穴壁と外周溝をむすぶトンネル状の遺構が確認された。断面円形をなし、底は住居内周溝と外周溝々底をつなげるようにつくられている。わずかに、外周溝底に向って低くなっており、しかも、出口の部分で溝底に段をもうけている。したがって、性格としては、排水か、あるいは湿気を外に出すためのものと考えなければならない。

ところで、さきに外周溝が埋められたことを指摘したが、おそらくその一環として、トンネルの下半分が埋められている事実がある。断面図をみると下半分が黄カッ色粘質土に茶カッ色粘質土が混入した土がみられる。これは、外周溝を埋めた土とほとんど同じもので、しかも固くしまっているからである。したがって、これ以後、トンネルは残るが、断面図をつなげてみるかぎりや

や上向きの状態となって機能していたことになる。

遺物　図32は、外周溝を含めて4号住居址より出土した土器である。1～5・7・8は竪穴内より出土した。このうち、1（a）・2（b）は、竪穴周溝内より出土したもので本竪穴の廃絶の時期を示すと考えられる。いずれも小形の杯で、1は口縁が欠損しているが、2は半分に割れたものの一方である。後者は、口縁部がゆるやかに開き、底部との境はなお丸みを持つ、7世紀末ごろに比定し得るものと思われる。他の土器もほぼ同じ時期とみられる。

6・9～12は外周溝より出土した。ただし、土層的には第一層の暗茶カッ色粘質土より出土し、竪穴築造時の厳密な意味での外周溝―ある時期に埋められたと推定される―ではなく、そののちに、竪穴の北辺に平行する部分に新たに拡幅的に掘り通された溝からの出土である。

9（d）・10・11（c）・12（e）は、トンネル状遺構と溝の接するあたりに出土した。9は焼成はやや甘いが、丁寧に作られた台付杯。深い杯部分の底にかなり張り出した台部を有する。口

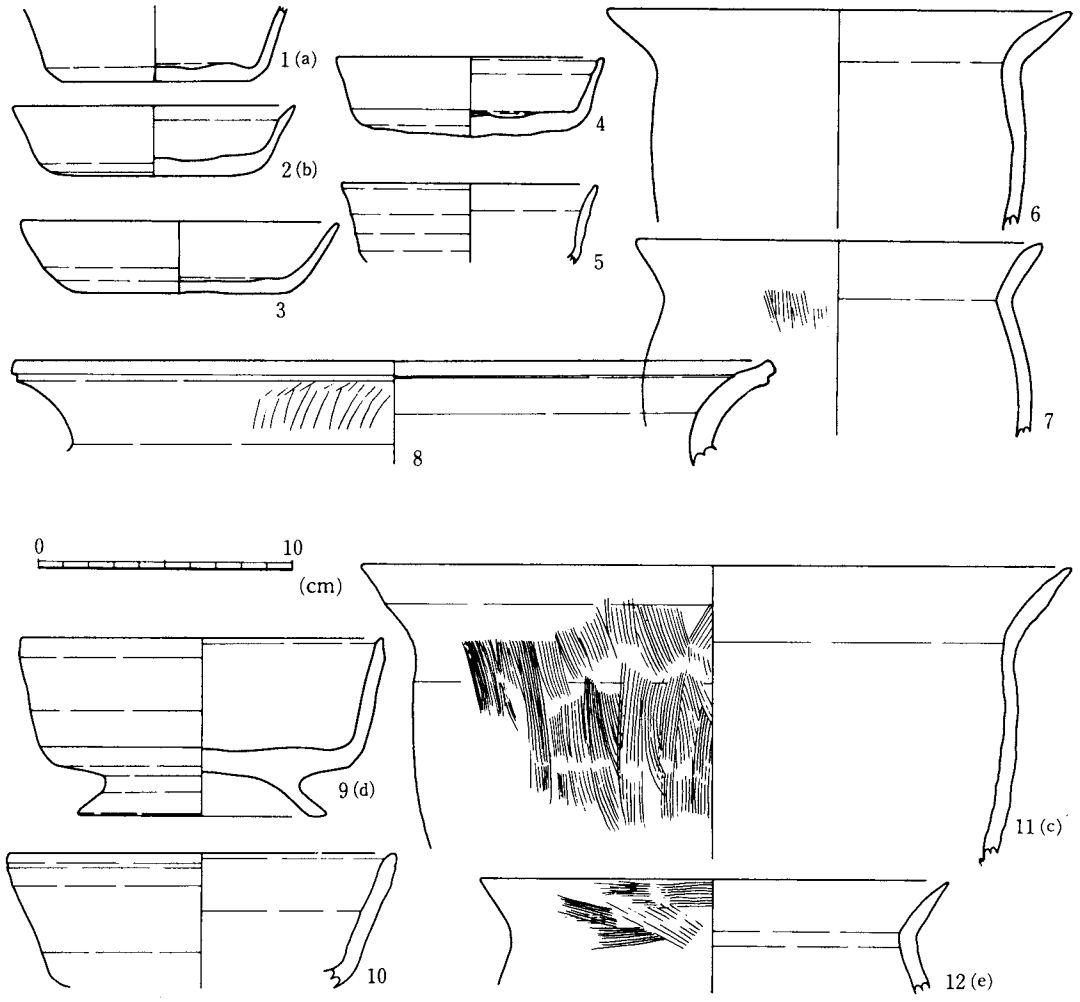


図32　4号住居址出土土器

径14.1 cm、器高7.0 cm、台径9.7 cmを計る。10は、底部が欠けているがおそらく同じ台付杯となるものとみられる。11は、口縁が開き、胴の張りの少ない土師器甕。やはり7世紀後半代に推定される。以上、遺物は、いずれも8世紀に入るものではなく、7世紀後半代、おそらく末ごろと考えられる土器で占められている。

b－1建物との関係　4号住居址は大変複雑な様相を呈するが、さらに、b－1建物との関係においても掘立柱建物との関連性が指摘される。

外周溝を中心線とすると、4号住居址北辺とb－1建物南妻柱列がまったく対称的な位置関係にあることが注目される。少なくとも外周溝が機能している間に、それに妻柱列を平行するようにb－1建物が築造されたと考えざるを得ない。4号住の本来の外周溝を第1次溝、拡幅溝を第2次溝として扱って厳密にのべると以下のようになる。

第2次溝がb－1建物の妻柱列のもっとも西の柱穴のあたりより始まることなどの要素をみると第2次溝はb－1建物にと属する可能性がきわめて高い。次に、4号住居址北辺の位置と妻柱列の位置にずれがないことからみて併存期間があることが十分考えられる。したがって、4号住居址築造後しばらくしてb－1建物が築造された訳であろうが、いくらかの併存時間を想定するのが自然であり、あるいは4号住居址が廃絶していたとしても第2次溝の機能中に後者が築造されていることは明らかである。

ところで、4号住居址出土遺物は、第2次溝もふくめてほぼ7世紀末ととらえられた。むしろ印象的には、第2次溝の台付杯がやや古相をなしていることが気になる。したがって、第2次溝が竪穴廃絶をまたずして消滅している疑いももたれるのである。この点からいうと、4号住居址とb－1建物は併存する公算がさらに強くなる。

さて、b－1建物の築造時期であるが、第2次溝出土遺物からみて、7世紀後葉と位置づけてよいと思われる。

(5)　掘立柱建物

掘立柱建物は、竪穴住居群と同じ緩斜面に築営されている。これらは、下段(11 mコンタ前後)と中段（14 mコンタ前後)、上段（16 mコンタ前後）に区別されるが、それぞれa小群とb小群、c小群と呼ぶことにする。これらのうち、群の全容がほぼ明らかなのはb小群のみである。なお、記述上、柱立柱建物をたんに建物と称しておきたい。

1）a小群

a－1・a－2建物（図33)

いずれも調査区の南端、11 mコンタ付近に確認された。南と西の部分が破壊されており規模は不明である。東柱列の柱穴底のレベルが南に若干下るもののほぼ一定とみてよいのに対して、北

柱列の柱穴底が西に向って傾斜している（P－3とP－4、P－7とP－8）ことよりみて、西に降る斜面に築造されていることは明らかである。したがって、北と南の柱列が東西のそれより長いことは考えにくく、いずれも南北柱であることは疑えない。一方、南側も斜面となりゆく関係からみて柱列がそれほど長くのびることはなかろう。おそらく、桁行3間ないし4間、梁行2間ないし3間程度の建物と考えられる。

切り合い関係がないので前後関係は不明。柱穴はすべて円形で径60 cm～50 cm程度、a－2建物の方が柱穴はやや大きい。方位はわずかにことなる。

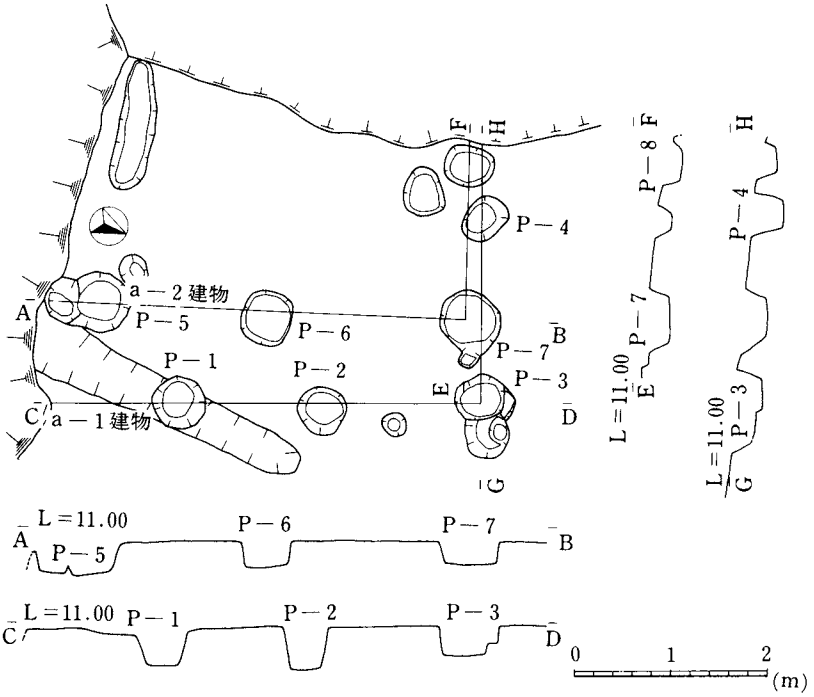


図33　a－1、a－2建物実測図

2）b小群（図12）

b小群は、扇形緩斜面の中段、14 mコンタ前後に位置する。立地面は比較的平坦な面を現在なしているが、これが最近の削平のみによるものとは考えがたいふしがある。b－4建物の北東隅をかこむように柵列があり、そしてその外側は、ガケ状となりたちあがる。さらにその上に柱穴群（c小群）が立地する。b－4建物とc小群の東側柱穴群との落差は1.5 mから2 m近くあるから、柵の外のたちあがりは、現在のような状態かは別として、なんらかの掘削・整地がなされていたと考えざるを得ない。また、b－1・2・3建物の東側柱列にほぼ平行して段差が続いていることが注目されるに加えて、4号住居址の外周溝が段差に平行するように走り、かつ、曲ったあとは直交的にのびるのである。したがって、b小群は、たんに小群としてまとまっているというだけでなく、方形の占地区画を共有している建物小群としてとらえなければならない。

さて、検出された建物は8棟＋αである。このうち、東西棟1棟(b－4建物)、1間×1間の建物1棟（b－8建物）のほかは、南北棟である。

これらの建物は、4号住居址外周溝との関係でみると三つに区別することが可能である。第一は、外周溝および4号住居址と密接にかかわるb－1建物である。前述したとうり、b－1建物は、南妻柱列が、約1.1～2mの幅で平行し、かつ、それをはさんで4号住居址北壁と相対応する位置にある。

第2は、4号住居址と併行関係は確認できないが、外周溝から間隔をおきつつも、なお、妻柱列または側柱列がほぼ平行あるいは直交するもの。b－3・4・5・6・8建物がそれに相当する。これらは、外周溝が機能しているか、あるいは機能をおえたにせよ、外周溝と直交または平行するという築造上の約束事が生きている段階の建物である。一方、外周溝にまったく制約されていない建物がある。b－7建物とおよびその南側の柱穴群がそれにあたる。これらは、外周溝が完全に消滅し、かつ、築造上の約束事も失われた時期の建物といえる。これが第三のグループである。

b－1・b－2・b－3・b－8建物（図34）

上記の4棟は重複している。いずれの柱穴も抜き取り穴が確認できず、その一方で柱痕をのこす柱穴（p－5・6・18）がみられることから推して、移築または解体に際して、柱を根元から切り取る方法がとられたものと考えられる。

4号住居址およびその外周溝と密接に関連するb－1建物は、桁行4間・梁行3間、7.4×4.9mの規模を計る。b－2建物は、b－1建物と同じく4間×3間で、しかも規模・方位ともほとんど同じであった。柱穴をみるとb－1建物は、いずれも径70cm前後の比較的しっかりした円形ピットであるのに対して、b－2建物の場合は、円形でほぼ統一されているが、径がふぞろいで、全体に径40cm程度のものが主体をなす。柱穴の切り合いをみると、p－3のあとにp－16が掘られたように観察しており、また、外周溝との位置関係、柱穴のわい小化などよりみて、b－1建物→b－2建物の移行を考えてよい。両者とも構造・規模・方位が同じことから、b－2建物はb－1建物の移築によるものとみられる。

b－3建物は、前二者と若干方位を異にし、かつ、桁行3間・梁行2間の形態をなす。規模も小さく6.2×4.8m程度である。柱穴は、円形・長方形・不正円形と甚だ不統一で、乱雑な印象を受ける。b－2建物と多くの箇所で柱穴の切り合いがみられるが、その関係が判明する所ではすべてb－3建物の方が前者を切っていた。p－31は、b－2建物の柱穴をまったく破壊して掘り込まれたものと推定される。梁行が2間ながらも4.8mを計るのは、b－1・2建物のそれを継承しようとする意図が働いているものとみなされる。

ところで、b－2建物・b－3建物を位置的にみると、南妻柱列がb－3建物では外周溝から大きく後退しているにもかかわらず北妻柱列がほとんど同位置にあることが注意される。これは、

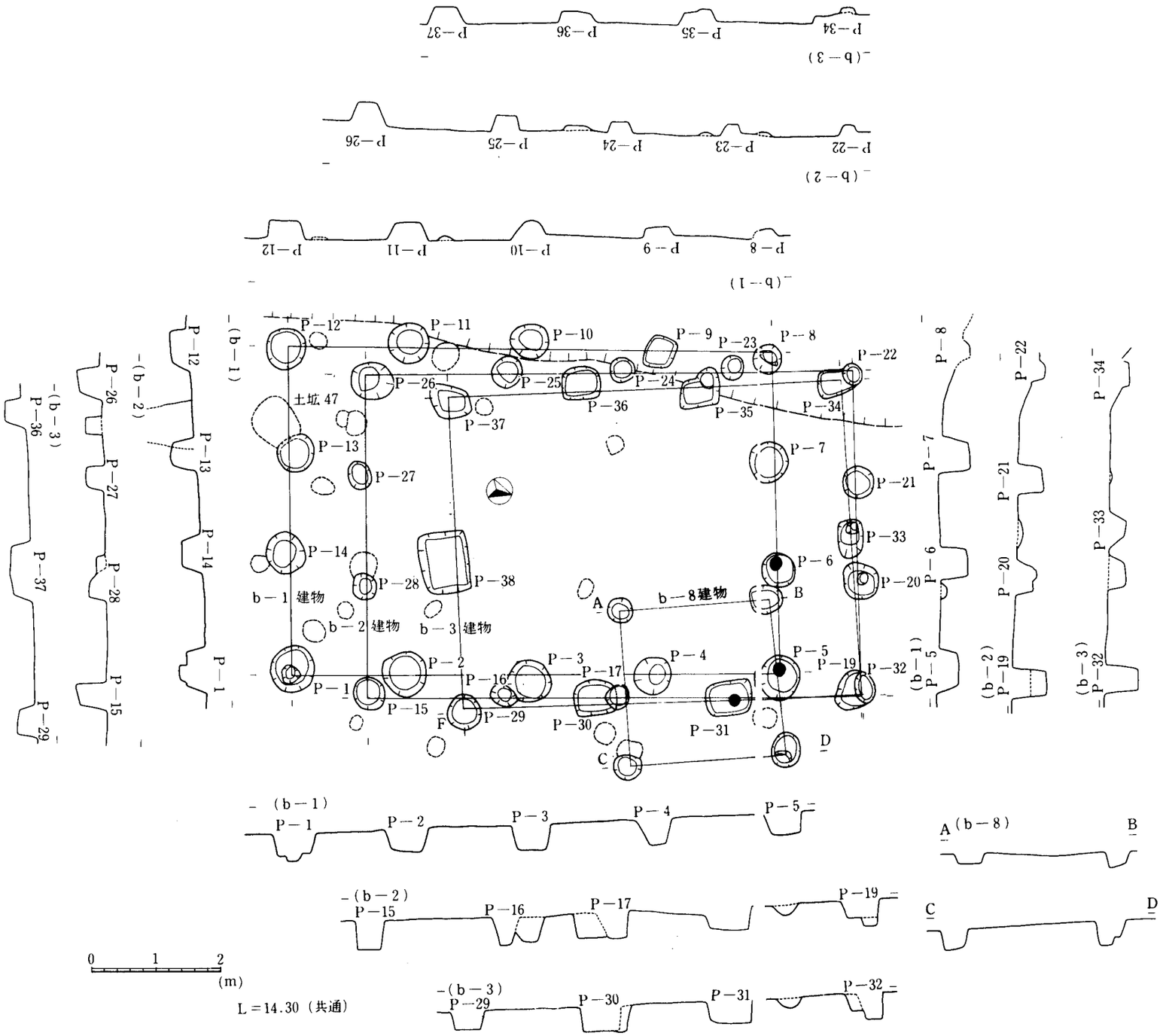
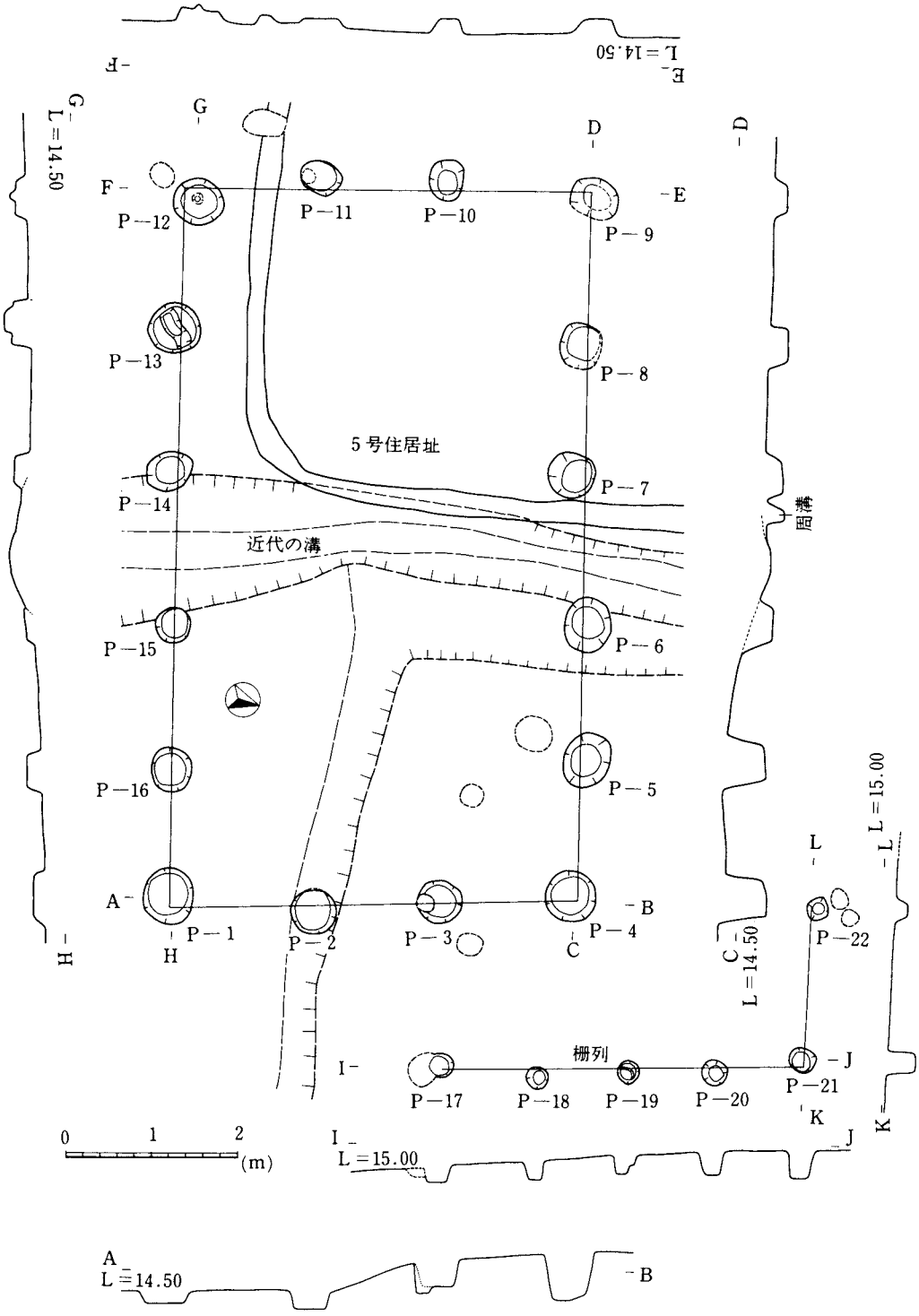


図34　b－1・b－2・b－3・b 8 建物実測図



第35図　b－4号建物実測図

ひとつに外周溝の機能の低下または消滅と関係し、一方、後者の点については、おそらく背後にある東西棟の4号住居址の存在に規定・制約されている結果とみなすことが可能である。

b－8建物は1間×1間の小規模な建物。規模は2.3×2.3m前後の正方形をなす。住居とは考えがたく、倉あるいは納屋的な建物であろう。柱穴は円形を呈している。方位はb－5建物に近い。

b－4建物（図35）

b－4建物は、b小群のもっとも北に位置する東西棟である。桁行5間・梁行3間をなし、規模は8.5×4.8mを計る。5号住居址を切って掘り込まれている。柱穴はすべて円形で径60～50cm程度であった。本遺跡で確認される唯一の東西棟で、規模もb－7建物についで大形である。柱穴はもっとも深いもので現存の深さ約50cmを計る。

一方、建物の北東に、L字形に径25cm前後の小ピットの連鎖が確認された。間隔が1m強を計り、一種の柵列と推定されるものである。南北列は、後世の掘削により南への続きが追求できないが、東妻柱列と2mの間隔で平行している。また、東西列は、p－22で終っているがやはり北側柱列に平行している。したがって、この柵列は、b－4建物に一体となった付属施設であることは疑えない。

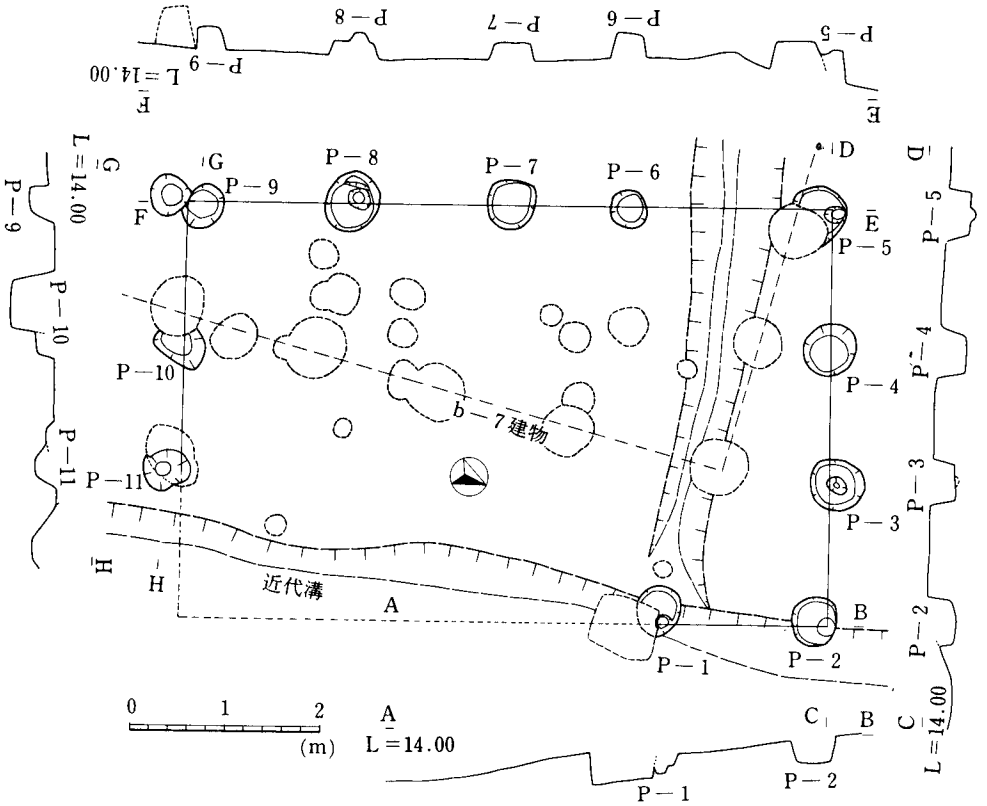


図36　b－5建物実測図

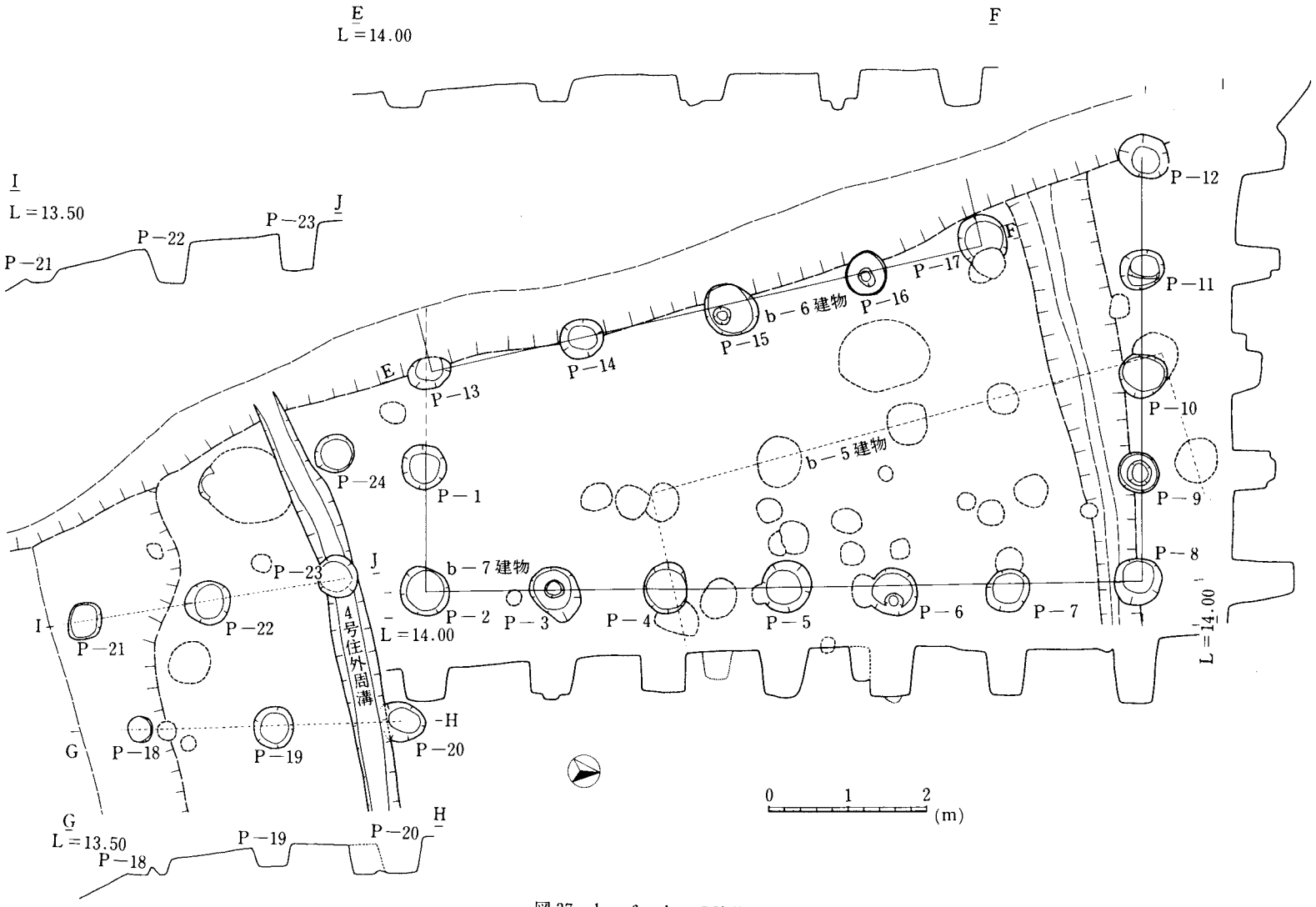


図37　b－6・b－7建物実測図

b－5建物（図36）

b－5建物はb－1・2・3建物の西側柱列に接する位置に築造されている。桁行4間・梁行3間をなし、東側柱穴の大半が消滅しているものの、6.7×4.4m程度の規模に復元される。同じ4×3間のb－1・b－2建物に較べて桁行・梁行ともに小さい。3×2間のb－3棟と比較すると桁行こそ長いが、梁行は逆に短い。これは、b－3建物がb－1・2建物の梁行を継承しようとしたのに対して、そのような事情がないかわりに、b－6建物とb－1・2・3建物の間に入るというスペース的な制約が規模を小さくさせた可能性を考えておきたい。なお、b－1・2棟とは、方位が若干ことなり、その間が1m未満で併存の可能性はないが、b－3建物とは、間隔1.1mでぎりぎり併存できる。とすれば、南妻柱列が一直線となり、かつ、方位的にもほぼ同じであることが注目される。柱穴はすべて円形で、径60～50cm前後。

b－6・b－7建物（図37）

b－6建物は、後世の握削によりかろうじて東側柱列のみが遺存している。4間でその長さ7.2mを計る。柱穴はすべて円形を呈し、径65～55cmを計るしっかりしたものである。方位としては、b－1・b－2建物と平行的な関係にある。

b－7建物は、もっとも大規模な建物である。桁行6間、梁行4間以上を数える、9.1×5.3mの規模を計る。柱穴は、径65cmをこえるものが多く、深さもp－8などは深さ80cmを計る。ただし、方位は、いままでのべてきた建物と著しくことなっており、4号住居址外周溝とはいまやまったく無関係となっており、連続性のとだえた建物占地をなしている。

ところで、b－7建物の南には、確実に柱穴と思われる7ケ所のピット（p－18～22）が検出された。p－21～23は直線をなす、p－23で西に90°折るとp－24がわずかにかかる状態にある。p－24が北に出すぎの感もあるが、一応これを建物の北東コーナーとみてb－9建物としておきたい。

また、p－18～20も直線をなす、p－20で西に90°折るとb－7建物の南妻柱列を通ることになる。東方向には柱穴を認めないので、建物とすれば、b－7建物の南妻柱を利用しまたは共用した建物とならざるを得ない。これをb－10建物としておきたい。

b－9・b－10建物とも、b－7建物と同様、前述の建物群と方位、占地のあり方がことなる第三のグループに属する。

3）c小群

c小群は、扇形緩斜面の上段、16mコンタ前後に位置する。

c－1建物（図38）

6号住居址の東側、建物の北東コーナーの5ケ所の柱穴を検出した。2間以上×2間以上の建物となる。東西棟か南北棟かは不明であるが、おそらく南北棟であろう。柱穴は方形がひとつ

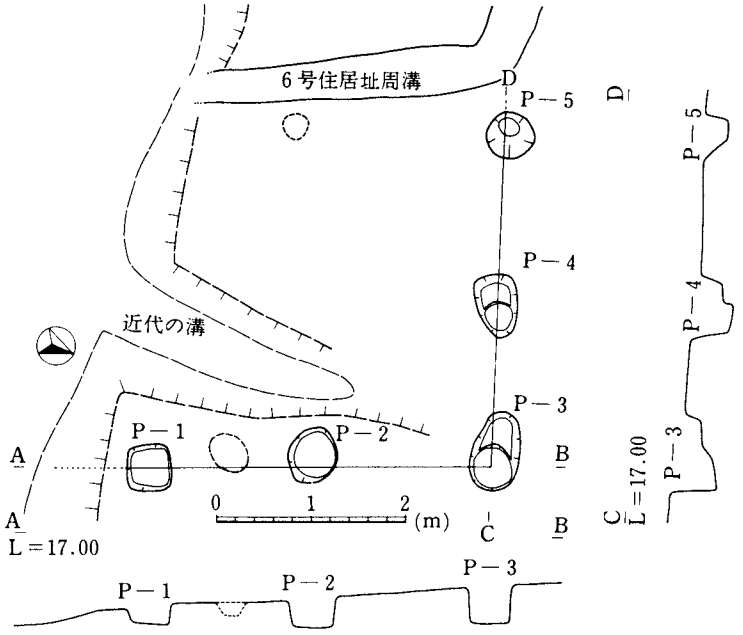


図38　c－1号建物実測図

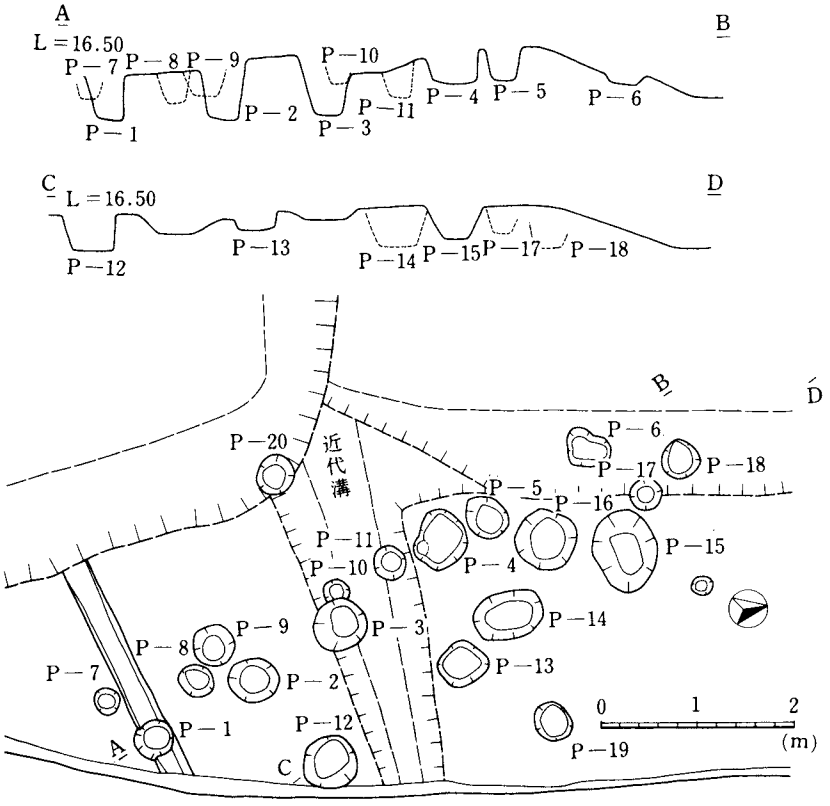


図39　c′柱穴群実測図

あるがあとは径50 cm強の円形である。P－3・4の西の張り出しは抜き取り穴とみられる。

c′柱穴群（図39）

c－1建物を南東に下った箇所に、密集するピット群が検出された。後世の掘削等で建物を復元するのは困難であるが2～3棟の建物の主として側柱の重複状態と観察される。(南北棟として見ると）P－20・P－19については妻柱の可能性がある。

(6) その他の遺物（図40）

最後に、遺構にともなわないが注意すべき遺物についてのべておこう。

須恵器　本遺跡より出土した須恵器は、遺構に伴うもの・耕作土・表土中ともに圧倒的大部分が6世紀末から7世紀初頭のもので占められている。6世紀中葉以前にさかのぼる遺物はきわめて小量であるが、1はその中で最も古い様相を示すものである。若干内傾しつつも直線的にのびるたちあがりを有する杯身。口縁端部は斜傾する。西側の斜面、流土中より出土。口径11.0 cm。集落の開始時期をただちに示すものではないが注意しておきたい。6世紀前葉ごろに位置づけられる。

紡錘車（2）　滑石質のやわらかい石で製作されている。底面径3.5 cm、上面径2.2 cm、高さ1.2～1.3 cmを計る。孔径5.6～5.5 mmで上面の方がやや大きい。暗茶カッ色と茶白色の稿状の石材。外面には、鋸歯状の線刻文が施されている。4号住居址付近の耕作土中より出土した。

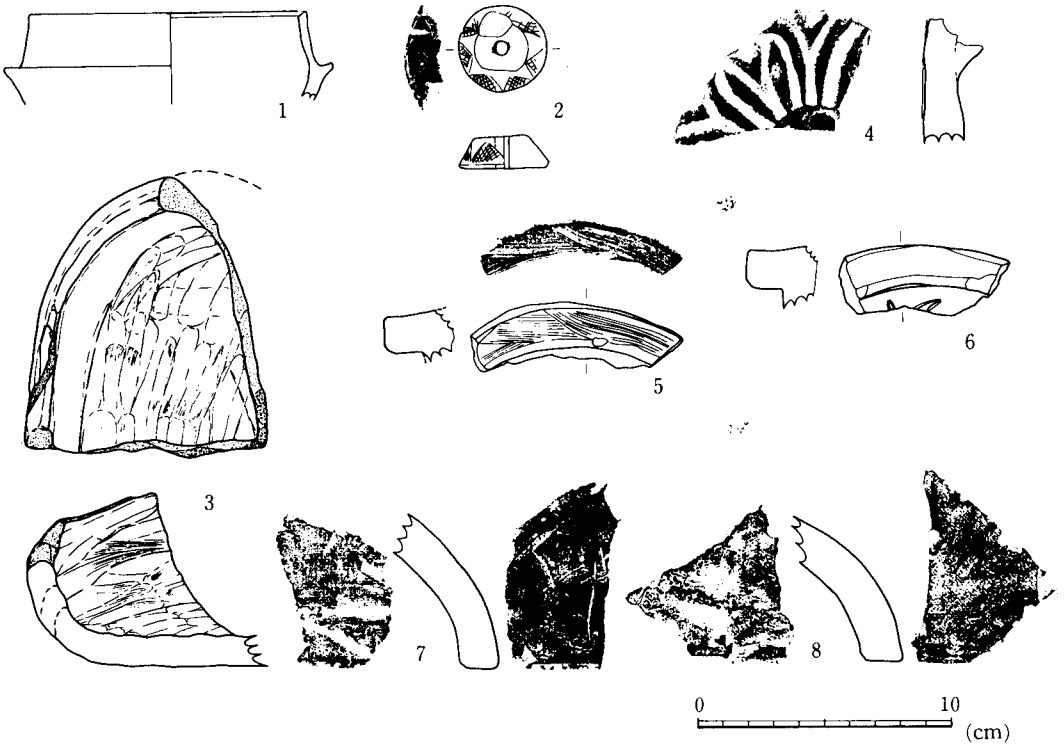


図40　その他の遺物

容器状土製品（3）　焼成はやや甘く灰白色を呈するが須恵質の容器状製品である。外面は荒いヘラケズリ、内面は指ナデによって調整されている。断面には粘土紐のまき上げの痕跡が明瞭にのこっている。だ円形の容器になるものと思われる。西側の斜面の流土中より出土。時期不明。

瓦　表土中より若干の瓦が出土した。シャコデ台地の東にはシャコデ廃寺が知られており、ある時期の同寺に葺かれていたものと判断される。

4は、軒丸瓦内区の破片である。複弁蓮花文をなすが、文様は簡便で彫りが浅い。子葉は棒状をなし、その間のV字の突出がかろうじて複弁を表現し、花弁そのものは、子葉とV字の突出箇所をまるくめぐる突出帯により一葉となる。花弁と花弁の間は、これまたV字の間弁が配置されるが中房まで続かず退化した印象を受ける。5・6は、周縁の部分。いずれも径15 cm程度に復元できるが、径が小さい割りに突出度が高い。ハケメまたはヘラケズリにより調整されている。6をみるとV字形の簡弁がみえる。したがって、この軒丸瓦は外区が省略されていることがわかる。

さて、外径15 cm程度であることを前堤にし、4の文様を復元的に構成してみると、花弁は五葉となった。複弁五葉となる訳であるが、奇数の花弁は類例に乏しく、あえて六葉とすると花弁の大きさにばらつきを認めなければならない。いずれにせよ、文様構成がくずれてきた段階の瓦であることは疑えない。なお、この軒丸瓦と全く同じ文様構成のものが寺家遺跡より出土している。

7・8は丸瓦。内面は細い布目が付く、白くなった部分は指によるナデと考えられる。外面には、ケズリの痕とナデの痕がみられるが、格子目・縄目の叩目痕は認められない。厚さ1.5 cm前後薄くて小型の製品である。

これらの瓦は、いずれも焼成が甘く、小型で粗雑に作られているという特色がある。時期を比定するには類例が少ないが、9世紀の後半以降、10世紀代に降る可能性もある。時期の限定は今後の課題としておきたい。

第III章　考察——六・七世紀集落の検討——

本遺跡の中心的遺構群である六・七世紀集落の展開について考察したい。この集落の特色は、台地の西端部、扇形をなす緩斜面に占地していること、竪穴住居から掘立柱住居への移行がみられることの二点がまず指摘される。対象となる竪穴住居址9棟・大形竪穴状土坑2棟・掘立柱建物11棟＋αである。なお、扇形緩斜面の全領域を調査した訳ではないので、北西斜面と南東斜面になにがしかの遺構は想定しておくべきだろう。

時期と変遷　まず、出土土器の上限・下限、出土量と出土状態に注目しよう。上限は、図40—1で示した六世紀前葉の杯身片である。しかし、六世紀前半代から中葉ごろまでの土器はきわめて少なく、該期に比定し得る住居址も調査区の範囲では指摘することが困難である。

その一方で、大形土坑Bの下層土師器群が注意される。六世紀前半代に比定したが、大形土坑Aの長頸壺（図27—7）もほぼ同期と推定され、いずれの大形土坑もそれ以前に掘られているとみなければならない。六世紀前半代には、本格的な集落形成はまだしも、何らかの生活・活動の場として位置づけられていたのである。

下限は、大形土坑Aの上面より出土した杯蓋(図25—14)。表土中より出土した瓦若干をのぞくと土器としてはもっとも新しい。内側のかえりが消滅し、八世紀前葉に比定した。4号住居址および外周溝出土土器より若干降るもので、集落の廃絶をこのころに相定するのが妥当であろう。

ところで、集落形成が連綿と続いた訳ではない。とくに重視されることは、出土土器の大部分が六世紀後葉から七世紀前葉の土器に占められ、そのあと、4号住居址の七世紀末近くまでまったくといっていいほど遺物が出土していないことである。なかんずく七世紀前葉の遺物は、耕作土中、遺構ともどもおびただしく出土し、大形土坑A・Bともこれらの時期の土器の投棄の累積により埋没し、さらに10号住居址もこれらの土器（7世紀初頭から前葉を中心）の大量投棄がみられる。したがって、7世紀の前葉に集落形成の停止＝集落のかたずけがあったことを推察させる。

空白期間のあと集落形成が再開されるのは4号住居址、そして、最終的に廃絶するのが八世紀前葉と想定することが許されると思う。

以上、二時期の集落形成を認め、六世紀後葉から七世紀前葉の集落をI期集落、七世紀後葉から八世紀前葉の集落をII期集落と呼ぶことにしたい。ただし、空白期間をもって、全く系譜の異なる人間集団の占地を想定しない。同じく扇形緩斜面に立地し居住領域を等しくしているとともに、いずれも六・七世紀では類例の少ない外周溝を有する竪穴住居址をみることに両者の密接な関連が指摘できるのである。

I期集落の構成　I期に含まれる住居址は、2・3・5・6・7・8・10号の7棟で、すべて

竪穴式住居である(溝のみ確認した9号住居址は一応除外しておく)。出土土器の年代幅、竪穴に切り合い関係（6号・8号住居址、3号・8号住居址）がみられることなどからみて、これらの住居址は、2世代にまたがるものと推定できる。さて、次の諸点を指摘したい。

年代をほぼ確定できるのは、まず、土器の大量投棄がみられる10号住居址と床面に須恵器をのこした5号住居址、いずれも集落形成の停止直前の7世紀初頭ごろに位置づけられる。その他の住居址でも覆土中などにほぼ同時期の土器片が出土するものがあるが、集落のかたずけに際してまぎれこんだ可能性もある。一方、3号・6号住居址は土師器を溝中に遺存する。3号住居址の椀は口縁がやや内屈する点で六世紀の後葉に位置するものとみられる。8号住居址のそれは、底部がぶ厚く重心の低い小形の壺であるが、類例は、吉岡康暢氏編年土師器VI様式(「北陸における土師器の編年」考古学ジャーナル　1967)にみられることから、やはり六世紀後葉に比定し得る。

大型住居址の存在。5号住居址は、一辺8m近い大型住居址・柱痕も大きく、かつ緩斜面のほぼ中央に位置する。集落の中核的存在といってよいだろう。これに比肩するのが6号住居址、一辺7m強をはかり、前者にはおよばないものの、やはり大型住居に数えられる。本集落址には二棟の大型住居址が確認されるのであるが、併存する可能性は少なく、上にのべたように、6号住居址が古く5号住居址が新しい。

次に、7号住居址と8号住居址。いずれも長方形プラン、外周溝をもつ、炉の場所が同じ箇所であること、方位的にもほぼ等しいという共通点をもつ。同じ住人が別の箇所に同じ形態の住居を営んだ結果とみれないこともないが、おそらく同時併存であろう。位置的に離れていることに注目。

3・6・8号住居址の切り合い関係。3号住居址は北東コーナーしか現存しないが、よほどの小型住居を想定しないかぎり8号住居址の外周溝と切り合う関係にある。一方、床面のレベルが1m程8号住居址が低いことからみて、8号住居址が3号住居址の一部を掘りくずして築造されていることは明らかである。3・6号住居址をともに六世紀後葉に位置づけたが、その廃棄後、両者の間にわりこむように8号住居址が築造されたと推定できる。なお、2号住居址については、3号住居址と接近しすぎており、同時併存の余地はないとみられるが時期を特定できない。

以上の諸点を再構成してみよう。I期集落を新旧二世代に分離すると、第一世代は3号住居址と6号住居址の2棟、第二世代は5・10・8号住居址に8号住居址と併存の疑いが強い7号住居址を合せて4棟を数えることができる。2号・9号住居址の時期を特定することができず、また調査区外にも若干の遺構の存在も考慮する必要があるので、一世代3～5棟程度の集落規模を想定することが妥当であろう。

占地のあり方はいかがであろうか。いずれの世代も大型住居各一棟（第一世代＝6号住居址、第二世代＝5号住居址）を有しており、大形住居址を核として周囲に2～3棟が配置された構成をとっている。その特徴は、第一に、方位をそろえたり、立地のレベルを同じくするといった整

然とした配列がみられないという点である。第二は、位置の離れた7・8号住居址が併存するように、住居の占地の領域が緩斜面全域にわたり、その中で分割された小区域、すなわち、あらかじめ与えられた住居の移動のさらに小さい枠が見い出せないことである（仮りに、7・8号住居址に前後の関係があるとしても、同じ形態のものが飛んで占地し得ることが問題である）。したがって、一見整然としない数棟の住居群は、分離できない唯一の単位のものとして、扇形緩斜面を共有的に領有しているということができる。

II期集落の景観　II期集落は、竪穴住居址1棟（4号住居址）と11棟＋αの掘立柱建物よりなる。掘立柱建物は、a、b、cの各小群に区別され、このうちほぼ全容が明らかなのはb群である。

4号住居址の築造にはじまるb群は、その位置・方位および外周溝との関連で次の三つのグループに区別されることはすでにのべた。4号住居址と併存する可能性の高いもの（b－1建物、b－2建物も可能性あり）、併存の有無は確認できなくとも4号住居址および外周溝との方位的位置的約束事が見いだせるもの（直交するb－3・5・6・8建物、平行するb－4建物）、第三がそれとは関連性がみられないもの（b－7・9・10建物）である。第三グループのb－7建物の方位が、N－4°－Wであるのに対して、第一・第二グループは、N－16°－Wから、N－19°－Wの間にあり、振れの範囲は3°以内におさまってしまう（表2）。

表2　掘立柱建物計測表

建物	柱間		規模（m）		床面積（m²）	方位
	桁行	梁行	桁	梁		
a－1	3(+)	2(+)	+	－	－	N－16°－W
a－2	3(+)	2(+)	－	－	－	N－18°－W
b－1	4	3	7.4	4.9	36	N－16°－W
b－2	4	3	7.6	4.8	36	N－16°－W
b－3	3	2	6.2	4.8	30	N－18.5°－W
b－4	5	3	8.5	4.8	41	W－15.5°－S
b－5	4	3	7.0	4.4	31	N－18.5°－W
b－6	4	－	7.4	－	－	N－16°－W
b－7	6	4か	9.1	5.6	61	N－4°－W
b－8	1	1	2.4	2.3	6	N－19°－W
c－1	3(+)	3(+)	－	－	－	N－21°－W

a・c群との関係はいかがであろうか。a－1建物がN－16°－W、a－2建物がN－18°－W、c－1建物がN－21°－Wとほぼb群の第一・二グループに方位を合わせているのは、これらが併行する同時期の建物であることを示している。b群第三グループを除外していうと、II期集落は、I期集落とはことなり、一定の方位性をもった整然とした集落形成がなされていることに気付くのである。

建物小群の構成　a・b・cの建物小群は、それぞれ、11m・14m・16mのコンタ前後に階段状に占地している訳であるが、建物小群の構成をほぼ全容の明らかなb群について詳しくみてみよう。

b－7・9・10建物と小形のb－8建物を除外し、南北棟を抽出すると、二棟づつの対となる建物が検出される。まずb－1建物とb－6建物。いずれも方位はN－16°－Wで、平行するとともに前後の妻柱列もほぼ直線的に並ぶ。次は、b－3建物とb－5建物。これも方位はほとんど同じであり、かつ、南妻柱列を直線的にそろえている。

次に、b－4建物についてみよう。東西棟という性質からいって単独で存在したとは考えにくいのであるが、少なくとも北妻柱列が並ばず、また、方位的にずれるb－3・b－5建物とは共存しない。対して、b－1・b－6建物は北妻列がそろい方位のズレも少ないから共存の可能性が高いとみなされる。ただし、b－1建物と規模・方位を同じくするb－2建物がその移築としてとらえられるとすると、b－6建物と方位が同じでも妻柱列がそろわない関係になるが、それは結果としてそうなったものとして理解しておくのを妥当としたい。

b－1・b－6とb－4建物とその間に入るb－2建物とb－3・b－5建物に区別し得たのであるが、なお、それらが近い連鎖の関係にあることは、b－2・b－3建物の関係から指摘できる。両者の北妻柱列の位置がほとんど変化していないことを、背後のb－4建物の存在に制約されたものとみなせば、b－2建物が廃されてもb－4建物がしばらくのこり、b－5建物が築造されるころには消滅していたと推定されるからである。

b－4建物は、b－1・b－6建物、およびb－2建物さらにb－3建物と共存すると推定したが、これを機械的に処理すると長期の存続を想定せざるを得ない。b－1建物は一方において4号住居址と併存する可能性がきわめて高く、同時にb－6建物と共存するのであるが、4号住居址とb－4建物との関係はいかがであろうか。掘立柱建物のプランは正確な長方形ではなく微妙に変形している。この側面をとらえると、b－4建物の東妻柱列とb－1建物の東側柱列がほぼ平行しているとみてよいのに対し、後者の南妻柱列が4号住居址の外周溝に平行するが、後者の南側柱列はわずかに西に向って間隔が開くようにつくられている。したがって、b－4建物は、4号住居址および外周溝とは共存していないと推定されるのである。

煩雑な推定を重ねたが、b群の建物の築造連鎖と共存関係をまとめれば以下のようになろう。

4号住居址	b－1建物	b－2建物	b－3建物	b－3建物	
b－1建物 →	b－6建物 →	b－6建物 →	→		…→b－7建物等第三グループ
b－6建物	b－4建物	b－4建物	b－4建物	b－5建物	

b群は、2～3棟の建物小群よりなり、b－7建物等第三グループ以前に、五度の変化をとげ

ていることが明らかになった。しかし、さきに推定したように、II期集落は、4号住居址および外周溝やその他の箇所から出土した土器からみて、7世紀の後葉から8世紀の前葉の短い期間とみられる。したがって、短期間のうちに顕著に建てかえがおこなわれたこともまた指摘されるのである。b－7建物以前の五度のうち、b－4とb－6建物が3度、b－1・b－3建物が2度存続していることをみると、第三グループを除外すると、二世代程度の年代幅を想定しておく必要がある。なお、b－3建物ののちb－8建物(倉?)が建てられたものとみなされる（b－5建物と共存するとみられる)。

II期集落の構成　b群は2～3棟よりなる建物小群の累積であるが、いまひとつ重要なことは、一定の小区域に占地していることである。南は、4号住居址外周溝に画され、東がb－1建物の東側柱列に平行するように斜面をカットし、さらにb－4建物の北東コーナーをめぐるようにL字状の柵列がめぐるのである。この南北20m、東西おそらく20m程度の方形区画は、建物小群を築営する目的で人為的に造成された、建物小群にぞくするものとしての〝宅地〟である。

b群は第三グループの建物以前に五度の変化があり、重複関係が顕著であるのは、小区域を逸脱せずして築造が続いた結果であるが、a群についても重複がみられ、c群についても南東柱穴群にみる著しい重複の仕方は、同じ形状の区画かどうかは別にして、後二者についても建物小群が占地する区域＝宅地を想定させる。

I期にみた3～5棟の竪穴住居群の最小の単位が、ここに至って、現象的には三つの建物小群に分解し、他方、扇形緩斜面という共通の居住領域は階段状の小区域に区分され、建物は、すでに〝宅地〟と呼んでいい小区域に建てかえ・移動の枠をもとめているのである。

さて、さきに検討したb群にa・c群を比較すると次の二点が指摘できる。

第一は区域＝宅地の問題。a群は、緩斜面の裾近くにあり、a－1・2建物の西と南側はかなりの斜面となる見込みで、b群の区域ほどの面積は期待できない。c群は、b群の背後にあって面積としてはかなり広いのであるが、斜面の傾斜がやや強く、一方においてb群の区域によって斜面がL字に取り削られているので、不定形な区域となっている。いずれも、b群のように平坦で整った方形区画を想定できず、宅地としては安定性を欠くものといえる。

第二は建物配置の問題。b群には長大な東西棟（b－4棟）が建てられ、コの字およびL字の建物配置が確認されている。しかし、a群ではスペースとして長大な東西棟の占地は無理であり、c群でも調査の範囲で確認されていないという理由以外に、東西の傾斜がやや強いことからみて東西棟を築造しにくい地形たることに注意する必要がある。いずれも南北棟のみによる配置の疑いが強い。したがって、宅地としても劣る条件・地形にあるとともに、建物配置の上でもb群におよばないと推定してよい。

各群が均等なものでないことが明らかになった。II期集落は、一見整然とした方位性をもって築営されている。しかし、内部構成は複雑化し、現象的には三つの建物小群に分解するとともに、

b群がその中心的存在として優位な位置を占めていることに気づくのである。

竪穴住居群から掘立柱住居群へ　I期集落は共存3～5棟の竪穴住居群と推定された。一方、II期集落の正確な数はわからない。ただ、a・c群がb群より劣る構成を想定する立場からc群については共存2棟、a群については1～2棟（スペース的にいって1棟の可能性もある）を考えたい。II期集落を共存5～7棟程度と予想する訳である。棟数の増加が見込まれるが、I期集落の3～5棟の住居群が各建物小群に縮小したと考えがたいから、同じ扇形緩斜面の居住集団を基本的には同一のレベルの集団と把握しておこう。これら居住集団は、近い親族関係にあるいくつかの小家族を包括する血縁的集団＝家族共同体とみられる。その構造的変化をたどってみよう。

さきに、I期集落は、扇形斜面を共有的に領有する唯一の単位とみた。その内部に占地の位置・方位そして同一の占地領域＝小区域を有する小群を見い出せないためである。もっとも対となる住居はある。7号住居址と8号住居址がそれで、いずれも方位・炉の位置を同じくし、かついずれも長方形プランで外周溝を有する。両者はきわめて近い関係にあることはいうまでもないが、にもかかわらず占地位置がひどく離れていることに注目せざるを得ない。

竪穴住居群は、しばらくおいて、三つの建物小群の集合体へと移行した。建物小群がそれに属するものとしての宅地＝小区域に築営の範囲を設けていることを重視すれば、居住集団内での小単位の自立の傾向を読みとることができる。しかし、これが家族共同体的構造の分解にむすびつかないということを、たんに同じ扇形斜面に占地しかつ方位性が等しいという点をとらえ、なお共同体として結束せざるを得ない、という説明では決定的に不十分と考える。

床面積を比較してみる。竪穴住居・掘立柱建物双方のうちもっとも広いのが5号住居址、ついで6号住居址である。前者は約57 m²、後者も約56 m²を計る。対して掘立柱建物ではb－7建物をのぞくと最高がb－4建物の41 m²にすぎず、そのあとはb－1・2建物の36 m²、b－5建物31 m²、b－3建物30 m²と続く。

5・6号住居址は傑出した規模をもつ。しかものちに匹敵する建物面積を見い出せない。これらは竪穴住居群の中核となる大形住居址であり、おそらく家族共同体の家長世帯の住居である。居住人員が多いという物理的な理由だけでなく、会合場・接客・共有道具等の保管等の機能を合わせもっていたと推定される。床面積からみて大形住居をのちの掘立柱建物1棟に単純に比定できず、また、宅地が1棟の掘立柱建物ではなく建物小群にぞくすることをふまえると、その性格と機能は、II期集落においては中心的建物小群に継承されることになろう。平坦な方形区画を有しコの字またはL字の建物配置をとるb群を、一方において家長世帯員の再編成として、他方における建物機能の分化として理解するのである。

さて、a・c群は、建物配置の上で、宅地としての区画性・安定性においていずれもb群に劣る。b群は扇形緩斜面の中段に位置する。斜面の中段に平坦な方形区画を造成することにより、居住領域が前・後合せて三分割されるのは必然のことであり、これを三小集団の均等な自立現象

の結果として評価はできない。居住集団内の小集団の自立傾向は、まず、家長世帯の独自化としてあらわれた。にもかかわらず、b群がまったく独立した位置をもとめていないことは、他の小世帯との相互扶助にささえられていることを示しているが、そうした関係は、a・c群にとってはなお別の意味をもつ。家長世帯以外の小世帯は、自立の萌芽をもちつつも、現実において家族共同体への依存を家長世帯への依存へと性格をかえざるを得ないからである。

I期集落からII期集落への移行を、客観的には家父長制的な構成への変質と把握したい。

参考文献

広瀬　和雄　「古墳時代の集落類型―西日本を中心として」『考古学研究』97　1978

小笠原好彦　「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』100　1979

小笠原好彦　「東日本における掘立柱建物集落の展開」『考古学論叢』1983

第IV章　結　　び

柳田シャコデ遺跡は、縄文時代前期から中期にかかるおとし穴遺構、弥生時代末期の竪穴住居址、および六・七世紀の集落の複合遺跡である。

このうち、中心的な遺構群は、六・七世紀の集落――正確には六世紀後葉から八世紀前葉にかかる竪穴住居群と掘立柱建物群であった。

なお、二・三の点について考察しておきたい。

1）居住集団の性格

シャコデ遺跡は、能登半島の付根、日本海にこぶのように突き出た眉丈山南端の海岸段丘上に位置している。シャコデ台地の南は砂丘がとりつき、西の海岸段丘は当時としては農耕にはきわめて不適当な地形条件にある。もっとも、台地の東には、邑知潟があり、海岸段丘にT字状となってとりつく砂丘の後背湿地帯が形成されている。

シャコデ遺跡の居住集団は、水田耕作よりまったく切り離された集団ではなかろうが、別の生業への関与も否定できない。

まず、須恵器生産との関係。本遺跡より六世紀末から七世紀初頭前後の須恵器が多量に出土し、とくに、大形土坑A・B、10号住居址にはおびただしい土器が投棄されている。この現象は、直接には、住居繁営の停止とそれにともなう集落のかたずけによるものであるが、たんにそれだけにとどまらない意味がひきだせそうである。

図版19に示したように、須恵器窯の窯壁塊にへこんだ杯が付いているもの、窯内で生ずる付着物がみられるものが大形土坑Bより出土している。また、大形土坑Aでも、ゆがんで波状になった甕の大きな破片が出土している。さらに、須恵器片の一部に別の個体の破片が融着しているものも少なからず目についた。窯内で生した不良品、屑物が集落にもたらされているこは意味のあることであり、すくなくとも居住集団が造窯活動ときわめて密接な関係にあることを物語っている。

柳田台地の背後丘陵には柳田古窯跡群が所在する[1]。テンジク、タンワリ、ウワノ、五郎兵衛山の各地点に須恵器窯が確認されており、六世紀前葉に始まり六世紀末～七世紀初頭と七世紀中～後葉に盛行期があるようで、八世紀には衰退するらしい。集落との直線距離は近い地点で600m、もっとも遠い地点で1,100m程度である。

集落の時期と窯の年代がほぼ符号するのは興味深い。居住集内に須恵器工人を擁していたのではなかろうか。あるいは、生産された須恵器の選別・整理がこの集落でおこなわれていたと推定することも十分に可能である。須恵器の大量出土、屑物品の頻出は、とくに六世紀末～七世紀初頭に際立っているが、II期の4号住居址覆土にも半焼け状の須恵器が数点出土しているので、須

恵器生産とのかかわりは一貫して続いたものと理解される。

つぎに海との関係。遺跡は、能登の玄関口と呼ばれるところに立地している。こうした点から海浜生業との関係も考慮する必要がある。具体的な遺物としては乏しいが、製塩土器が一点大形土坑Aより出土している。一点の出土で製塩との関係を論じるのはいささか飛躍しすぎであるが、観点として、塩業、漁業、海上交通・交易とのかかわりはふまえておくべきと思われる。

2）集落の位置

Ⅰ・Ⅱ期集落とも二世代程度を想定したが、その間にやはり二世代近い空白期を認める。両者をまったく系譜のことなる集団とは考えないので、この居住集団は、大局的にみると転遷をくりかえしていたことになる。こうした現象は、一定の社会的諸事情、政治的契機によっておるのであろう。まず集団的諸関係のなかでの位置について、シャコデ台地の眼下に形成された寺家遺跡の竪穴住居群・掘立柱建物群との比較のなかで若干みておこう。

寺家遺跡はシャコデ遺跡の南、約300m以南の砂丘微高地を占め、六～八世紀においては竪穴住居址37棟・掘立柱建物約30棟が確認されている[2]（図41—N・S区）。調査されたのは寺家遺跡の一部分にすぎないが、シャコデ集落との比較上いくつかことなった事実・傾向が指摘できる。小嶋芳孝氏の教示によりつつ、仮りにA・B・C期に区分して変遷をのべよう。

A期。七世紀初頭前後の竪穴住居群が1グループ（4棟）確認されている。シャコデ遺跡Ⅰ期集落に併行する。方位は一定しないが接近して営まれ、弧状または半円形に並ぶものかと推定される。規模は小形で、一辺7mをこえる大形住居は見あたらない。

B期。八世紀前半の竪穴住居群5グループが確認される。A期とことなり、竪穴住居はきわめて整然としかつ画一性がみられる。プランはいずれも7×4m前後の長方形、南辺の南東コーナーよりにカマドを付設し、さらに方位をW—20°—N方向にほぼそろえている。なお、1棟であるが、大型の竪穴住居があり、四主柱穴のほかに、側柱風に壁にそって柱穴のみられるおそらく構造的には掘立柱式の建築法によったと思われる特殊な竪穴がある。

C期。八世紀後半代。八世紀の半ばにようやく、竪穴住居が掘立柱建物に移行する。竪穴住居址との位置関係等よりみて連統的かつ一斉に移行したと推定される。規模は桁行5～6m、梁行3.5～4.5m程度のものが多い。北に位置する東西棟を含むグループについては検討を要するが、全体として規棟は小さく、床面積の上でも竪穴住居からの単純移行が想定できる。

シャコデ集落と対応させると、Ⅰ期集落とA期集落は併存し、Ⅱ期集落はB期集落に先行し、一部併行する。B期集落は、中葉近くになって盛行するようであり、その意味では相前後する関係のように見えるが、いずれも方位的に等しい方角に向いていることからみて、なお、密接な関係が指摘される。

シャコデ集落を寺家集落に比較すると、前者が優位な位置にあることは次の点より明らかである。第一は、集落の構成としてはⅠ期集落と寺家集落は変るところがないが、前者にみる大形の

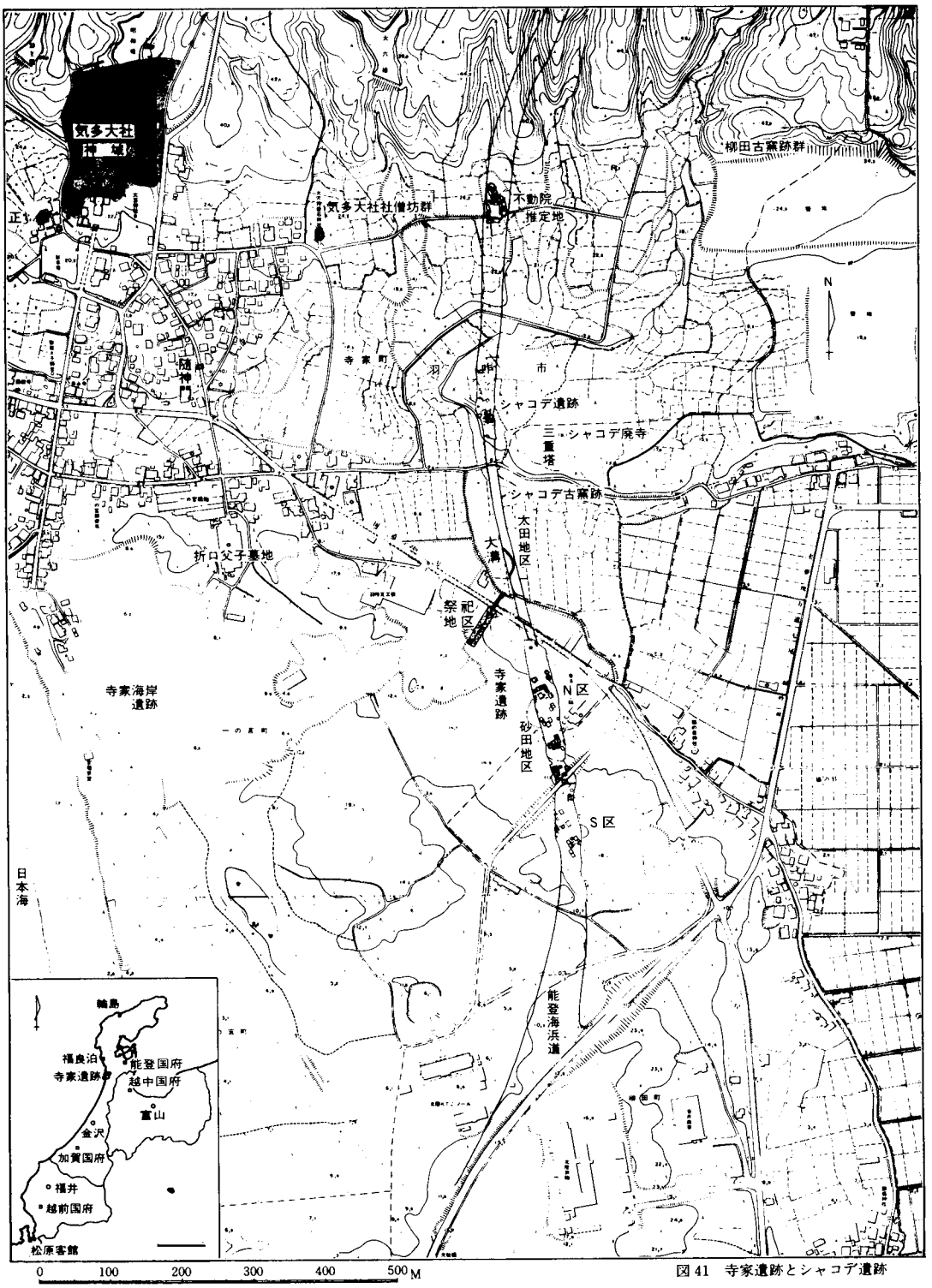


図41　寺家遺跡とシャコデ遺跡

住居が後者にみられない。掘立柱建物への移行が七世紀後葉におこったのに対して、寺家ではなお竪穴住居に居住しているのが第二点。第三にII期集落b群のコの字・L字の建物小群にみる家長世帯の独自化の傾向が、後者B期の竪穴住居群にかいま見ることができない。

シャコデの居住集団は、彼らを含む大集落のなかでは、上位に位置するものとして、有力な階層と考えられる。

3）集落の形成・画期・廃絶

シャコデの居住集団は、六世紀後葉から七世紀前葉にかけては、大集落のなかで中心的な集団として機能していた。再び占地した七世紀後葉には掘立柱建物へと移行し外観的にも有力階層としての体裁を整えた。その廃絶に連動するように寺家集落が本格的に形成され出す。その間の諸事情については、今後おおいに研究されることになろうが、気づいたことをのべて結びにかえたい。

○シャコデ集落の形成

シャコデ台地先端の扇形緩斜面が利用され出すのは六世紀前半代であるが、集落の本格的形成は、六世紀後葉に降る。五世紀より、シャコデ台地を含めた海岸段丘および背後丘陵は、造墓地帯として位置づけられていた。五世紀前半代の滝大塚古墳（円墳・径約70 m）をはじめとして、柳田、滝、柴垣の各地区で古墳群が形成される[3]。羽咋地域の支配権力が、能登の玄関口にあたるこの地帯に墓域をもうけているのであるが、その中に六世紀の前葉から中葉にかかる時期にすでに横穴式石室をもつ古墳（柳田山伏穴古墳・前方後円墳・全長49 m、滝3号墳・円墳・径約20 m）を認め、さらにT字形横穴式石室を有する古墳[4]（柴垣ところ塚古墳）が確認されている。

能登でもっとも早く横穴式石室を受容し、かつ、北九州から山陰地方に分布するT字形石室をも知ることは、彼ら被葬者が海の道と深い関係にあり先進的な文物・文化を摂取する立場にある首長層をなしていたことを示している。のちの寺家の祭祀の発展へとつながる潜在的な条件をここに見い出すのである。

ところで、六世紀後葉における集落形成は、確認されるかぎり、弥生時代末期以来のことであった。その一方で、六世紀後葉になると滝・柳田いずれの古墳群も造墓を終束している。地域の位置づけ・役割の微妙な変化が、あらわれたのである。シャコデ集落の居住集団が造窯活動と密接な関係にあると推定されること、また、地理的条件から海浜生業一般とも深くかかわるとみられることをふまえると、在地の生業・生産構造の革新への要請がシャコデ・寺家含めた人間集団の定住を促したものとみられる。こぶのように突き出た滝崎の岬に新たに造営された群小古墳群＝オーショウジ古墳群（小円墳6～7基確認、7世紀初頭前後）は、彼らによる築造と思われる。

○シャコデII期集落の成立

シャコデ・寺家両遺跡ともしばらくの空白期ののち、改めて集落が再編成される。シャコデII期集落の成立を寺家遺跡の祭祀[5]との関係で整理しておこう。

寺家での本格的な祭祀がII期集落の存続期間中にはじまることは二つの事実より指摘される。寺家集落の北西におびただしい祭祀遺物が集中的に出土する区域がある(祭祀地区)。祭祀場を外界より画するように土塁状遺構が築かれているが、これを築成したのが八世紀初頭前後とみられること。第二に、寺家B期集落の中にひとり大型住居址があることを指摘した。覆土中より海獣葡萄鏡を出土し、同じく八世紀初頭に属する。

シャコデ遺跡と寺家祭祀地区の間は約250 mである。祭祀の開始がII期集落のいつの時点であるか、盛行期か衰末期か、によって評価はことなってくるが、少なくともシャコデの居住集団それにまったく無関係であったとは考えがたい。

七世紀前葉に、集落形成がいったんとだえるのはシャコデ・寺家に共通している。また柳田古窯跡群においても七世紀の前葉から中葉にかかるころに空白期があるようである。集落形成・生産活動の一時停止の意味するところは、今後の課題としたいが、順序としては、II期集落の成立→寺家の祭祀の開始→寺家集落の形成として発展してゆく。シャコデII期集落は、律令国家成立期にあって、この地域が新たな役割をになわされてくる、そういう予測または予定のもとで再登場して来たといえるかもしれない。柳田五郎兵衛山窯に県内最古の円面硯・陶馬が出土していることにひとつ注意しておきたい。

○シャコデ集落の廃絶

八世紀の前葉から中葉にかかるころにシャコデ集落は廃絶した。集落構成よりみて寺家集落に解消したとは考えられず、また、柳田古窯跡も衰退していることから、別の所に転出したことが考えられる。

この直接の契機はシャコデ廃寺にあると思う。シャコデ廃寺は、71年に塔跡が発掘調査されている。塔建物は、三間×三間、柱間1.5 m(五尺)、一辺4.5 mの建物になると推定され、方位はほぼ真北を向く。善正寺にある心礎石は径67 cm・深さ12 cmの浅い円孔を持つしっかりしたものである。平安後期までに基壇が削平され別の建物がつくられており、建立時の瓦等は未発見であるため、時期の特定はむずかしいが、八世紀代のおそくない時期に寺院として成立していた可能性が強いと推定されている[(6)]。

シャコデ遺跡の位置するシャコデ台地の先端部は、寺域にはおそらく含まれてはいないが、しかし、きわめて接近しており、寺院の建立が集落の廃棄と関係している疑いは十分にある。

いま、シャコデ台地、柳田古窯、寺家砂丘との展開を概観すると表のようになる。

展開をあとづけてみると、寺家での本格的な祭祀の関始につづき、シャコデ廃寺の建立によって、地域の様相が一変することがわかる。寺家B・C期集落は、祭祀の開始にともない、それをささえるものとして他律的に編成された人間集団とみられる。シャコデ廃寺は、羽咋郡の郡領層を構成したとみられる羽咋君の氏寺と目され、のちに気多神宮寺へ転身したようだ。一方、寺家遺跡より「宮厨」と書かれた墨書土器が出土し気多神宮・大社との関連性は確実となってきた。現在の気多大社の社地

は海岸段丘上にあるが、社地の周囲の水田の分布調査結果[7]（78年度調査）によると、奈良時代にのぼる遺物が皆無といってよい状態であり、ここに古代気多大社の位置をもとめることはできない。したがって、それを寺家の砂丘上に想定するのはこの点からみても妥当である。

600　　700年

柳田古窯　……盛行→（中断？）→盛行　→衰退

シャコデ台地　……Ⅰ期集落→中断→Ⅱ期集落→転出

◎シャコデ廃寺 ——→「気多神宮寺」

寺家砂丘　　A期集落→中断　→　B期集落・C期集落→

◎寺家祭祀 ——→気多神宮・気多大社

シャコデⅡ期集落の廃絶は、一定の役割を終えての転出ととらえられるのか、寺院建立にともないなかば強要的な移動をしいられたのか、あるいはその両面をそなえていたのであろうか。このことは、Ⅱ期集落と寺家祭祀の本格的関始について評価にもかかわって今後の課題となるが、寺家祭祀地区より古墳時代後期にぞくするとみられる勾玉・金環が出土しており、祭祀の素地がシャコデⅠ期・寺家A期集落のころにすでに萌芽していたらしいこともなお留意しておくべきであろう。

在地で居住活動する人間集団の営みと一方における政治構造の変化・社会的要請の変換を今後、事実にもとづき具体的に明らかにしてゆく作業がもとめられている。

注

(1) 田嶋明人「柳田古窯跡群」『羽咋市史』原始古代編　1973
福島正実『羽咋市西出川1号窯」（現地説明会資料）　1981
なお、福島氏より柳田古窯跡群の具体的な資料の提供と教示を受けている。タンワリ窯の北約200mの所に八世紀前半代の窯が確認されており、現在のところ、これが下限のようである。

(2) 小嶋芳孝『寺家』1978年度概報1979、同1980年度概報1981

(3) 吉岡康暢・中条茂雄・田嶋芳孝「羽咋の古墳」『羽咋市史』原始・古代編　1973
河村好光「滝古墳群」『石川考古学研究会々誌』24号　1981

(4) 1983年に羽咋市教育委員会が調査

(5) 小嶋芳孝氏の教示による。

(6) 浜岡賢太郎「羽咋の原始時代」『羽咋市史』原始・古代編　1973　なお、谷内尾晋司氏の教示を得た。

(7) 河村好光『羽咋市一の宮遺跡A地区』　1979

追記

脱稿後、シャコデ遺跡の占地する台地先端部の南側斜面に六世紀末ないし七世紀初頭の窯があることを知った。この事実より、さらにシャコデ遺跡と造窯活動との関連性がさらに強くなった。

シャコデ台地と寺家遺跡（上）

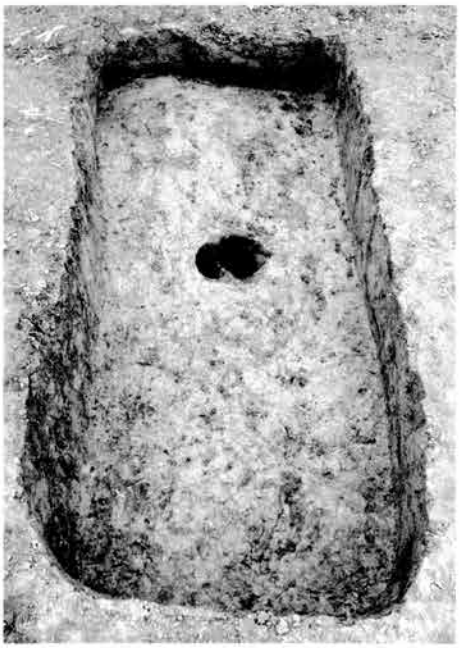
図版2　シャコデ遺跡調査区全景

図版3　調査前と調査後

▲調査前（西より）

▼調査後（南より）

図版4　縄文土坑(1)



▲土坑 42

▲土坑43

◀土坑17

▶土坑24

図版5　縄文土坑(2)

◀土坑29

▶土坑28

◀土坑38

図版6　縄文土坑(3)

▲土坑 2

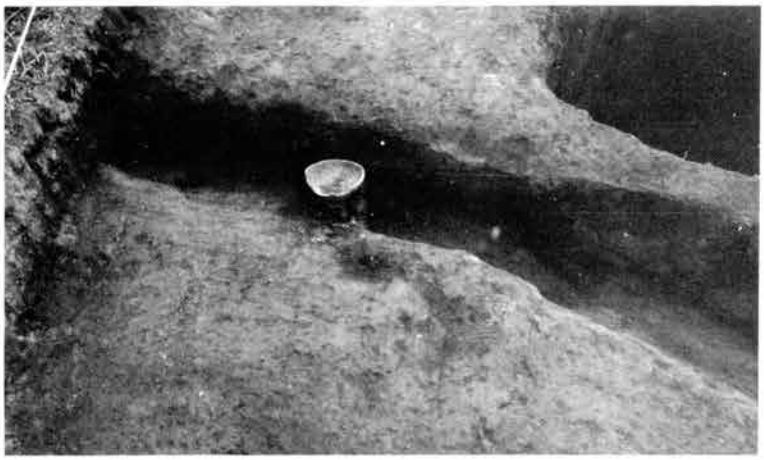
▲土坑 19

▼土坑 9

図版7　1号住居址

◀1号住居址および縄文土坑

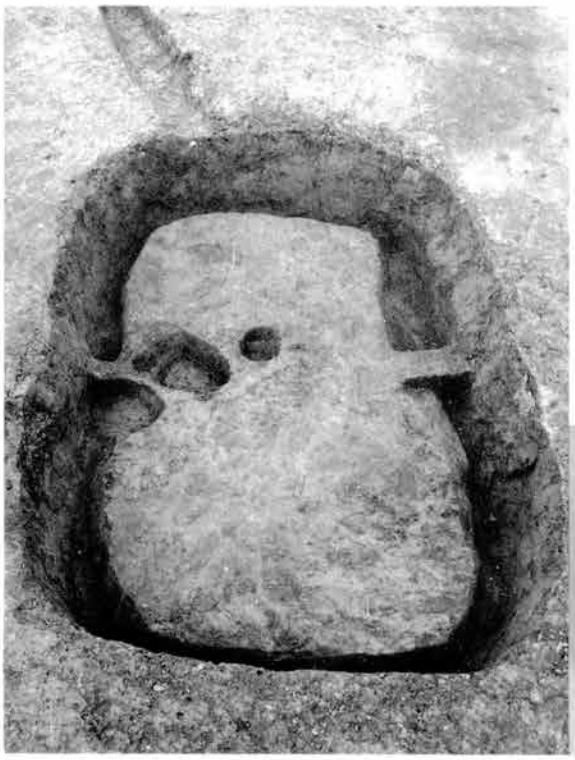
▲台付椀



◀同出土状態

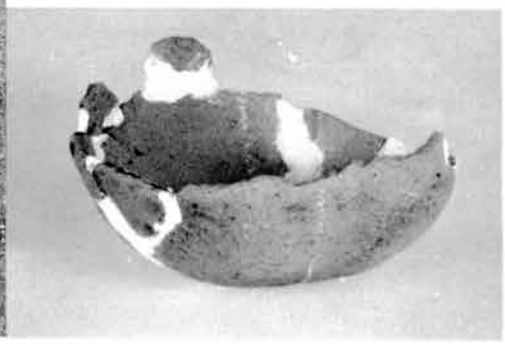
図版8　2号住居址

▲2号住居址（東より）



◀P－2（弥生土坑？）

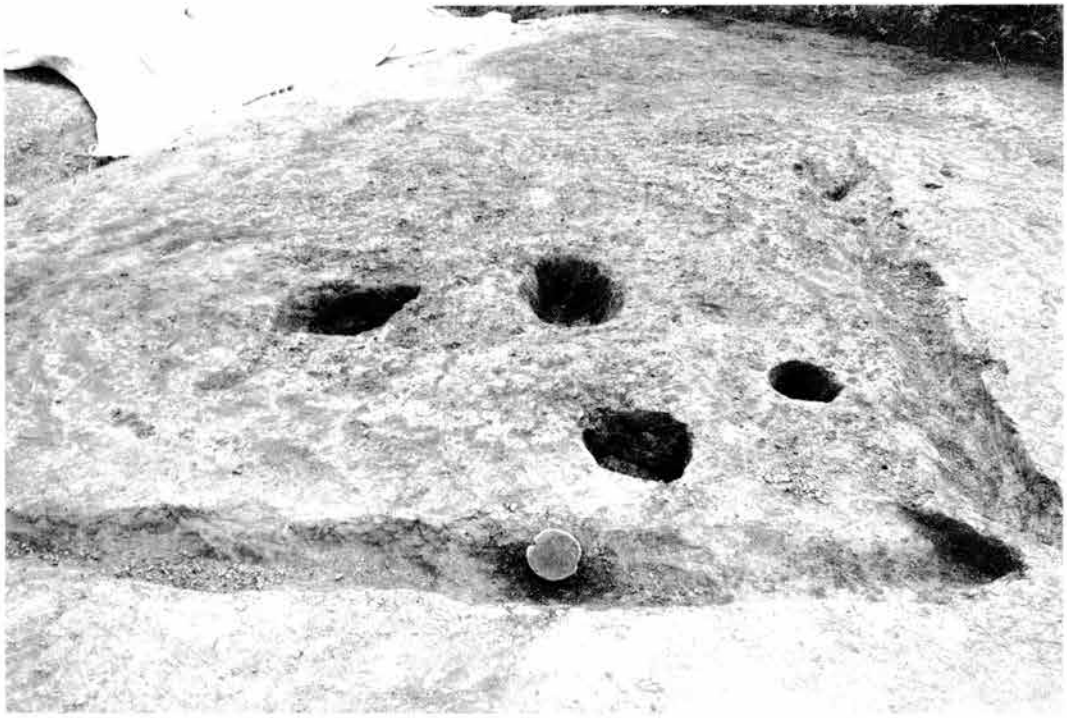
▼出土土品（土師器椀）



図版9　3号住居址

▲南より

▼東より（周溝内に土師器）

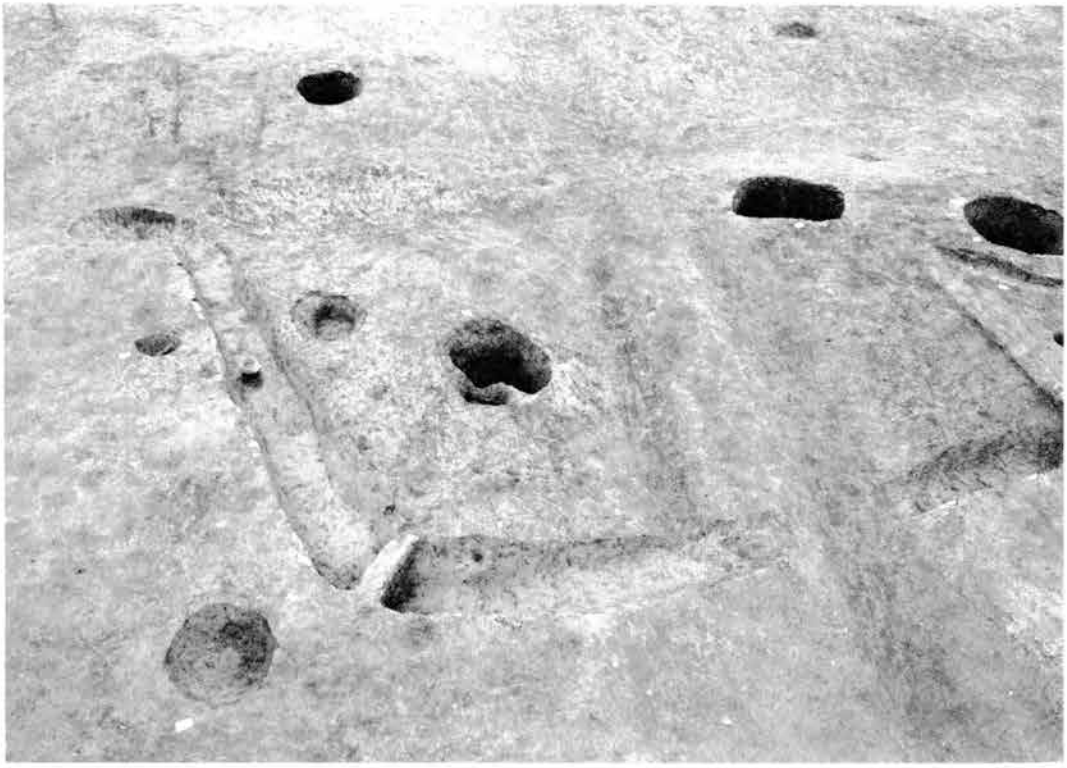


図版10　8号住居址

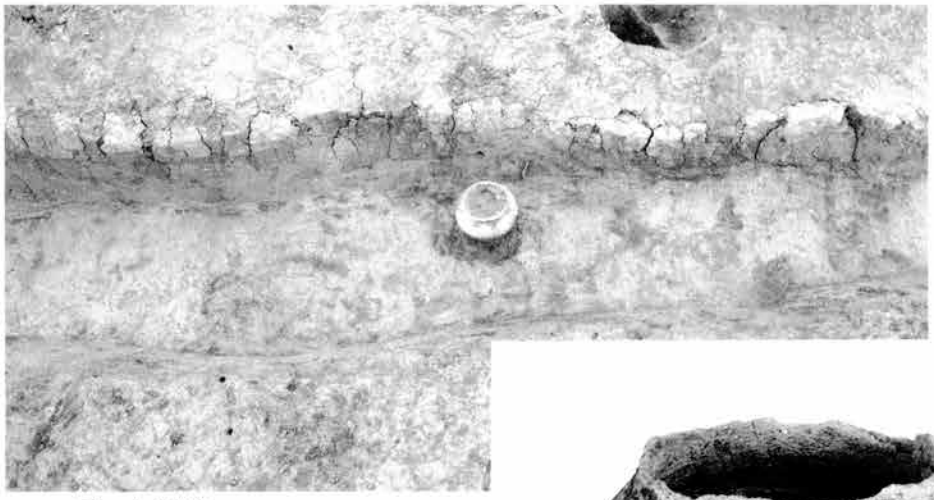
▲北より

▼東より

図版11　6号住居址



▲北東より



▲土器の出土状態

▶土師器壺

図版12　5号住居址

▲東より

▼北東より

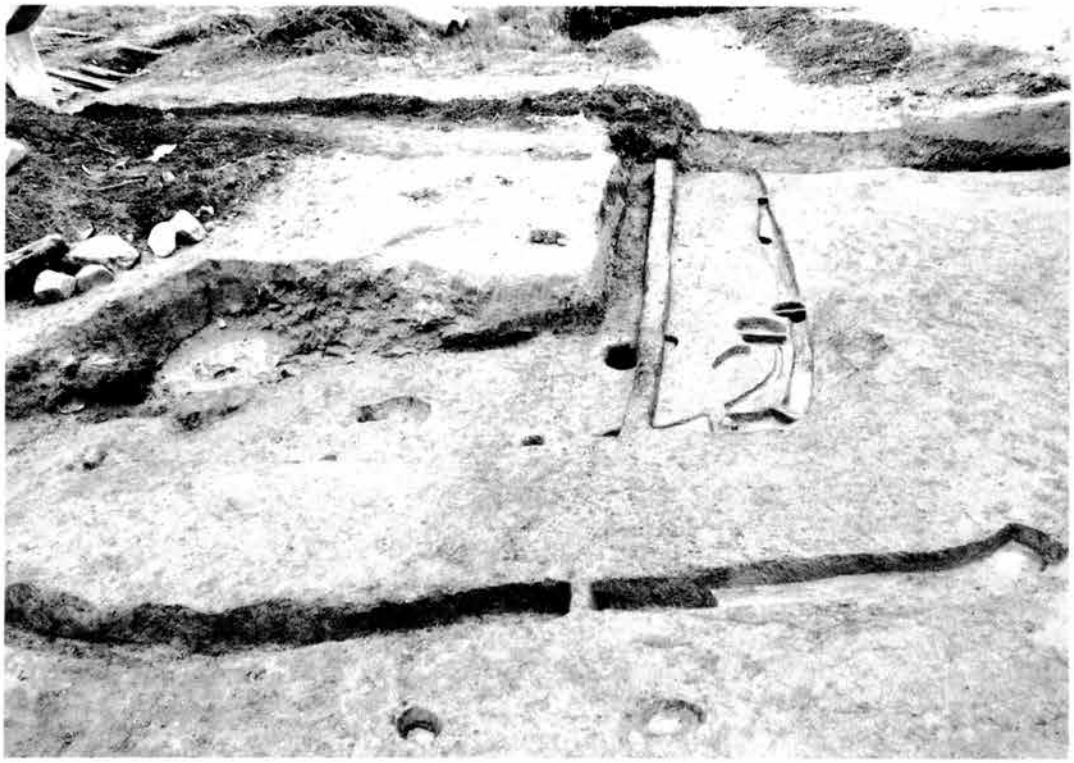
▶須恵器5の出土状態

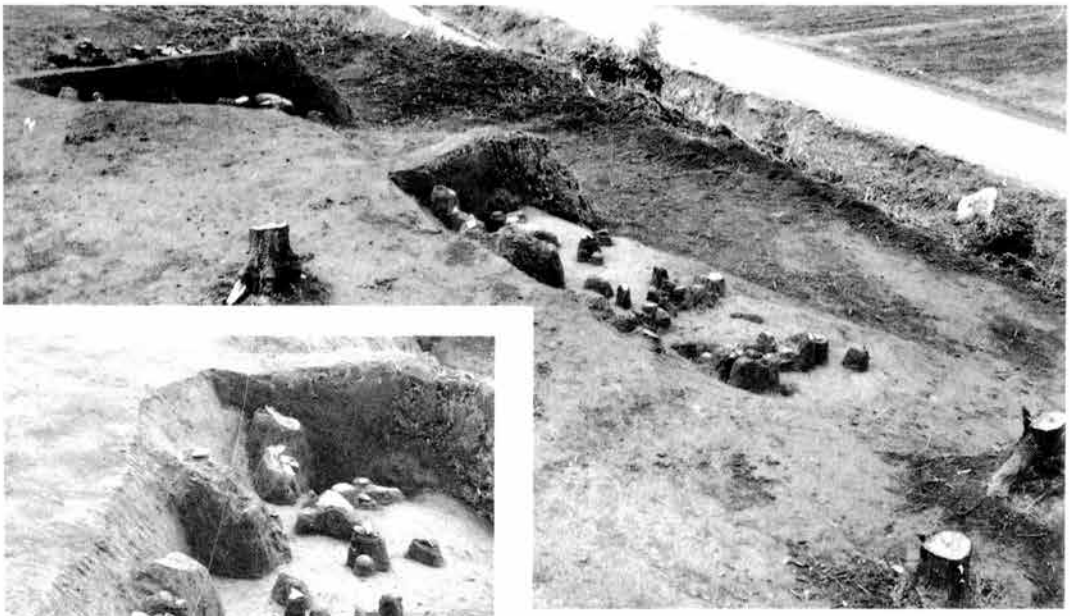
◀左(4)
右(5)

図版13　7号住居址

▲南より

▼東より



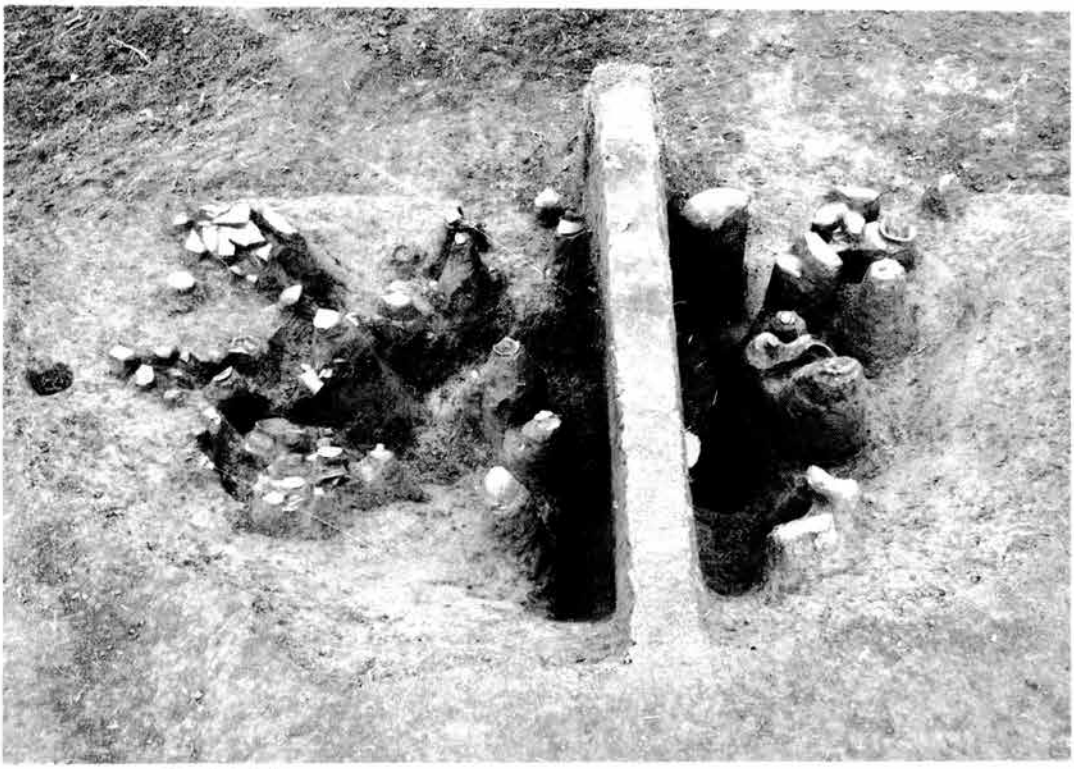


▲東より

◀土器の出土状態

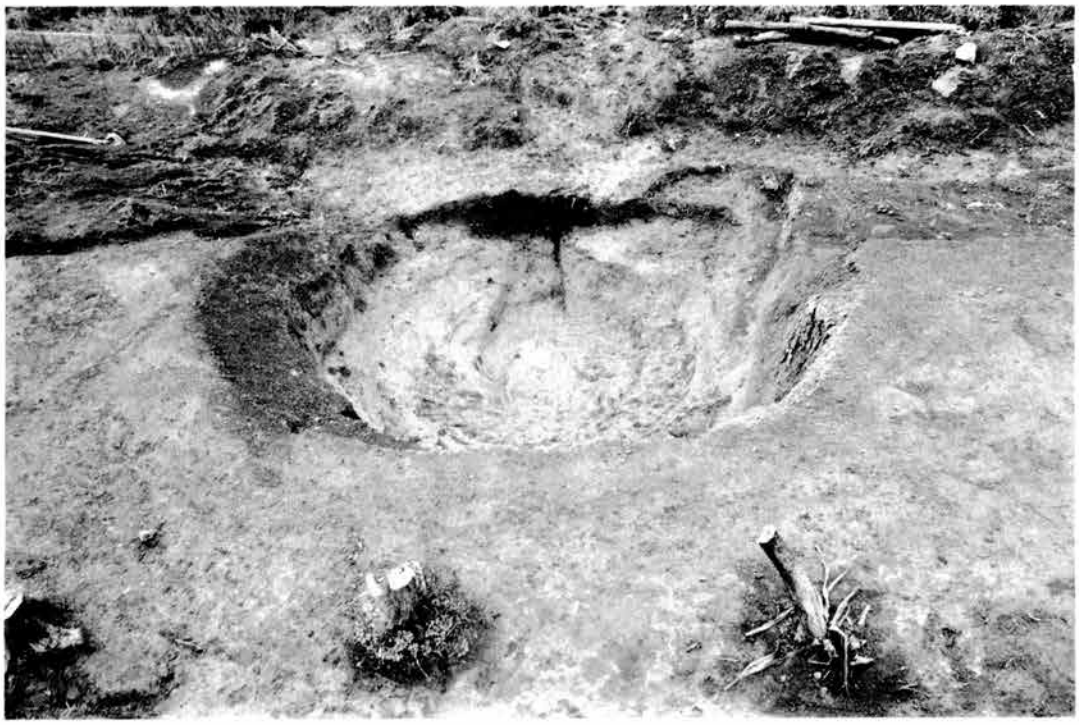
▶出土土器

図版15　大形土坑A



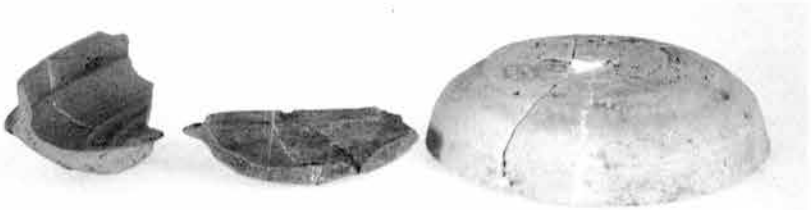
▲土器の出土状態

▼完掘後

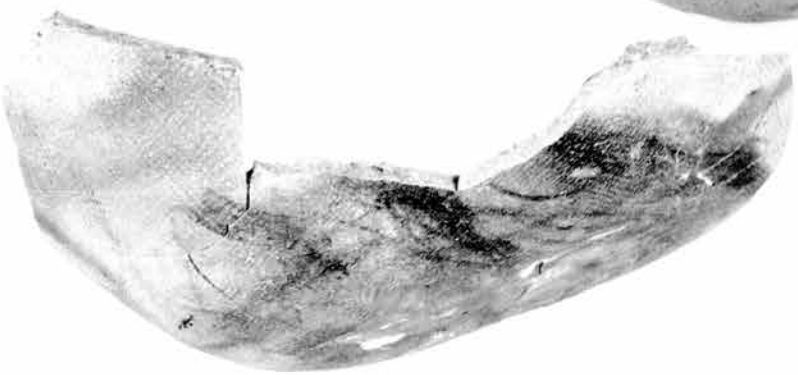


図版16　大形土坑A出土土器

◀▶
13



▲11



◀底がゆがんだ甕

図版17　大形土坑B

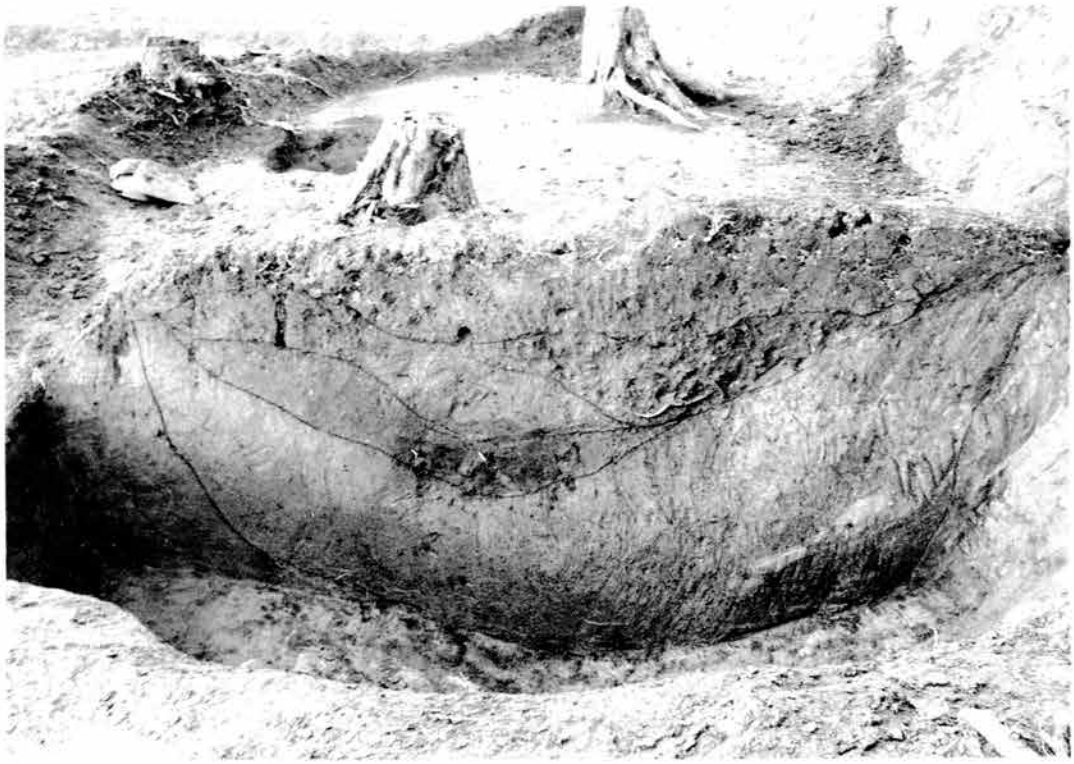
▲大形土坑B　▲10号住居址　▲大形土坑A

◀上層土器群

図版18　大形土坑B

▲下層遺物の出土状態

▼断面図



図版19　大形土坑B出土土器

上層遺物

窯壁塊の付▶
いた須恵器

下層遺物

▼14

▼13

図版20　4号住居址と外周溝(1)

▲外周溝

▼東より（住居址コーナーと外周溝）

図版21　4号住居址とその遺物

▲トンネル状遺構

▼住居址内出土土器

図版22　4号住居址と外周溝(2)

▶トンネル状遺構の遺物

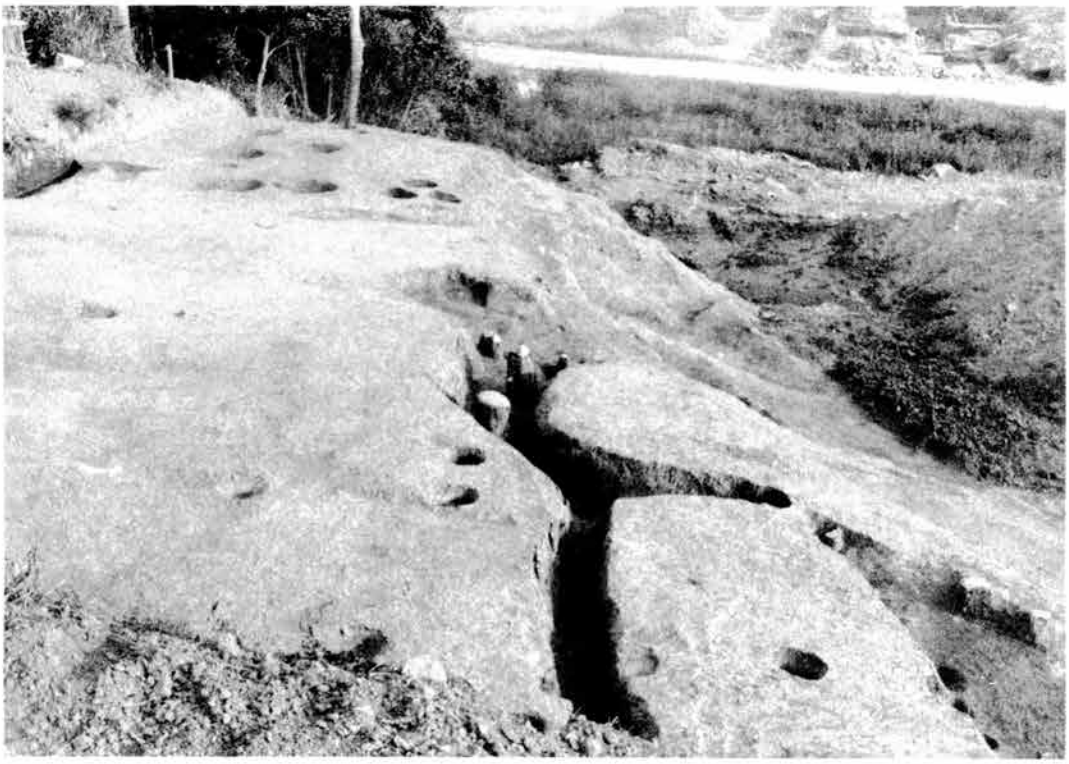
▼d

図版23

a-1・a-2建物

▲西より

▼北より



図版24　b建物小群(1)南より

図版25　b建物小群(2)北より

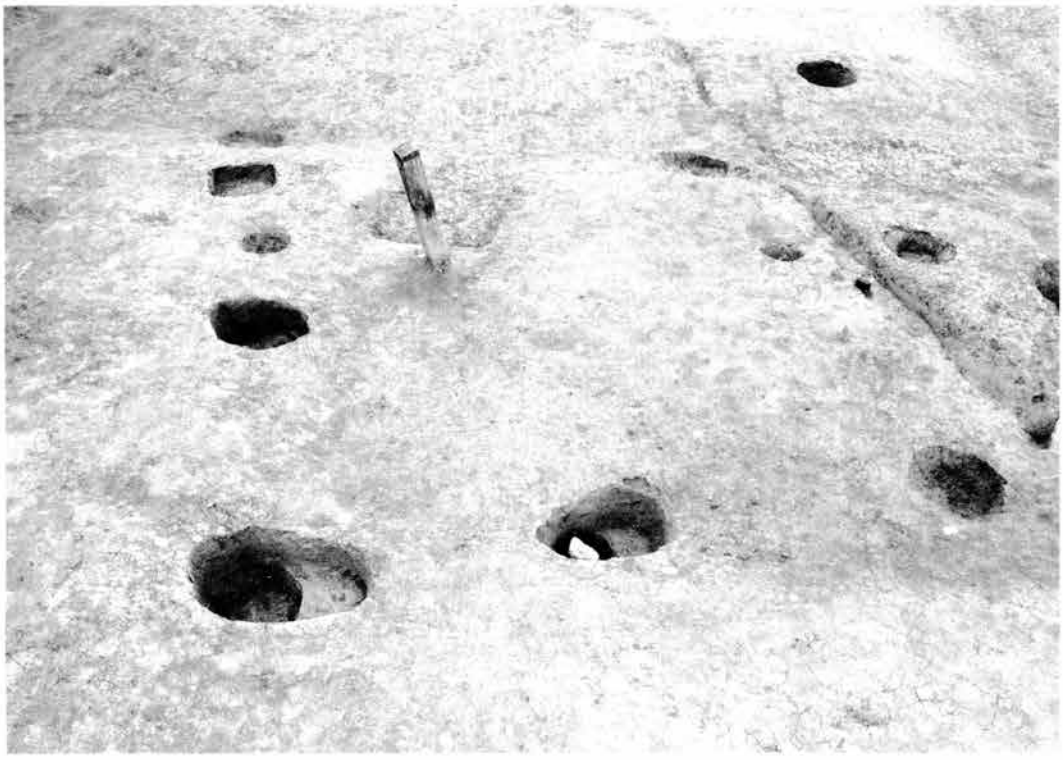
図版26　b建物小群(3)南より

図版27

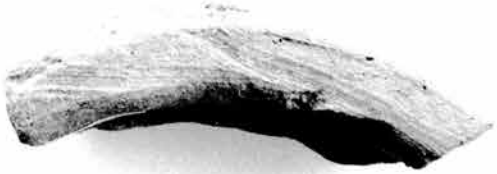
c-1 建物

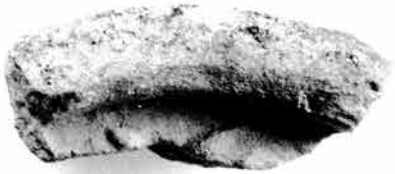
▲南東より

▼北より



図版28　シャコデ遺跡出土瓦・特殊遺物





◀製塩土器（大形土坑A）

▼紡錘車

▶容器状土製品

図版29　シャコデ遺跡出土瓦

羽咋市シャコデ遺跡
能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書III

発行日　昭和59年3月

編　集
発行者　石川県立埋蔵文化財センター
金沢市米泉町4丁目133番地

印刷者　㈱　橋　本　確　文　堂
金沢市大手町2番35号